
はちゅね H I G R A D E

くまっぽいあくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はちゆね H I G R A D E

【Nコード】

N 2 3 9 5 I

【作者名】

くまっばいあくま

【あらすじ】

初音ミクSSです。

キモヲタ(?)マスターとミクが曲を作ったり、ステージに上がったりとかするお話です。

リンレンとか他のボカロもです。

いちばん

「お帰りなさい、マスター」

オレが買い物から帰ってくると、ツータールの緑のネクタイの女の子が玄関先で正座していた。

三つ指ついてたりする。

「おうっ!？」

オレは、ちよつとびっくりして、中に入るのをためらった。

「なんだよ、いきなり?」

「マスターが『例のもの』を買ってくると、ボカロ式コスモで感じたので…」

確かに買い物してきたけど…

きゅぴーん!

いきなり、女の子が目を輝かせたかと思うと、

「きえええーっ!」

「のうおおっ!？」

飛び掛ってくるので、オレは思わず身構えた。

「やりのッ、ゲットオッ!!!!!」

買い物袋を奪い取って行く。

この、アホの子めが!

「おい、何を…」

オレは詰め寄ろうとしたが、

ばばん。

女の子は全く無視して、買い物袋から『例の物』を取り出していた。

「はあっ！」

奇妙な構えで『例の物』を二本持ち、踊り始める。そう。

女の子のカラーと同じ、緑の、その物体は、ネギだ。ネギを買ってくる決まってこれをする。

絶対、回路狂ってるし。

「はあー、これやるとすかつとするのよねー」

ミクは一通り踊ると、額の汗を拭いた。

いや、ボカロが汗出すなよ。

「マスターもやります？ ……てゆーか、やれ！」

「誰がやるかつ！？」

オレは拒否ったが、

「つーか、ネギ折れてんしよ」

「都会のネギはイケませんねー、ネギはやっぱ宮城県産が一番ですよっ」

「なんだ、そのピンポイントな指定？」

「ネギ作りの名人がいます」

「……もう、それ以上言っな」

オレは、コメカミを押さえながら言った。

「夕飯つくるから、ジャマすんなよ！？」

「はーい」

ミクは折れたネギを弄びながら、つまらなそうに答えた。

*

初音ミクを購入したのは、1ヶ月前のことだ。

オレはボーカロイドを購入するのは初めてのことだったが、これほどイカれた商品だとは思わなかった。

こんな出荷すんな。

感想である。

でも、容姿は可愛い。それに情も移ってきて今更返品もできそうにない。

でも、アホだ。

アホの子だ。

「そんなにアホアホ言わないでください、マスター」

「黙れ、アホの子をアホの子と言って何が悪い？」

「ごろわるッ」

「るせー」

オレはキッチンに立ち、野菜を切る。

親の敵みたいに切って切りまくって、肉と一緒に炒める。

その他には豆腐の味噌汁を作った。

一人暮らしが長いので、自炊は結構できる方だと思う。

ちなみにミクは全く家事ができない。

「ボカロだから、歌うのが本筋の仕事だもん」

ミクは、あたしにそれ以外の事やらせんな、って視線を突き刺してくる。

「ま、それはいいからネギよこせよ」

「はい、どうぞ」

ミクは素直にネギを渡し、茶の間に戻ってテレビを見始める。

本格的に無能なロボットだ。

しかも、本業の歌もヘタだったりするので…

「ヘタっていうなー！」

ミクはネギ二刀流で、オレの頭をド突いた。

「やめろ、髪がネギくさくなる」

「ネギは栄養があります、髪にも良いです」

ミクは生のままでネギをかじった。
うっ。

コイツ、なにもん？

「小さいころ、田舎のおばあちゃんとかが、『ネギは麵の毒を消すんじゃない！』って言ってますでしたか？」

「いつてねえよ！ 何で、ばあちゃん、脅かし口調なんだよ?!」
「ネギは万能なんです!」

ミクは力説した。

イカン、こいつネギ信者だ。

「いいから、ネギよこせ…… って食べちまいやがったか…」

「うーん、美味美味」

ミクはネギくさい息を吐いた。

「蕎麦屋さんのおいさせてないで、ちゃんとケアしろ」

「ったく、いちいちうるさいですね、マスターは」

「はやくいけ、こら!」

オレが切れて叫ぶと、ミクはびゅんと走って風呂場に駆け込んだ。

ミクの他にも、働く車を取り回す殺人的姉弟とか、軟体動物と合体してる姉さんとか、弱音吐きまくりの姉さんとか、寝てばかりの娘さんとか、ドリル髪の娘さんとか、キャラや派生キャラがいるらしい。

うーん、なんつーもの開発してんだ?

昔は単なる歌うソフトだったのに。(ネット情報)

誰なんだろう、本当に口ボにして売り出そうなんて思ったのは。

メイドロボ並にアホな試みだが、まあ買ってしまったオレが何か言うのもおかしいが。

「できたぞ」

オレが夕飯を運んでくると、

「わーい」

ミクは大喜びで、フォークとナイフを振り上げた。

ネギ踊りのクセか?

無邪気なところは可愛いんだがな。

「毎日、ご飯を作ってくれるオレ様に感謝しつつ食べ」

「ははー、ありがとーござーますだー」

ミクは時代劇に出てくる農民みたいな口調で平伏する。

「うむ、苦しゅうない」

「御意！」

「それは、分かりましただろ」

「いただきまーす」

「シカトかよ!？」

とか毎日がアホっぽくはあるが、ある意味に充実した生活になっていた。

にばん

風呂に入って（もちろん別々）、一緒にテレビを見た後、ミクをPCに接続し、歌の練習を始める。

「ぽっ、ぴっ、ぽーっ…」

ミクの口から機械音が漏れてくる。

ちなみに有線だ。

無線でも接続できるようだが、有線の方が確実である。

タイムラグもないし、無線は他のを拾ってしまうからな。

「らららー」

まずは発声から。

「ドレミファソラシド」

音程を合わせて行く。

が、これが見事に狂ってる。

「ぐっ…」

ミクは齒軋りしたようだった。

「こんな調子で出場なんかできるかよ」

オレは容赦なく言った。

そう、オレたちの目標はボーカロイドが集う大会に出場することなのだ。

ボーカルはミク。

オレは作詞作曲編曲などボーカル以外の全部を担当。

ま、オレにしたって歌を作るのは趣味だが、それほど上手いわけでもない。

「や、やってみせますッ」

「いつもながら、根性だけはあるな」

「それだけが取り柄ですから」

「それは分かってるが、根性だけじゃ勝てないぞ」

「うー」

涙をためて、うつむく。

うーむ、不謹慎かもしれないが、可愛いね。その表情。性格は破壊的にダメだが。

「今のままじゃ、歌って踊れるアイドルにはなれんな」

「そうだ！ マスター、わたしに合う曲を作ってくださいッ！」

ミクは急に叫んだ。

うるせー。

「急に叫ぶな、耳キーンとすんだろ」

オレはPCの画面に開いたソフトを操作する。

アップテンポのエレクトロ系な曲が流れ出す。

「……いつ聞いても月並みな曲ですね」

ち。さっきのお返しかよ。

「歌と曲、どっちが重要かって言ったら、歌だろ」

「もっところハートにきゅんとくる曲だったら、歌えると思うんです」

「文句を言うな、オレにそんな才能はない」

「ち、諦めはえーの」

「つーか、月並みな曲でもボーカルの歌唱力があれば何とかなるし」

「わたしに歌唱力を求めないでください」

「いや、おまい、ボーカロイド……」

「とにかくっ！」

ミクは逆切れ。

「マスターはわたしの気に入る曲を作ってください！」

「ち、分かったよ」

オレは折れた。

「でも、歌唱力をつける努力はしろ」

「……保証はできませんが、努力はします」

ミクは最後まで抵抗した。

でも、実際、どうすべえ。

急に技量があがるわけねーし。

二人ともな。

翌日、オレはミクを連れて散歩に出かけた。

休日なんで、人も多い。

最近はおーカロイドなんか珍しくもない存在になってきている。

誰も、ミクを連れていても気にしない。

近所の河川敷に行く。

「気持ちいいですねー、マスター」

ミクは両手を広げて空気を吸い込むマネ。呼吸し取らんだろうが。

「ああ」

オレは気のない返事。

「いけませんねー。そんなんで、いい曲作れませんよ」

ミクはノンノンって感じで人差し指を振った。

もう片方の手は腰に置き、オレを覗き込むようにしている。

うん、萌える。（笑）

「……」

ミクは何だか汚いものを見るかのようにしていたが、

「つたく、マスターはキモヲタですね」

「ぐはあっ……」

テメコノ、一直線に心臓突き刺すんじゃないよ。

「な……」

「いい曲を作るには、作曲者の心が大事です」

「……心そこになかりしば……ってヤツか？」

「分かってるじゃないですか」

ミクはニコリと笑った。

……それが、かなり可愛かった。

「見たり聞いたり、感じた事を素直に表現すればいいんです」

「お前、それが分かっててなんで歌ヘタなんだ？」

「うぐう……っ」

今度はミクが呻く番だった。

「あ……」

「あッ……」

帰り道、黄色い双子にばったり出会った。

どういう訳か、工事現場で働く車……ロードローラー（黄色）に乗っている。乗用車にすんなよ、んなもん。

言うまでもなく、ミクの妹弟たちだ。

ちなみに、この黄色い姉弟にはロードローラー（黄色）が付いているので希望小売価格が一千万円を超えるそうだ。

「ミク姉、こんにちは」

「こんにちは、ミク姉」

リン＆レンが元気に挨拶する。

「あ、リン＆レン、元気？」

「ミク姉は元気なさそうだね」

レンが言った。

「舗装してあげる？」

リンが言った。

笑顔で。

……………。

おい、会話になってないだろ。

「ロードローラーでしてあげる！」

リンは元気一杯だ。

でも、怖いのはなぜ？

「リン……ちゃんと会話しろよ」

レンが頭を抱えて言った。

……どうもこいつもトチ狂ってやがる。

「うに？」

リンはロードローラーを道の脇に駐車し、エンジンを切り、降りた。

ちなみに販売されるに当たり、ブレーキはちゃんと着けられるこ

とになった。

ブレーキを着けるか否かは、発売元及び製造元にて激論が行われたとかいないとか。

リン&レンは製造段階で交通法規を叩き込まれ、しっかり自動車学校に通って卒業し、地元の免許センターで免許を取ってから出荷される。

……交通法規が守れて、なんでまともな会話できないんだろ…？

「ミク姉、どうしたの？」

リンはミクの顔をのぞきこむ。

うん、萌えー。(笑)

「あ、キモヲタマスターさん、こんちわ！」

「こ、こらー！」

レンが遮ろうとしたが、遅かった。

……なんやと、こらー！？

「リンちゃん、ちょおおおと躡がなってないよーだねえ？」

「ご、ごめんなさい、よく言い聞かせますから！」

レンが必死にフォローしようとするが、

すちゃ。

オレは携帯を取り出していた。

電話帳を呼び出し、こいつらのマスターにかける。

「あわわわ…」

ミクは無駄に慌てて、ぐるぐる同じところを回ってる。

『はい』

ワンコールで相手が出た。

「オレだ」

オレは相手の返事など待たず、しゃべった。

「お前ンとこの双子が、すげー失礼な挨拶すんで、一言忠告しとこうと思ってな」

『問題ない、私が教えた』

……なんだとこら？

「んだと、てめ…」

『ふん、そんなことで私の貴重な時間をムダにするな』
相手は電話の向こうで鼻を鳴らした。

「こ、このっ…」

オレは怒りのあまり言葉がでない。

『じゃあな』

がちゃん。

切れた。

「じゃあ、ボクらはそろそろ…」

「じゃあね、キモヲタマスターさん！」

リン&レンはロードローラーに乗って去って行った。

「あの…マスター？」

「上等じゃねーか、オレの中にマグマがたぎってきたぜイ」

「……またアニソンですか？」

「うるさい」

オレは言った。

このフラストレーションを何かにぶつけないければ気がすまない。
それにはアニソンだ。

熱血できる曲だ。歌だ。

「さ、帰って歌うぞ」

「ひー」

ミクは弱りきった顔をした。

さんばん

翌日。

学校へ行き、授業を受ける。

ちなみにミクはお留守番。

そう、大学生なのだ、オレは。

授業が終わると、ヤツの姿を探す。

ヤツだ。

昨日、オレをコケにしたヤツ。

いた。

図書館だった。

本を読んでいるメガネが知的な感じのちよつと冷たそうな女。

髪は肩で切りそろえている。

ヘアバンドで前髪を押さえている。

どちらかといえば、オネエ系の顔立ち。もちろん美人。スタイル

もいい。

同級生の梢^{しずえ}だ。

成績優秀。

眉目秀麗。

家が金持ち。

でも、性格は破滅的におかしい。

「おい」

「何か？」

オレが側に立つと、本に目を落としたまま答えた。

「お前、オレに恨みでもあるのか？」

「何を言ってる？」

梢は本から目を離れた。

「何って、昨日のこと忘れたのかよ？」

「……何を怒ってるんだ？」

「デメーンとこのリンにヘンなこと教えてんじゃねーよ」

「ああ、キモヲタのことが」

ぐっ…

こいつ、絞め殺したるか!?

「キモヲタとか教えんなよ」

「うむ、リンは素直に真に受けるから面白くてなー」

「調教しなおせよ」

「いやだ、面白いもん」

梢はそっぽを向いた。

ち。

こいつ、何でオレに突っかかってくんだよ。

「それより、大会に向けての仕上がりはどうだ？」

言って、梢はオレを見る。

何だかメガネがきらりと光ったような気がした。

「う…なんだよ、いきなり」

「ふん、貴様のことだから、ぐだぐだで全然なっていないんだろーがな」

ぐっ…

何で分かるんだろ？

いや、そうじゃなくて！

「余計なお世話だ」

「ちなみに、私のリン&レンは順調な仕上がりを見せている」

梢はそこで何故かオレの顔をちらりと見た。

「なんなら見に来るといい」

…だーれが。

と言おうと思ったが、

ミクにはいい刺激になるかもな…。

「…いいのか？」

「う…うん、いいからそう言ったんだけど？」

梢は不思議そうにオレを見てる。

という訳で、梢の家にお邪魔することになった。
世の中って不思議。

で、授業が終わった後、部屋に戻り、ミクを連れて梢の家に行く。
梢の家はこの辺では最もデカイ家の一つだ。

オレも初めて行くが、噂では正門から玄関まで車で3時間かかる
とか、庭がネーランド並の遊園地になるとか何とか。

その手の噂は尽きない。

デカイ正門のところまで行くと、インターフォンに向かって挨拶
する。

「少々お待ちください。すぐ、お車でお迎えにあがりますので」
えっ…。

なんで車が？

もしかして、本当に車で3時間かかるんじゃないだろうーな。
車はすぐに来た。

車に乗り、庭を10分ぐらい走ると、屋敷が見えてきた。

……マジで車で移動かよ。

金持ちってスゲー。

で、屋敷の正面玄関へ到着すると、『私、執事です！』ってな感
じの爺さんが待ってた。

「いらっしやいませ、お嬢様がお待ちですよ」

慇懃に礼をして、オレたちを屋敷の中へ案内する。

屋敷の中に入ると、ホールになっていた。

すげー金の掛かった装飾が施されており、テレビでしか見たこと
のないような画面が広がっている。

「お嬢様にお友達が訪ねてくるのは実に久しぶりでして…」

執事の爺さんは、オレたちを先導しながら、にこやかに言った。

「どうか、これからもお嬢様と仲良くしてやってください」

ペコリと頭を下げる執事。

……あの性格だからなー、友達いねーんだろうな。

ま、オレも人のこと言えんがなッ。

「こら、何を言ってる!？」

梢が、廊下に出てきていた。

えーと、待ちきれなくてでてきちゃったってヤツ？

「よけーなと言わんでよろしい、瀬波洲!！」

「し、しかし、お嬢様…」

まだ言い足りなさそうな執事を押しやって、

「さあ、こっちだぞ」

梢は、オレたちを引っ張るようにして部屋に入った。

広い部屋だ。

アパート暮らしのオレとは比べモンにならない。

だが、一見して、殺風景だった。

パソコンと音楽制作ツールがあるだけ。後は、本棚とデスクか。

とても、年頃の女子の部屋とは思えない。

「あ、ミク姉」

「ミク姉、こんちわ!」

部屋の中にいたリン&レンが、こっちを向いて挨拶した。

こいつらはロードローラーの玩具で遊んだりする。

「やつほー、二人とも、元気？」

ミクは明るく挨拶を返す。

「では早速、歌の仕上がりを見せようじゃないか。リン！　レン！」

梢が言つと、

「はいっ」

「はいい!」

双子は、だーっと走ってPCの脇まで行った。

やっぱり有線で接続らしい。

双子は首の後ろにある接続端子へジャックを差し込む。

「やっぱ、ド演歌なんだろうなあ、リンレンだし」

オレが言つと、

「ちやうわいっ!!!」

梢は怒鳴った。

なんだよ、単なる冗談だろーが。

「黙って聞け！」

なんか高圧的だなー。

言われたとおり黙って待っていると、

何かバイオリンとかを使ったクラシカルな音が混じった今風の曲が流れ出す。

前奏だな。

ちよつと乙女チックだが、オレのより格段に上手い。

それより、手際がいいな。

発表するときの手順を頭の中で整理しないとな。

なんて思っていると、

リン&レンが歌いだした。

二人いるから、それぞれ別のパートを担当させられる。

そこが強みだ。

もちろん、ミクでも、それぞれのパートを別のトラックに入れてけば同じ事是可以するが、視覚的な臨場感が違う。

二人で踊ればさらに効果が高まるだろう。

息もピッタリ。

うーむ。

こりゃ勝てんな。

歌が終わり、

「わぁー、リン&レン、上手ー！」

ミクは無邪気に拍手をしていたりする。

オメーのライバルだぞ。

「どうだ、なかなかのもんだろう？」

「ち、悔しいが認めざるを得ないようだな……」

オレは齒軋りしつつ、だが言った。

「……そっちはどうなんだ？」

梢は、なぜか、そこで訊いて来た。

は？

なぜ、そこでこっちに振る？

「いや、まだ人に見せれるほどできてない」

「早く形にしないと間に合わないだろ？」

「うん、分かってるさ」

オレは言ったが、

何だか、オレもミクもしゅんとしてしまった。

「ほ、ほら、ミク姉はミク姉の持ち味あるしね…」

レンがフォローしようとしたが、

「ありがとな、レン。でも、実際にできてねーもんはできてねーし」

オレは、ちよつとうつむいて、

「ミク、帰って練習しよう」

「はい」

何だか、意気消沈して帰ってきたのだった。

よんばん

帰ってきたは良いが、何が解決する訳でもない。

とりあえず、ミクは音程のチューニングをしている。

オレは自作した曲を聴きながら、何が足りないのかを考えてた。感じたことを素直に表現しろって言われてもな…。

そもそも路線を決めてない。

歌唱力で押すのか、コミカルな歌詞や踊りなんかで沸かせるのか。色んなものを盛り込むのではなく、ギリギリまで削いでダイエツトさせないといけない。

分かってるが、何でか気力が沸かない。

スランプなんだろううな、世間的に言うところと。

まあ、好調でも大したもののは作ってないがな。偉そうに言うことじゃないけど。

「マスター、そろそろご飯にしましょうか」

気づくと、ミクがオレの顔をのぞきこんでいた。

何時の間にか寝てしまったようだ。

……え、まさか、作ってくれたのか？

「…いえ、買ってきましたよ」

ミクは若干引きつった笑顔。

しかも、ハンバーガーだった。

ま、ファーストフードもたまにはいいよな。

「ありがとな、ミク」

「えへへ」

オレの言葉に、ミクは照れくさそうに笑う。

「マフター、はんばってくださいひゃいね。わひゃしもはんばりまひゅから！」

ハンバーガーはおばりながら、ミクは言った。

「こら、もの食べながらしゃべんな」

空気がかもしれないが、それでも勇気付けられた。

ミクに教えられるとはな。

「……って、ネギ（生）だろそれはー!!」

ミクは洗ったばかりのネギをバリバリ食べたしていた。

「大丈夫ですよ、中国の山東省の人々はネギを生で食べます。大葱
巻餅っていうんですッ」

ミクは悪びれもしない。

「どこのローカル情報だよ？」

「ネギは生でも食べれる証拠です」

「いや、食べれるだろうけど……」

からくねーの？

「おいひー」

幸せそうな笑顔で言うが、

……こいつ、おかしいよな？

「ちなみに宮城県産です！」

「きいてねーよ、んなことッー!!」

「えーと、ネギ踊りは『生き』と」

「じゃあ、コミカル路線で行くんですかあ？」

ミクはイヤそうな顔。

普段は、自分からネギ踊りしてるくせに。

「ギリギリでシリアスなんだかギャグなんだかっていうスレスレの
線を狙ってみました」

「びみよー……」

「失礼な」

オレは、ちつという顔をした。

「歌唱力も作曲力もない以上、そうやってオリジナリティーを出す
しかないだろ」

「まあ、それはそうなんですが……」

ミクは、何か違うよね？ って表情。

「まずはやってみろ、しつくりこなけりや変えてこつ」
「はい」

という訳で、ミクが自然に出来る『ネギ踊り』を入れることにした。

歌は今から新しいのを作ってる時間はないので、元のまま。

ただアレンジを加えるのはできそうだ。

そうやって、見直しをして、手を加えてゆく。

ミクも音程のチューニングを行ってゆき、何とか音痴状態から脱出したようだった。

それでもそんなに上手くはなかったが。

……出荷段階で検品しなかったのかなあ？

そして、翌日。

「梢、オレらの曲聴いてくれや」

「な、なんだ、いきなり?!」

オレは梢を発見するなり、言った。

梢は最初は引いてたが、

「その様子だと、大分練習したようだな」

「おう、おめーらをぎゃふんといわせたる」

「いいだろう、家の設備を貸してやる」

オレと梢は、二人して暑苦しく不敵な笑みを漏らした。

また、こいつらかよ。

無視無視。

いつものことなので、通行人はみな見てみぬ振り。

で、放課後、すぐにミクを連れて梢の屋敷へ行った。

「あ、ミク姉、今日も遊びに来たの?」

「わーい、どんな歌聞かせてくれるの?」

リン&レンが、わーっと駆け寄ってくる。

もちろん、ミクにだが。

「どれ、ちよっくら借りるぜ」

オレは、ノートパソコンを持参していた。
それをセッティングする。

ミクはケーブルをセットし、ネギを二本取り出す。

「え、あれ、何？」

「ネギ？」

「ネギなんか、どうするの？」

梢と双子のひそひそ声したが、オレたちは構わずに準備を整えた。

「はあっ！」

ミクがネギを両手に構えた。

腰を落として両手のネギを左右に力強く押し出してゆく。

「ぶっ」

座ってんでいた梢たちが噴いた。

ミクは全開バリバリって感じでネギを振り回し、ドラムスティックのように頭上で打ち合わせた。

そして、軽快なリズムに乗って踊り始める。

ネギネギネギが 大好きなの

ネギネギネギが ないとダメなの

ネギが大好き ネギが欲しいな

ネギは栄養あるし 美容にもいいのよ

ネギを食べよう！

ネギは麵の毒も消すのよ

ネギを買おう！

ネギは安くて身体にもいいのよ

私の大好きなネギ

あなたにも食べさせたい

だから好きになってね ネギ
ネギは万能なのよ！

ミクの可憐な歌声が流れる。

でも、まあ、この歌詞じゃあな。

観客を感動させるのはムリだろうけど、ミクのネギに対する想いが溢れ返ってる。

ミクだけには、『ぐつと来る』歌はずだ。

だから、ミクの歌唱力もぐつと上がっていた。

歌い手が自信に溢れていれば、聞き手にも伝わる。

「……ネギ好きなのね、ミクって」

「うん、ミク姉、ネギ信者だから……」

「わーい、ネギネギッ」

梢、レン、リンがそれぞれの反応を見せた。

「ふっ……どうだ、この出来は」

「いや、何か、びみょー？」

梢は苦笑いをしていた。

「つーか、某してあげる【してやんよ！】の二番煎じ？」

「ま、そういうと思ったよ」

オレはその程度ではへこまない。

「それでも、ミクの（ネギへの）想いは本物だ」

「まあ、そうなんでしょうね」

「みんな、ネギを食べよう！」

歌ったばかりでハイになったミクがカゴ一杯のネギを持ってきた。
どっから出したんだ？

「いや、辛いから……」

「ちよつと、あたしのネギが食べれないっていうの！」

ミクは取っ払いみたいなのを言って、レンのドたまをネギで殴

った。

……ホントに酔っ払ってるのかもな。

「ふげっ!？」

レンはひっくり返ってしまった。

「リンは食べれるよね？」

笑顔でいうミクに、

「え、あの……」

「はい」

ミクは有無を言わず、リンにネギを押しつける。

うん、暴走中。

「じゃあ……」

リンは物は試しと端っこをかじってみたが、

「か、からーい!!!!!!」

口から火を吹く勢いで、どたどたと部屋の中を走り回った。

うーん。

「梢さんもね？」

「いや、あたしも辛いダメだから」

梢はミクの剣幕に怯みつつ、じりじりと後退る。

「こらー、その辺にしとけ」

「でも、マスター。ネギを布教するのは、わたしの使命……」

「いい加減にしろ」

オレは、カゴから取り出したネギで、ミクの頭をぽかんと叩いた。

「いたーい」

「だろ、ネギでも叩いたら痛いんだ」

「……ゴメンナサイ」

ミクはしゅんとしてうつむく。

「分かればいいんだ」

オレはミクの肩に手を回して、

「さあ、もっと練習をして磨きをかけよう!」

「はい、マスター」

真昼間なのに、夜空の星へ向かって二人で視線を揃える。

「こら！ 何やってんだよ！ 部屋がネギくさくなっただろ！！」

「おー、すまね。ちょっとミクがはりきっちまった」

オレはさらっと言った。

「ち、さっさと出てけ、このネギ女！」

「じゃあ、帰ろうか」

「はい、マスター」

怒る梢を背に、オレとミクはなんかの世界に入り込んだのだった。

いばん

ともあれ、オレとミクは歌と曲に集中できるようになった。

二人ともやりたいことをやって、すかつとしたからかもしれない。オレは曲作りに没頭した。

以前から作っては溜め込んでいた部品みたいなものを一切捨て、始めから作り直した。

その方が、ああしたらこれがダメだ：とか、こうしたらこれが引つかるとかいう煩雑な思考が消え、すんなりで行った。

アップテンポ。

グルーヴ感を出し、それでいてミクの清純な可愛らしさを損なわず、やっぱいい効果音などのアイドルっぽい要素を入れ込む。

もちろん、ネギは必須アイテムだ。

ネギの辛さを表現するには、エレキギターを使った。ギターは自前のものを使用。演奏を取り込んで微調整をする。

パワーコードをふんだんに使ったパワフルな仕上げだが、HRやHMに近づかないようタテノリ感をすっぱり切り捨てた。

バンドならそれでよいのだろうが、ミクの個性はアイドル系にこそあるのだな。

そして、完成した。

曲名は『ネギに恋して』。

陳腐だが、それでいい。

捻らずに素直な気持ちを表現すればいいのだ。

ネギ

ネギ

人類の宝　ネギ

いや、そんな歌詞入れてねー！

*

そんで、梢に電話して、もっかい梢と双子に聞いてもらうことになった。

「リベンジとはいいい度胸だなッ」

梢は勢いだけの良く分からんセリフを飛ばした。

「てゆーか、ネギは持ち込むなよ」

「カゴ」

「はい」

オレが言つと、ミクはネギのどっさり入ったカゴを渡した。

どっから集めてくんだよ？

「ミクが使う分はいいだろ？」

「一本だけにしろよ」

梢は言った。

「ミク姉、またネギ持ってきたネ？」

リンが、うーって顔をした。

ネギを生で食べさせられたのが、よっぽどイヤだったらしい。

ま、普通、イヤだが。

「ネギなんか、ロードローラーで舗装するもん！」

「おいおい」

ぶつちぎりで庭に停めてある重機を持ち出そうとしたので、みんなで止めた。

……ロードローラーの方がよっぽど危険だよな？

曲が流れ出した。

ミクは全身でリズムを取っている。

青く白い 細長い姿

あなたは そう ネギなの

長ネギなの

中国語ではDA CONG

山東省では主食の一つに数えられるのよ（ウソつけ）

ネギネギネギ

わたしは ネギが大好きなの

ネギネギネギ

わたしは ネギがないとダメなの

ネギが大好き ネギが欲しいな

ネギは栄養あるし 美容にもいいのよ

さあ

ネギを食べよう！

ネギは麵の毒も消すのよ

ネギを買おう！

ネギは安くて身体にもいいのよ

私の大好きなネギ

あなたにも食べさせたい

だから好きになってね ネギ

ネギは万能なのよ！

この前の歌詞を流用しています。

歌詞自体は悪くないので。

いや、あくまでミクの視点からだが。

「……歌詞はまあ置いといて、曲は良くなったな」
梢は渋々ながらにうなずいた。

「こりゃ、私たちも、うかうかしてらんねーぞ」

「はい」

レンは梢の言う事を察して、素直に駆け寄ってくる。

「ねーねー、うかうかってどどういうイミ？」

リンは、ミクとは違うタイプのアホの子だ。

「モノ考えんな、アホの子」

「ぷーッ リン、アホの子じゃないもーん」

頬を膨らませる姿が、また萌える。

「何時見ても、キモヲタだな、お前は」

「キモヲタっていうなー！」

「じゃ、ピザデブ」

確かに最近太ってきたけど……。

「つて、デブでもねーよ！」

「るさい。こつちも練習するから、さっさと帰れ！」

また、このパターンかよ。

「お嬢様、夕食の支度が出来ましたが？」

執事が入ってきた。

え、もうそんな時間？

熱中してて気づかなかった。

「お客様の分も用意してありますので、御一緒にどうぞ」

「なっ…こんなヤツらに食わせるメシはねーっ！」

梢は結構ひどい。

「ネギでもかじってる！」

「いけません、お友達というのは滅多にできませんよ」

「いかん、説教モードに入りそうだ。」

「ああ、いっぺん上流の食事を食べてみたかったんだ、いいよね？」
オレは言ってみた。

「もちろんですとも、ささ、皆様こちらへどうぞ」

執事は、さつとモードを切り替えて、オレたちを案内しにかかる。

「あ、あのな」

梢は一人部屋に取り残され、仕方なく着いてきた。

夕食の後、オレたちは部屋に戻った。

「今日は一食浮いた、ついてたな」

「そうですねー、マスター」

しかも上手い料理だったし。

オレは笑顔で、ミクが運んできたネギカゴをゴミ箱へ捨てた。

「あー、なにしてんです、そこおっ！」

ミクは目ざとく見つけた。

ちっ…。

「もう、油断もすきもない…」

ミクはネギカゴをゴミ箱から拾って、

「……マスター」

何か、いいたそうにしていた。

「ん、どうした？」

「いえ、コンテスト頑張りましたっ」

ミクは笑顔で言った。

いいなあ、萌える。

「ちっ、キモヲタ」

…なんだとこら？

*

ミクが来てから、オレの生活は少し変わった。

ただの引きこもりのオタクだったオレは、ミクと散歩したり、会話したりするようになった。

多分、良い方向へ変わったと思う。

ミクは人間ではないが、それでも人間のように生き生きとしている。

人の生活を潤すことが出来る。

そういう面からみたら、ミクはその役目をしっかり果たしてる。

ミクだけでなく、リン&レンも同じだ。

梢は気難しく、容易に人に心を開かない。

でも、リン&レンはそんな彼女の心を解きほぐしつつある。

一見、おバカに見える双子の効果は絶大だ。

双子を見ても誰も警戒しない。

それどころか、一緒になってバカをやったりする。

そういう風に、狙ってプロムラミングされてるとしたら、ボーカロイドとはなんて凄い存在なんだろう。

人々の凍りついた心を暖め、人が本来から持つやさしさとか思いやりなんかを取り戻させてくれる。

自然な形で。

オレはミクと一緒にいたい。

恋愛感情とは異なる感情だった。

家族。

それが一番近いだろう。

口には出さないものの、ミクに感謝してる。

オレは、いつものようにバカをやってるミクを見やりながら、つぶやいた。

ありがとう。

「えー？」

ミクは、なぜかオレの方へ駆け寄ってきた。

「今、何かいいましたか、マスター！？」

「いや、なんもいってねー」

「そうですか、今、わたしのリリカルアンテナになんか引っかけたと思っただけですねー」

「なにもないってばよ」

「隠すためになりませんよ？」

「アホか」

「失礼な、アホの子じゃありません!!」

「んなこと言ってねー!!」

でも、やっぱりバカだ、おバカだ。

アホの子だ。

ろくばん

大会の日が来た。

『集え、ボーカロイド！ 歌声は地 を救う！』
というような、なげータイトルだったような希ガス。

参加ボーカロイドたちが一曲披露して、審査員が点数つけて、最も点数ついたボカロに優勝商品ゝみたいな形式。

いや、大会なんだか、コンテストなんだかよく分からんノリとフンイキの場末感が漂うステージだ。

参加するボーカロイドはピンからキリまで。

玉石混交ってヤツだな。

でも、そんなにはプロを目指してるスゲー連中もエントリーしてくるので、その筋の人間にはそれなりに有名なステージである。

オレらみたいな趣味でボカロ調教してる人間には太刀打ちできないものの、上手いボカロチームの腕前が拝めるんで得るところが多い。

ま、説明はこの辺までにしよう。

オレとミクは、朝早くから電車、バスを乗り継いで会場へ行った。梢と黄色い双子は既に到着していた。

「あ、ミク姉」

「おはおはなんですう」

レンとリンが挨拶。

「やっと来たか、一般市民」

「こっちはテメーと違って金持ちじゃねーんだよ」

オレと梢は会うなり、メンチ切ってる状態。

「どきどきするね」

「この日のために練習してきたからねー」

「わーい、お歌歌えるー」

だが、いつものことなんでみんな気にしない。

で、オレらの番が来た。

「わわっ！…出番きちゃったよww、どーしょ！？」

「ちゃっちゃと行ってね、ミク姉！」

「お約束的アホの子リアクションはいいから」

リン&レンは度胸が据わっている。つか、大分前に歌い終わった。もち、ロードローラー絡み。

「よし、練習の成果を見せるぞ！」

「はい、マスター！」

ミクはステージに上がった。

緊張気味だったが、何とか歌えた。

「うひー、緊張したですー」

「いや、初めてのステージにしては上出来だ」

まだ頬を上気させているミクに、オレは労いの言葉をかけてやる。

ミクは頑張った。

ネギに対する愛情を十分に語ったと思う。

が、次にステージに上がったミク……小村井ミクとか言ったか、

その娘の歌は観客すべてを魅了した。

世界が止まったような気がした。

オレは引き込まれていた。

理屈抜きで、聞き入っていた。

歌い方、しぐさ、曲、そのすべてが渾然一体となって、オレの心の中に入り込んでくる。

すげえ。

くそつ。

相反する感情を同時に抱いた。

こんなレベル、とてもじゃないが到達できねえ。

そう思わせるぐらいのステージだった。

それは梢も同じ気持ちだったようだ。

「……ねえ、こんなのどうやったらできんだよ?」

「オレに聞くな」

「素敵…」

ミクは素直に聞き入っていた。

案外、そうやって受け入れるのが近道なのかもしれない。

直感的にそう思った。

結局、優勝はその娘だった。

『あ、ちよつとお待ちください』

ステージに上がった司会者が、スタッフから何かメモをもらっていた。

『えー、参加ボーカロイド……主にミクミクたち……から多数同様の要望があり、特別健闘賞を設けることになりました!』

え、何だろ?

『「ネギに恋して!」を歌ってくれた、鳴瀬ミクさん! さあステージへどうぞ!』

「え!?! えーっ!?!」

ミクは驚きであたふたした。

「なんで、なんで、わたしー!?!」

「あなたのネギへの想い、よく伝わってきたよ」

ミクの肩に手をおく、ミク。

……げ、小村井ミクじゃんか。

「さ、行つてきて」

「う、うん」

つか、ミクはみなネギ好きな仕様なのな。

ミクのネギ関係の歌、結構あつたけどその中で選ばれるとは……。努力が実つたと考えていいのかもな。

ちなみに、リンレンはロードローラー、ルカはマグロ、さくら棒、ソード、カイトはアイス、メイコ・ハクは酒とかな。

『さあ、どうぞ、ステージへ!』

という訳で、ミクは思いがけず受賞……健闘賞だけど……をしたのだった。

*

帰りに梢たちと一緒に車に乗せてもらい、一緒に食事をした。その後、てきとうにぶらつきながら、部屋に帰る。

通りは賑やかだったが、オレとミクにはあまり喧騒は届いていなかった。

「マスターの実力が認められたんだよ、よかったね」

「うん、ミクが頑張ったからさ」

「えへへ」

「…宮城県産のネギかって帰るか」

「わーい、やったあ！」

ステージの興奮冷めやらぬって感じた。
ネギの興奮か、ミクの場合は。

だから、

オレとミクは、

気づかなかった。

背後に運転をミスった車が迫ってることに。
いや、ミクは寸でのところで気づいた。

ドンッ！！

いつものミクとは思えぬ俊敏さで、オレを思い切り押しのける。
「ッ!?!」

……ミク！？

オレは地面に叩きつけられ、スローモーションのようにその光景を見ていた。

ミクの華奢な身体が鋼鉄のボディに跳ね飛ばされる。

どしゃあ！

車は横転して街灯に激突し、やっと止まった。

「ミクーツツ！！！」

オレは叫んでいた。

身体の節々が痛んだが、関係ねえ！

ミクは歩道の端に倒れていた。

四肢にヒビが見られ、路面に体液がさーっと広がってゆく。

「ミク！」

駆け寄ると、

「マスター、無事でよかった」

ミクは力なく微笑んで見せた。

「おま…ッ、しゃべるな、救いをよぶから！」

オレはミクを抱きしめていた。

……なんで、こんなッ！？

「マスター……」

ミクはオレを見つめていた。

「なんだ？」

「マスターは、ホントは、キモくないです」

「こんな時になにを…」

「賞も取れた……し……自信もつ……て……くだ……さ……」

ミクの身体から力が抜けてゆく。

……そんな、そんな。

『……マスター』

『いえ、コンテスト頑張りましょうねッ』

混乱するオレの脳裏に、何か言いたそうにしていたミクの姿がよみがえる。

「なんでだよ、なんで」

オレの頬が濡れる。

そんな、そんな、

ことって、

なんでだよ？

*

ミクは運ばれていった。

製造元へ。

警察とか一杯来たが、オレは呆然としていた。

何を答えたのかも、どうやって帰ってきたのかも分からなかった。気が付くと、部屋にいた。

ミクがいない。

失ったのか。

オレは、

家族を。

心にぽっかり穴が開いたかのようにだった。

何もする気がわかない。

オレはただ壁際に座っていた。

どんなに大切だったのか、オレはミクを失って初めて気づいた。

気づくと、玄関に梢たちが来ていた。

「上がっていいか？」

オレがうなずくと、

「気の毒だったな」

梢は言った。

リンレンも沈痛な面持ちで、今にも泣き出しそうだった。
いや、レンが泣き出した。

リンも泣き出した。

「なんで…」

「……友達だろ」

梢は言った。

「ミクは治るさ」

梢は続けた。

「すぐに帰ってくるよ」

梢は、段々耐え切れなくなってきた。

「あんなに頑張ったんだ」

涙が落ち始める。

「あんなに頑張ったのに…」

オレたちはどうしようもなく、どうしようもなくミクが好きだったんだ。

やり場のない思いだけが残った。

*

*

*

「やつぽーッ」

翌日。

ミクが元気にドアを開けて帰ってきた。

歯を磨いていたオレはコップを落としてしまった。

「な、な、なーっ!??!」

オレは驚きでへたりと畳の上に尻餅をついていた。

「あれー？ マスター、ちゃんとメーカーの話聞いてましたあー？」

ミクは不思議そうに訊く。

「はあ！？」

「あのー、わたしたちボーカロイドにはショック軽減機構が着いて、ホントは対暴徒用なんですけどオ、ちょっとやそつとじゃ中枢には及ばないんですよー」

「はあ？」

そういえば、メーカーの営業マンがやってきて何か言ってたよう
な……。

オレは、ぼんやりとその時の情景を思い浮かべる。

「営業マンがちゃんと説明したでしょー？ わたしはすぐに治るっ
て。」

車のスピードが思いの他あつて、そのダメージでメイン回路をシ
ャットアウトしちゃったただだつて。

……まったく、全然聞いてないのね。だからキモヲタなのよ」

ミクは散々文句を言った後、

「ただいま」

オレに抱きついた。

ななばん【ロードバスターリン1】

峠に金色のヤツが出ると噂が流れたのはいつからだろうか。
挑んだマシンは、みな撃破されたという。

巨体にもかかわらず、そのスピードはありえないくらいに早く、
その機動性はあるにないくらいに高い。

文字通り撃破され、木っ端微塵にされたマシンは数知れず。

なんで、そんなデカブツがそんな機動性！？

なんて、疑問はぶつちぎりにして、金色の……というか黄色いロードローラーは全開バリバリで走り屋たちのマシンを全壊させるのだった。

*

「ぐわあっ！？」

「ふげっ！！」

「ミク姉ッッ！！？」

梢と双子は卒倒しそうになったが、ミクとオレの説明を聞いて、
ほっと胸を下ろした。

「…シヨック軽減機構ってどんなの？」

「わたしにもよく分かりません」

「アホの子だしな」

「違うもんー！」

ミクはネギでオレの頭をド突いた。

水分があるから痛い。

「何よ、マスターのキモヲタピザデブッ！！」

「てめッ…」

オレは瞬間沸騰。でも何を言ったら良いか思いつかず。

「なんか、魔法の呪文みたいだな」と梢。

「魔法少女ミク」

「ネットに魔王少女はあったよ」

双子が顔を見合わせる。

「変身するとき、オマイヲキモヲタビザデブニシテヤンヨ！とかいうんだぜ」

梢が悪ノリして言った。

「おめーらなあ…」

オレはちよつちめまいを覚えつつ、

「ふん、そんな単語はもう効かんだよ」
うそぶいてみた。

「えーと話を元に戻すね」

レンが取説を片手にしている。

「ショック軽減機構について。

謎のオーバーテクノロジーを使用し、日常生活で想定される衝撃のほとんどを軽減することができます。

（注）ボーカロイド大好きな、おっきいお友達の中にはブチ切れたのもいるんでね」

「なんだその説明…」

「全然説明してないだろ」

オレと梢が突っ込むが、

「そう思っつて、製造元に電話かけてみたよ」

「もしもし？」

はい、とオレに黄色い携帯を渡す。

いや、渡されても。

「あの、すいません、ショック軽減機構について教えて欲しいんですが…」

『少々お待ちください、担当の者に替わりますので』

電話を受け付けた女性は、内線へ切り替えた。

『はい、お電話変わりました。技術課の名古屋と申します』

おっさんっぽい声が聞こえた。

「えーと、シヨック軽減機構について教えて欲しいんですが」

『シヨック軽減機構ですね』

電話の向こうで相手はうなずいた。

……何か、メガネがきらりと光ったような心的イメージを受信したぞ。

『シヨック軽減機構！ それは人類の夢と希望を乗せ、明日の時代を担うこの木何の木みたいな可能性を秘めた技術です。つーか、そういう技術を使ってます』

なんのこっちゃ？

このオヤジ、メチャクチャだな。

『ぶつちやけ、研究段階のモンですが、それを使ってみました』

「大丈夫なんですか、そんなもの使って」

『いや、大丈夫。たぶん』

多分て…。

『コウスケ・スケロク理論は御存知ですか？』

「知りません」

つーか、説明しすぎ。もっと簡単にあしらえよ、こんな冷やかしの電話。

『彼らはN粒子という素粒子を発見しまして。』

N粒子は性質として静止質量がほとんどゼロで、極めて強力な帯電性質を有します。

また、一定濃度において立体格子状に整列する性質を持っています

……何か聞いたことある話だな。

『N粒子の電気を格子状に整列させる特性による反発力を利用し、擬似的に反重力を発生させて運動を止めるエネルギーフィールドを形成できます』

「……それって、ミノ……」

『おー、マイ、ガッ!』

相手は突如叫んだ。

『持ち時間がなくなりました。それではまたの機会をお待ちしてま
す』

ガチャ。

電話が切れ、ツー、ツーという電子音が聞こえた。

「なんだろ、今の?」

「ヲタなことだけは確かだな」

梢はコメカミに手を当てていた。

「なんか、ロードローラーがさ、汚れてるんだ」

梢が言った。

「はあ?」

学食で昼食を食べながら、だべっているのだった。

「双子が乗り回してるからだろ?」

「それが汚れ方がヘンなんだ」

「ヘン?」

「うん、車体の縁が擦り切れてたり、へこんでたり、ライトにヒビ
が入ってたり」

「へー、そりゃ荒っぽいな」

「だろ?」

梢は、我が意を得たりと笑みを漏らす。

「リンレン見張ってりゃイヤでも分かんだろ」

「そうだな、うん、そうだ」

梢はしきりにうなづく。

「お前も手伝え」

「はあ?!」

という訳で付き合わされることになった。

簡潔に経過を述べよう。

夕食（ただ食い）を終えて、帰る振りして、用意した車に待機。
オレとミク。

車内でミクとバカ話をしていると、

プルプル。

と着信の音。

『ロードローラーが出たぞ』

「オーケー、追跡を試みる」

言って、オレはフロントガラスの向こうを見つめた。
ブイーンと音が近づいてきて、ライトが光る。

「ごおーっ！」

ロードローラーが結構なスピードで走りぬけた。

こんなにスピード出るっけか、ロードローラーって？
オレはエンジンをかけながら思った。

ミクを助手席に乗せて、追跡を始める。

「ネット検索したら、15kmぐらいですよ、普通は」
ミクが自分の携帯をいじっている。

時速だな。

15km/hどころか60km/hは出てたぞ。

「マスター、あれ、ショック軽減機構を使ってます」

「どういうことだ？」

「フィールドでロードローラーを包んでますね」

「そんなんで、あんなに早く走れるのか？」

「さあ？ …あ、メーカーの名古屋さんに聞いてみたらどうです？」

「もう退勤してるだろ」

「あ、そうですね」

ミクは笑いながら、ぺろりと舌を出す。

おお、萌えー！

「萌えてないでちゃんと追跡してくださいよ？」

「分かってるって」

オレは、うなずいた。

はちばん【ロードバスターリン2】

オレは、ロードローラーを尾行した。

車は梢が執事に言って用意したものだ。

オレは車に疎いので、よく知らんのだが、NSXというのか？

「執事のおじさんの趣味らしいですよ」

「あのオヤジ、実は走り屋だな……」

オレが言った時、

チカ、チカ

ロードローラーがフラッシャーを上げた。

道を曲がる。

確か、こっちは夏尾山だったな。

「てことは、峠専門か」

頭 字Dの如く。（笑）

……ロードローラーで峠の曲がりくねった道を走破できるんか？

オレは甚だ疑問に感じたが、

「ごおおん

黄色いロードローラーは構わずに登り道を走行してゆく。

ずっと曲がりくねった道を走る。

「どこまで行くんでしょうね？」

「さあ……」

オレとミクが言っていると、急に開けた場所に出た。

駐車場のような場所だ。

そこに、これでもかってぐらいにカッチョエー車がごちゃっと集まってる。

「うひゃー、なにこれ？」

「峠をテリトリーにしてる走り屋だな」

オレはちょっぴり緊張。

走り屋すべてが不良だとか犯罪に走るワケじゃないだろうが、やっぱこういう集団って怖いね。

「執事のオヤジさんの趣味がそれっぽくて助かったかもな」

「そうですね」

ミクがうなずいた。

「ま、いざとなったらこっちもフィールド展開して敵の動きを止めます」

「いや、おまい、敵って？」

ミクは何かの世界に入り込んでしまったようです。

ぶろろろ…。

ロードローラーは駐車場の一角に停まり、

ぶおおん！

とアクセルを吹かした。

挑発である。

『しゃらくせえっ』

怒鳴り声が飛び、ボタンとドアを閉める音。

血気盛んなヤツがいきり立って愛車に乗り込んだようです。

ぶおおおんッ

アクセルを全開で走り出し、

ききーっ。

と、ロードローラーの前で急停止。

RX-7だな、オレにもそれぐらいは分かった。

ぶおおん、ぶおん、

とアクセルを吹かした。

その時、ロードローラーに乗っているヤツが、ニヤリと笑った。
ライトがまぶしくてよく見えなかったが、そんな気がした。

ききーっ

ロードローラーが急激に発進した。

RX-7も弾かれたように飛び出し、後を追う。

「あ、行っちゃった…」

「マスター、後追って！」

「あんな猛スピードで降りれねーって」

「こつちもフィールド展開すれば、スピード出しても大丈夫です。
たぶん」

たぶんで…。

ま、とにかく後を追わなければ何がどうなったのか知ることが出
来ない。

「いくぞ！」

「はい！」

オレとミクはロードローラーの後を追った。

同じように後を追いかけてくる車が何台あったが、バトルじや
ないからか普通に流してる感じである。

(Yフィールド展開)

ミクは口ボ声で言った。

なんかのコマンドみたいだな…。

途端に、オレらを取り巻く空気が粘つくようになったような感覚が襲ってきた。

車がぐんと減速する。

「マスター、もっとスピード出して」

「お、おう！」

オレはアクセルを踏み込んだ。

でも、後ろからやってきた走り屋【野次馬】に、どんどんぶつちぎられた。

軽く100km/hは出てるはずだが、NSXは遅々として進まない。

でも、それはすぐに変わった。

速度がついてゆくにつれ、車体が、すーっと勝手に滑り出したのだった。

ハンドルを切ると凄いい反応度合いでスイスイとカーブを曲がってゆく。

前方を走ってる車を軒並みぶつちぎってしまった。

……まるでゲームだ。

だが、それでもロードローラーには追いつけない。

先行して走ってるのもあるだろうが、どこか根本的に違う感じがした。

「やっぱり、こういう仕組みだったのね」

ミクは一人で納得してる。

「どういうことだ？」

「通常フィールドは運動を止めます。でも、フィールドを展開したままそれを動かしてゆくと、どんどん速度が増して滑るように動いてゆくんです」

「はあ？」

オレ、そんなに頭良くなーから分かんってば。

「ボールが坂を転がるのと同じですよ」

「そんな簡単な説明でいいのか…？」

「いいんです！」

ミクは力説した。

勢いだけの中身のないセリフだった。

ま、いいか。

で、ロードローラーは難なくチャレンジャーをぶっちぎって勝利した。……ようだった。

というのも、オレらがふもとに着いたときには、もう勝敗が決着しており、

「ちつきしょーッ！！」

悔しそうな走り屋が、路面に膝を付いて頭を抱えてたからだ。

可哀想だが、未知の技術に普通の車が挑む方がどうかしてるのだ。それを相手が理解してるかどうかは別として。

ロードローラーは、しばらく止まってたようだが、やがて急発進して去って行った。

「W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y N !」

そして、最後に叫び声が轟いた。

きゅんばん【ロードバスターリン3】

オレとミクは部屋に戻った。

梢には、電話で連絡を入れといた。

「楽しかったね、マスター」

ミクはなぜか上機嫌である。

こいつの中では、ドライブ扱いになってるのかもな。

NSXは明日、梢の家に返しに行く事にした。

「またドライブしたいね」

あ、やっぱり…。

「そうだな、土日とかにな」

「約束ですよ」

ミクはすごい期待のこもった眼差しでオレを見た。

そんなに期待されてもな。

とは思いつつも、ミクの表情がすごい可愛い。

梢にまた車借りて、遠出すんのもいいな。

弁当でも作って。

ミクと一緒に食べるんだ。

妄想に浸っていると、

「マスター、携帯鳴ってますよ？」

何時の間に入ったのか、風呂上りのミクが、ちゃぶ台の上においてある携帯を指差した。

マナーモードにしてんだった。

『明日は、私も行くからな』

電話に出ると、梢だった。

「はあ？」

『こんな面白そうな事、混ざらないワケないだろ』

……お祭り大好き人間らしいな、梢は。

「まあ、頑張れ」

『行かないのか？』

梢は何だか拗ねたような感じだった。
むー。

ミクがそんな表情をしている。

「リンレンが峠制覇してよーが、何してよーが、オレらにはあんま関係ねーしな」

『薄情だな、あいつらがケガでもしたら悲しいだろ？』

……まあそうだ。

この前、勘違いとはいえ、ミクが製造元送りになったとき、双子も悲しんでくれていた。

「分かった」

『よし、そうこなくっちゃ』

何でか約束させられてしまった。

「ミク、悪いな、明日またつき合わされる事になっちまった」

「ううん、マスターと一緒になら構わないです」

ミクは、上目遣いでオレを見た。

おお、萌えるー！

って、わざとしてるだろ、ミク？

いや、好きだけど。

で、次の夜。

やっぱり今夜もロードローラーは出かけていた。

今度ははつきり運転手の顔が見えた。

リンだった。

ちなみに、レンは厨房らしくマンガアニメTVゲームカードゲームを遊び倒して、そのまま寝てしまったらしい。

アホだ。

アホの子だ。

「さ、追いかけるか」

オレはエンジンをかけた。

「夏尾山だろ？」

梢が後部座席から言った。

追いかける必要はないと言いたいんだろうが、
峠は他にもある、後をついてった方が確実だ」

オレは主張してみた。

「ですよ〜」

ミクがコビコビな態度でうなずくと、

「ちっ……」

梢は露骨に舌打ちした。

……こいつら、何を張り合ってたんだ？

「バトルに突入する前に、リンを止められたらいいんだけど……」
オレが提案すると、

「ダメだろ、そんな防火ロイドみたいな意見」

梢は一瞬で一蹴した。

「いいじゃないですか、防火ロイド。何事も予防が大切ですもん。
ねえ、マスター？」

言って、ミクはオレの左腕に自分の手を回してきた。

うーん。

感触が心地よい。

「ちよつと、ボーカロイド、私の目の前でいちゃつくな！」

梢はイラついていようだった。

「あら、梢さんの前じゃなかったらいいの？」

「んだコラ？」

ああーん？

ツてな感じで、梢はヤンキー入ってる。

「べーだ」

「ふん」

二人はそっぽを向いた。

あの、どうしちゃったんでしょう……お二人とも？

ロードローラーは峠にやってきていた。

昨日と同じ場所だ。

やはり、走り屋たちがリンのロードローラーを待ち構えていた。だが、昨日と違うのは、既に人選がなされていたという点。

それはピンク髪のクールな女だった。

きわどいセクシー系の服装。手には皮のグローブ。

サングラスをしているので表情は分からない。

「……あれは！」

オレと梢がハモる。

「あれー、ルカさんだあ？」

ミクがアホの子っぽく首を傾げる。

ルカ。

タコと合体させられたり、ソード持たされたり、さくら棒を食わされたり、女王様だったり……。

とにかく、ミクとは正反対のクールでボインでムチムチ、色気たっぷりのボカロである。

きつ。

ミクがおっかない視線を向けてきたよ。

こわー。

「ふん」

ルカはドアを開けて、車に乗り込んだ。

赤のフェアレディZだ。

ルカの雰囲気と異様に似合ってる。

「向こうもボカロを出してきたってところか」
梢が推測する。

「リン、大丈夫かな？」

ミクは心配そうだ。

「ま、とにかく、様子を見よう」

オレは毒にも薬にもならないことを言った。

「あなた…、私の足元に跪きなさい」

ルカは言うなり、エンジンをかける。

「フィールド展開を確認」

ミクが言った。

「こちらもフィールド展開します」

「頼む」

すぐに独特の粘っこい感触が襲ってきた。

「ミクもリンもルカも全員、フィールド展開してるけど、誰が一番早いんだ？」

梢がのんきな事を訊いて来る。

「あの、昼間のうちに名古屋さんに聞いたんだけど、重量が重い方がスピードも速くなるんだって」

ミクが答えた。

ふーん、だから急にその手の知識が増えたんだな。

「じゃあ、ロードローラーには勝てないってことじゃなか」

ま、一番重いのはロードローラーだろうからな。

そんなことを言ってる間に、黄色のロードローラーと赤のZが走り出した。

「こっちも行くぞ！」

オレはアクセルを踏み込んだ。

最初はノロノロだが、そのうちに速度がついてくる。

でも、リンとルカは、最初からぶっちぎりで飛ばしまくっている。この差はなぜ？

「マスター、彼女たちのフィールドはジャイロ機能付きのようです」

ミクが説明を始める。

「ジャイロ？」

「はい、フィールドの内側にさらに小型のジャイロ型フィールドを展開して、それを回転させると推進力を生むんです」

「ミク、何時の間にそんなに詳しくなった？」

「今、名古屋さんから聞いてますから」

ミクは自分の緑の携帯を差し出した。

『もしもし？ ジャイロ型フィールドは回転すると地球に対してその場に留まろうとするから推進力として使用できるようなんだ』

「でも、それじゃ自転方向と逆の方にしか進めないだろ？」

梢が指摘した。

『逆回転すれば大丈夫』

…… ホントかよ？

絶対、トンデモ系だよ、この人。

とにかく、道なりに下つてくと、突然、

スチャスチャ

というリズムが聞こえてきた。

曲だ。

アップ系のビート。

ハウスビートってのか。

遠目に、ルカの赤いこの窓が開いていて、そこから漏れ出してくる音だと分かった。

フルスロットル！

素っ気無く、それでいて冷たく甲高い無機質気味の高音が聞こえてきた。

歌ってやがる。

…… ボカロだから、いいのか？

髪を靡かせて

ルージユを歪める

リアガラス照らし出すライト

獲物はすぐ目の前

アクセル吹かして
コーナーを曲がる
前の車追い抜く

その程度のテクで
私をぶつちぎるなんて
よくもほざいたものだわ

それくらいのカーブで
減速するなんて
まったく度胸がないわ

ここは私のテリトリー！

ルカルカ フルスロットル

ヘアピン駆け抜ける
あんよが遊んでるわよ

その手のカーブはお手のもの
一瞬で入れ替わる

その瞬間 カタルシス
その快感 エクスタシー

フルスロットルで駆け抜ける

「一曲歌いきったところで、ルカのZがロードローラーを抜いた。
……にしても、ルカルカ ナ トフィーバーに酷似した曲だな」

「んなこと言ってる場合か!？」

梢が焦ったのか叫びを上げた。

「リンのロードローラーが抜かれるなんて……」

ミクは顔面蒼白。

『ミクちゃん、どうした、リンとルカが何だ!？』

携帯からは名古屋の声が流れている。……早く切れ、んなヲタ。

「いや、勝負はこれからだ!」

オレは自信たっぷりと言った。

「W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y N !」

その瞬間、リンの叫びが轟いた。

リンのロードローラーが燐光を発したような気がした。

加速。

そして、取り付けられたスピーカー（ボーズ）から、パワフルな、やはりアップテンポの曲が流れ出す。

どすこい!

ロードローラーは働く車の横綱

誰にも負けねえ 負ける理由がねえ（どすこい!）

クレイン車にも パワーシヨベルにも

ましてやホイールローダーにも

負けや市ねえ

ロードローラー伝説（ごっちゃんです!）

見ろよ、この機動性

見たか、このパワー

つつぱりつつぱり

押し出し押し出し

トドメは うっちゃりだぜイ！

なんか、どつか間違った感じの歌詞を歌い上げ、リンのロードローラーがルカのZを抜こうと挑みをかける。

火花が散っていた。

激しいバトルが繰り広げられる。

だが、ルカの走行テクが若干上回っている。

「わたしも歌います」

ミクは、なんか張り合いたい気分らしい。

こっちも運転中だから、ノリとテンポの良い曲を聴きたい気分ではある。

「いや、そんな場合じゃねえ」

「えー、あの娘たちは歌ってるじゃないですかー」

不満一杯って顔で、ミクはぶうと頬を膨らます。

可愛いなー。

とか萌えてる場合じゃねえってば。

「てゆーか、わたしにもジャイロ型フィールド作れるはずですよ！」

ミクは、あくまでも張り合いたいみたいだ。

…… 出番のために。

「違っってば」

ミクは、ぶぎゃーってな風に手を振り回して、

「マスター、スピーカー！」

「ラジャッ！」

オレはCDのスイッチを押した。

ちなみに中に入っているCDは、ミクの持ち歌を焼いたものだ。
ミクの持ち味である可憐さ、清純さを損なわずに、バンド風にアレンジした……『ネギに恋して』だ。

「結局、この曲かよ!？」

梢が律儀に突っ込む。

ちよつと辛い突っ込みありがとう。突っ込んだ方が辛く苦しい場合もあるなあ。

青く白い 細長い姿

(以下略)

「ひどい扱いだよ!!」

ミクは嘆いてたが、二回目以降は同じ曲は省略される運命なのだ。
ちなみに高速ビート版もある。

いや、キャメルンセンのマネしたんだが。
で、気づいたらもうふもとでした。

どっちが勝ったか。

それはルカだった。

でも、リンはすかつとした顔をしていた。

「いい勝負だったね、ルカ姉」

「あなたもね、リンちゃん」

リンとルカはマシンを降り、握手を交わしていた。

「今回は負けたけど、今度はそうは行かないよ?」

「いつでもリベンジ受けるわ」

いいな、青春って。

「わたしは? わたしの出番は?」

ミクはいつまでも言っていた。

『おい、ほつとくなよ』

ミクの携帯からはまだ名古屋の声がした。

きゅうばん【ロードバスターリン3】（後書き）

『きゅうばん』だけにルカさんを出してみました。（笑）

じゅんばん

部屋に帰ってくると、黄色い双子が居た。

ミクとリンがおしゃべりに興じており、レンはゲーム機で遊んでいる。

うむ、ダレた子供たち、オツケー！

「あ、マスター。お帰りなさい」

ミクが笑顔を向ける。

「キモヲタマスターさん、こんちわ！」

リンは相変わらず失礼なあいさつをぶっこいてる。

「リン……鳴瀬さん、お邪魔してます」

レンは諦め顔で、それでもちゃんと挨拶をする。

……レン、君の苦勞は伝わったよ。

「いらつしゃい、リンレン」

オレはニツコリ笑いながら、ドアを閉めた。

もちろん、引きつった笑みであることは言うまでもない。

「ねえねえ、マスターも聞いてくださいよー」

甘えたように言うミク。

「なんだ？」

聞き返すオレの内心は『萌えー』である。

うん、最近は特に可愛さが増してきて、オレ的にはすごく嬉しいぜ。

「あのね、リンってば、あの後ルカさんとバトルしてるんですけどえ」

ミクは言った。

……道端で井戸端会議してるオバちゃんのようなだ。

「そうなのー、ルカさんに2回勝ったよー」

リンがVサインをしてみせる。

「4回負けてるくせに……」

レンがゲームを続けながら、ぼそりとこぼす。

「ごすっ！」

リンの投げたヤカンが、レンの脳天にぶち当たった。

「……レン、死んでねーだろうな？」

「でね、でね、この前、ルカ姉から相談されちゃってえー」

「ふーん」

「……なんだろ、『跪きなさい』系ボカロの相談ごとって？」

「あのね、ルカ姉のマスターなんだけど」

リンはそこで声をひそめる。

「なんと、『M』らしいのよ」

「……え？」

オレは素で首を傾げた。

まあ、そんな趣味の人々もいるよなー。一部の人類の中にはさー。

「えー?!」

ミクは驚きつつも興味津々。

レンは、まだ息を吹き返さない。

「……そろそろ起こさないとヤバイかも？」

「じゃ、じゃあ、まさか、そういうプレイを強要されてるとか？」

「やだ、ミク姉ってば、話飛び過ぎ」

リンはミクに向かって叩くしぐさをした。

「……やっぱオバちゃん？」

「……だ、だよなー」

ミクは引きつった笑いを見せながら、

「一体何なの、もう教えてよー？」

「うん、ルカ姉のマスターさんね、自分でそれに気づいてないみたいなのよ」

「ん、それが何か問題なの？」

「だからあー、ルカ姉はどうマスターと接していいか分かんないだ

って」

リンは笑いながら言った。

……笑い事とちゃうような気がするぞ。

「いっそ、そういうプレイに走っちゃえば楽なのにねー」

「「ねー、って言われても……」」

オレとミクがハモった。

……レンを起こそうつと。

夕食の時間に差し掛かったんで、リンレンにオレの自慢の手料理を御馳走してやった。（得意げ）

んで、メシ食ったら、リンレンは帰って行った。

ロードローラーに乗って。

ま、レンは起きてからもずっと、ぼけーっとしてたがな。

「あ、マスター、洗い物しますね」

「手伝うよ」

オレが台所へ行くと、

「大丈夫、マスターはごろごろしててください」

ミクは笑顔でオレを押し戻した。

うむ、すげー可愛い。

「」

ミクは、ネギ臭のする鼻歌を歌いながら、皿を洗った。

幸せだなあ。

ミクがいれば、何も要らないや。

「やっぱ手伝うよ」

オレは、何だか手持ち無沙汰でそわそわするんで、やはり台所へ行ってしまった。

「じゃあ、お願いしますね」

「おう」

と、オレが皿をつかもうとした時、ミクも同時に皿をつかもうと手を出していた。

二人の手が重なった。

はっとして、手を引っ込める。二人とも。

「あ、ごめん」なさい」

二人のセリフも重なり合っていた。

オレとミクは、思わずお互いの顔を見合った。

「マスター」

ミクは言った。

「わたし、マスターのところに來れて良かったです」

「オレもミクと暮らせて幸せだよ」

ちよつと照れくさいが、本心だ。

オレは自然とミクの方へ近寄って行つた。

ミクも同じように寄り添って来る。

お互いの手が触れ合う距離だ。

「ミク」

「マスター」

オレたちがお互いを見詰め合つた時だ。

「んんっ」

いきなり玄関の方から、咳払いがした。

「うわっ」

「きゃっ」

オレとミクは弾かれたように飛び退る。

……だりだ、オレとミクのラブラブな時を邪魔すんのは？

玄関を見やるオレの目に飛び込んできたのは……

ピンクの髪。

ボイン。

際どい服。

……あ、ルカ姉さんでした。

「ゴメンなさい、二人の邪魔するつもりはなかったんだけど……」

ルカは、ちゃっかり上がりこんで、お茶とお茶菓子まで頂いてい

た。

さすが、女王様。

「え、えへへ…」

「わはは…」

ミクとオレは、返す言葉が見つからず、笑ってごまかした。

「ちょっと相談したいことがあったものだから…」

「ああ、マスターが『ドM』…」

「ギャース!!!!」

ルカは怪獣吠え。

「ダレ、それを漏らしたのは!!!! てゅーか『ド』はついてないってば!!!!!!」

「リンです」

ミクはいとも簡単に妹を売った。

……轢かれるぞ。ロードローラーで。

「あのデカリボン~~~~ッ!」

ルカは何気に口が悪いですね。

「大丈夫、誰にもしやべってないから」

オレは必然的にフォローに回る。

「まあ、それはそれとして、悩み事はなんです?」

「はあ…」

ルカはため息をついてから、

「私のマスター、無自覚の『M』みたいな」

「うん、それで?」

「私、マスターとどう接すればいいのか…」

ルカは親指の爪を噛んだ。

ちよつと色っぽいね。

とか思っていると、

じー。

ミクの冷たい目（ジト目）がオレに注がれていた。
こえー。

「マスターからリクエストされれば、お仕事と割り切ってそういう関係を構築するのも、それはそれで、よいのだけれども」

「そうじゃないってこと？」

「そう。マスター自身は意識してないけど、自ら墓穴を掘まくって私がツツコミを入れたりとか、わざわざ責められるようなシチュを作り出してるというか」

「ふーん」

「いずれにしても、宙ぶらりんてゆーか、さっさと告白しろよこら！ ……みたいな雰囲気なの」

ルカはやっぱ『ドS』ですね。

「分かったか、ミク？」

オレが振ると、

「ぜーんぜんww」

ミクはお約束アホの子的反応を返してきた。

期待通り、オッケー！

「あなたたち、ちゃんと聞いている？」

ルカは、おっかない目でオレたちを見据える。

さすが女王様。

視線ビームで敵をなぎ払え！

「…ち、このキモヲタッ」

うへえ、女王様セリフゲットオ！

「ミクちゃん、コイツと居て疲れない？」

「平気、わたしと合うもん」

ミクは満面の笑み。

「うつつ、まぶしー！！」

ルカは暗黒面にダメージ10つてな感じだった。

じゅういちばん

ともかく、ルカは悩んでいる。

本人にしかよく理解できないものでも、悩みなんてそんなもんだ。
「それで、ルカさんのマスターさんってどんな人なの？」

ミクは天然っぽく勝手に話を進める。

「どうって、私に走りを教えてくれたり、歌を自由に歌わせてくれる人だけど……」

……走り屋だな。

好きな音楽ジャンルはロック系かハウス系だろうなー。

「じゃあ、なんも問題ないじゃん」

ミクは笑顔で言った。

言い切った。

コイツ、どこからこんな自信が？

「わたし、車のことは分かんないけど、でも、きっとルカさんのマスターさんは、自分の一番好きな事をルカさんに伝えたんだよ」

「え……？」

「ルカさんのことが好きだから、大事に思ってるから」

ミクは良い顔をしていた。

「あのね、わたしは歌うのが好き。マスターと一緒に歌うのが好き。
マスターから曲を作ってもらって、歌うのが好き。」

それはマスターがわたしを大事に思ってくれてるから。

それが伝わってくるから。

マスターとの絆があるから」

ミクは目を閉じ、胸の前で両手を組んだ。

「ルカさんのマスターさんも、そうだと思うよ。」

自分の好きな事を誰かと共有したいと思う気持ちは、音楽だけじゃないもの」

「……そうかもね」

その瞬間、ルカは何かが吹っ切れたようだった。

「私、一人で空回りしてたのかも知らない」

「大丈夫、元気出して。みんなルカさんのことが好きだよ」

ミクは笑顔で励ました。

強い。

ミクの強さはここだ。

人を勇気付けられる強さだ。

オレはミクに勇気付けられた。

だから、オレはミクを守りたい。

リンレンも何だかんだと言って、ミクに懐いている。

あの双子も、ミクのためなら労力を惜しまないだろう。

それは無償の愛なのかもしれない。

相手の事を考えてくれる。

それだけが、それが難しいのだ。

「そうね、そうだわ」

ルカの顔にも、ぱーっと晴れ間が射した。

「ありがとう」

ルカは微笑んだ。

……その笑みは案外、いい笑みだった。

「よかったね、ルカさん。悩みが吹っ飛んで」

ミクは上機嫌でテレビを見ながら、リンゴを食べていた。

「うん」

オレはその姿を見ながら、

「ミクは凄いよ」

「えゝ？ マスター何を……て、照れるじゃないゝww」

ミクは顔を真っ赤にして、アホの子らしく手足をバタバタさせた。

それが可愛いのだが…。

「オレ、ミクが好きだ」

オレは言ってみた。

言ってしまった。

「ええ、分かってますって。マスターと私は深い絆で結ばれてるんです」

ミクは笑顔だった。どこか陰りというか悲しげでもあった。

「いや、そうじゃなくて」

オレはちよつと恥ずかしかったが、訂正した。

「あの……そういう家族的なものとまた別に、なんちゅうか、恋愛感情っていうか……」

そうなのだ。この間までは家族的愛情だったのが、何時の間にかそれを飛び越えてしまったのだ。

「え……」

ミクの手が止まった。

リングを落としそうになる。

「それって……」

「うん」

オレはうなずいた。

「オレは男として、ミクという女の子が好きだ」

「あうあうー」

ミクは緊張と恥ずかしさに喘いでいたが、

「あの……マスター、わたしもマスターのこと好きです」
意を決して言った。

「うん、最近特に伝わってきたよ、ミクの気持ち」

「いや、言わないで、恥ずかしーよお」

ミクは両手で顔を覆った。

「ミク」

オレはミクを抱きしめた。

「マスター」

ミクはちよつと顔を上げて何かを待っていた。

オレとミクはキスをした。

*

ネットに接続してみて、びっくりした。
アップしてある大型動画サイトのマイページにコメが付いてる。
いや、良い意味でなくて。

ピ でも食ってる ブ！ とか、
キメーんだよ、このヲタ！ とか、
ツマンネ、ツマンネ とか、
祭りとか騒いでんじゃねえよ、この 貞！ とか、

これ以上、列挙するとヘコむので、撃沈しかねないので、この辺で止めるが、とにかくヒデーコメントがガリガリカキコされてる。

「あー、ヒドイこと書いてるヤツがいるー!？」

ミクが傍らで叫んだ。

「くっそー、ダレだよ、こんなことするヤツはッ!？」

オレも憤懣やるかたなしって感じである。

でも、ミクがいれば、そんなことどうでもいいや。

「もう、マスターったら…」

ミクは嬉しそうに、はにかんでいた。

で、翌日。

授業に出ると、見慣れない女の子がいた。

髪を金色に染めて、サイドテールにしている。

服装はそれほど目立つ感じでないが、なぜか目に留まった。

「あれ、ダレだ？」

オレが訊くと、

「知らん、自分で聞け」

梢は吐き捨てるように言った。

ちよっち怒ってるようにも見える。

……オレ、なんかしたっけ？

「あ、亞北ネルじゃなか！」

オレは帰り道の途中で思い出した。
買い物を済ませていた。

もち、長ネギを買っていた。それとマグロの赤身が安かったので、一緒に購入。

「ただいまー」

家に帰ると、

「おかえりー」

「お帰りなさい」

「おかおかッ」

「おかえりなさーい」

ミク他、ボカロ口三人がたむろしていた。

つまり、ルカ姉さんと黄色い双子。

こいつら、なぜにオレの部屋に集まるかな？

「みんな、いらっしやい」

オレは挨拶して、夕飯の支度にかかる。

「みんな食べてくださる？」

「Oh Maguro! Yes, of course」

ルカは英語だった。

喜びを表現してるつもりだろうが、イヤミだな。

「わーい、キモ……鳴瀬さんの料理っておいしーよね」

リンは何か言い直してる。

それでも改善されつつあるんだろう。長い目で見てやろう。可愛
いし。

「やた、マグロとネギの丼モノ、大好き！」

レンはバンザイ。

ロボットの癖にみんなグルメだなあ……。

5人分を用意しないといけないのか。

材料、足りるかな？

んで、みんなでちやぶ台囲んで夕食と。

レンのリクエスト通り、マグロとネギの丼とワカメの味噌汁、それに簡単にサラダを付けた。

「そっういや、ガツコで亞北ネルみかけたよ」

オレが言っと、

「え、あの娘、そんなところに潜入してるの？」

ルカがイヤそうな顔をした。

「やっぱ工作だよな」

「自給700円でライバル会社に雇われてんだよ」

双子が顔を見合わせる。

「なんだよ、そのムチャした設定……」

オレはガクツと肩を落とす。

「私たちとは別に、作られちゃったのよね」

「うん」

「歌えないし、歌てもヘタだし」

「ねえ、ダンスもダメダメよ」だし」

「減らず口と、しつよ」なイヤがらせだけが取り得なのよね」

ボカロのみんなからは良く思われてないみたいだな」。

「ま、別に直接イヤがらせされたワケじゃないから、係わり合いにならなけりゃいいよな」

「あまいわね。あの娘は、1人見つけたら、30人はいると思わなければ」

ルカは持参した酒を飲みながら、

「んな、ゴキブリじゃないんだから……」

「それくらい気をつけないといけないってことよ」
「ぷは」。

酒臭い息を吐きながら、ルカは力説した。

「とにかく、油断は、らめらめよ」

きやはははは。と、酔っ払った笑いを上げながら、ルカはそれでも上機嫌のようだった。

悩みが吹っ飛んだからか？

みんな帰った後に、ミクとネットにつないで見ると、

『あたしは音痴じゃねー！』

ざけんな、こら、

ダンスだってそこそここできるもん！

ゴキブリと一緒にすな！！！！』

って、カキコしてあった。

ぞー。

「う…オレらの会話、盗聴されてる？」

「いやーッ」

ミクは頭を覆った。

「盗聴器の電波探知をしないと！」

「いや、どっかに潜んで聞いてたのかも？」

オレが言った時だ。

コンコン。

ドアをノックする音。

「誰だろ、ルカ姉さん忘れモンかな？」

酒瓶をおきっぱなしにしてっただから？

「あのー、隣に引っ越してきたモノですけど、御挨拶に伺いましたー」

ドアを開けると、そこに立っていたのは、金髪のサイドテール。例のネクタイ、ミニスカート姿ではなく、普段着姿である。

「あ、御丁寧にどうも」

「亜北ネルです、よろしくお願いしまーす」
ぺこりとお辞儀する。

その仕草が意外に可愛いかったりする。

「あー、ネルちゃん!？」

ミクは思わず叫んでいた。

「あら、ミクちゃんじゃない、奇遇ね、こんなところで会っなんて」
ネルは意地悪そうな笑みを浮かべる。

目つきが座ってるのが、印象的だなあ。つか、嫌いじゃない。
「うー……」

ミクは不審げな目で見てた。

でも、ただ挨拶に来ただけだからなー。カキコだってネルだって
いう証拠はないし。

「そうそう、これ詰まらないモノですが、どうぞ」

お土産風の包みを差し出してくる。

「あ、ありがとうね」

「それじゃあ、あたしはこれで」

ネルは帰っていった。

…隣の部屋だったとはな。

「毒でも仕込んでないでしょうね」

ミクはおっかなびっくりで、遠巻きに包みを見ている。

「自給700円が、元が取れないようなイヤがらせしねーだろ。開
けてみようぜ」

言いながら、オレは紙包みを開けた。

中身は、フツーのお土産モノのお菓子だった。

「お茶の用意だな」

「ラジャーッ」

オバカなノリで、オレとミクは食後のデザートとしゃれこんだの
だった。

土産物菓子うめー。

じゅうばん

「じゃ、いつてきます」

オレが部屋から出ようとすると、

「あ、マスター、待って」

ミクが引き止めた。

「なんか忘れてない？」

と、目を閉じてキュートな唇を突き出す。

おおー。

これが、あの伝説の、『行つて来ますのちゅー』ですかい！？
ほえほえー。

オレの血流がごとと激流になったようだった。

「うん」

オレはどぎまぎしながら、急接近してゆく。

「あー、朝から、ちょーウザいんですけど…」

いきなり声がして、

びくうっ

オレとミクは飛び上がった。

振り返ると、ドアが開いており、ネルが立っていた。通りがかつた
たつて感じた。

「そっこののは、ドア閉めてしてくれる、お隣さんたち？」

「いやー、恥ずかしいところ見られた。ぎゃひー！」

「あははは」

オレとミクは、笑ってごまかした。

結局、キスは出来ずじまいで、オレは出かけた。

それで、なんでか、ネルが後からついて来るんだが…。

「同じガッコに通ってたんだから、行き先同じで当然でしょ」

ネルはバカにしたげだ。

「あ、そっか」

オレは納得。

「でも、防火ロイドがなんで通学なんかしてんのさ？」

「聴講生ってヤツ」

ネルはさらりと答える。

「知識を得るためだよ」

「ふーん、勉強熱心なんだな」

オレが感心していると、

「別に…」

ネルはそっぽを向いた。

心なしか、頬が赤く染まってるようだった。

照れ屋さんだなー。

「バツ：照れてなんかねーよ！」

「そうか？ 顔、真っ赤だぞ」

「こ、これは違ッ…」

ネルは慌てふためく。

「違っつたら違っんだからね！」

「はいはい」

「ち、キモヲタピザデブが」

「ふーん、そんな単語ごときでオレ様が傷つくとも？」

オレは内心を隠して強がり。

「いや、泣かなくても…」

「泣いてない」

オレは言い張った。

これは、目から汗が出てるだけだ。

汗なんだ。

そんなことをしてるうちに、校門についた。

「くおらあっ！……！！！」

いきなり、怒鳴り声がして、

どごおっ

オレの後頭部に衝撃。

「のおうおうッ!??」

オレは頭抱えてうずくまってるど、

「朝から、何をいちやついてんだよ、こら!」

梢の声がした。

……お嬢様のクセにもっとおしとやかにしろ。

「あ、あんたナニ?」

ネルは思わず訊いていた。

「ンだ、コラ、あんたには用はねーんだよ?」

梢が凄んだ途端、

「ひーっ」

ネルは悲鳴を上げて走り去った。

「あんた、ミクと出来上がってるんだとばかり思ってたけど、他の娘にも手えー出してんの?」

「な、何のことだ!??」

「ばっくれかよ」

「だから、何のこと?」

オレはまたまた涙。……いや、汗だった。

「確かにミクとはラブラブになってきたけど、ネルとは何の関係もないんですよ、おでーかんさま」

「誰が、おでーかんだ!? お上に成り代わって天領納める役人だ!?!??」

梢は吐き捨てた。

……いや、詳しいね。

「あのなー、ネルと親しそうにしてんじゃねーよ。ミクが可哀想だろ!?!?!」

梢は、ずいとオレに詰め寄った。

「あ、そうだね」
その剣幕に、思わずコクコクとうなずく、オレ。
「んで、次な。ミクと仲良くなりやがって！……！！！」
梢は、ものすげー理不尽な理由で、オレの脳天へ鉄鎚を落とした。
ブラックアウト。

*

気がつくと、ベッドに横になっていた。
白いカーテン。
消毒のにおい。
医務室のようだ。
「あ、気がついた？」
声がして、誰かがすぐ側で覗き込んだ。
金髪、サイドテール。
ネルだ。

「…オレ、どうしたんだ？」
「あの梢って娘にノックアウトされて、放置プレイ…」
「うわー」
「…になちやってたんで、しょうがないから、あたしが運んであげたんじゃない」
「力持ちだね」
「バッカ、その辺の男子生徒に命令したにきまってんじゃん」
「……女性が強くなつてますなー、確実に。」
「つか、強い女性だな」
「そっか、ありがとうな」
「ともかく、オレは礼を言った。」
「そしたら、ネルは目を丸くして、」
「い、いや、お礼言われるほどのことじゃないよ」
「ちよっと赤面しつつ、そっぽを向く。」

……照れ屋さんだ。

オレが決めた、今決めた。

評判は良くないみたいだけど、ホントはいい娘だな。

「少し休んでるといいよ」

「ああ」

オレが再びベッドへ横になると、

ネルは「じゃあね」と医務室を出て行った。

梢のお陰で授業には出れず仕舞いだった。

何しにガッコに来たんだか。

昼飯食って帰ろ。

食堂に來ると、

梢と、

ネルが、

なぜか離れたところに座っていた。

いや、フツーか。

……オレ、どっちに座ったらいいんだろ？

梢とは何となく友達っぽい雰囲気になって、一緒に昼飯を食べたりするようになったけど、今朝からのネルとの雰囲気からはやっぱり一緒にどうかなって流れになるはずだ。

困ったな。

今から、引き返そうか？

後退ろつと、半歩後足を踏み出したら、

ギロツ

梢に睨まれた。

……う。

これはもう後には引けんってことか。

「あ、鳴瀬さん！」

間の悪いことに、ネルがオレに気づいた。

戸口に立つものには構うな、というオレ的教訓を知らん娘だ。当たり前だが。

「具合どう？」

「あ、ああ、大分よくなったよ」

オレは答えるが、

「？」

一步も入り口から動かないオレを、ネルは不思議そうに見ている。

まあ、どうにでもなれ、だ！

「よお、そこにいるのは梢じゃんか！」

オレはわざとらしく梢に向かって言った。

「梢はオレの同級生、超お金持ちのお嬢様なんだ、見た目からは分からんが！　ネルちゃんよ、仲良くしてやってくれや！」

「え？　…ええ」

「梢、この娘はネルちゃんだ、昨日からオレの隣に越してきたんだ、ガッコには聴講生として来てる、仲良くしてやってくれ！」

「…はあ？」

「な・か・よ・く、してやってくれや！！！！！！」

オレはムリヤリ梢を引っ張ってきて、ネルと握手させた。

「ちよつと、離せよ」

梢はオレの手を振りほどいた。

「さあ、これでみんな友達だ」

オレは、いけしゃあしゃあと二人の真向かいに座って、トレイを置いた。

ちなみに今日は牛丼。

「あのねー」

「おまいなー」

ネルと梢は呆れてたが、

「んー、ここの牛丼はいつ食ってもまじー」

オレは無視して牛丼をがつく。

厨房の奥から「まずいんなら食べんじゃないよ!」とコメントが飛んできたが、オレは気にせず。

「どうしようもない、バカだな」

「ギガンテス・アフオーだね」

梢とネルはバカにした目でオレを見下ろして、

そして、

「あはは」

「うふふ」

と笑った。

……はー、助かったようだな。

実際、二人とも打ち解けたようだった。

オレが己を帰rimiずにハチャメチャやったお陰だ
偉いぞ、自分。

すげーぞ、自分。

オレはオレに御褒美を上げたい。

「おらおら、ルーク入ってんじゃねーぞ、キモヲタ」

「金持ちのお嬢様がオレをいじめるー」

オレはちよつと傷ついた。

「ネルちゃんたしけて」

「知らないってば、あたしに言うな、ハゲ」

ネルは『ドS』のようです。

……昨日のは、可愛い子ぶりっ子（死語）だったようだ。
なんかくたびれた。

それから、やっぱりネルと一緒にアパートへ戻ると、

「……マスター、お帰りなさい」

おどろおどろしい声で、ミクが出迎えた。

オレとネルを順番に見る。

いや、部屋の電気つけてないし。

ルカも双子もいねーし。

ち、逃げたな……。

「……じゃ、あたしはこれで」

ネルは「うつ」と呻きつつ、さっさと自室へ逃げた。

「マスター、ネルちゃんと楽しそうに登下校ですか……」

「ミク、誤解するなつて」

オレは部屋に入って電気をつける。

と、そこには、なんか白い髪のカリボンのボインのお姉さんが座っていた。

「うぎゃーっ！……！！……？……？」

「……こんにちわ」

白い髪のお姉さんは、うつむいたまま、ぼそぼそと言った。

「マスター、ハク姉です」

ミクはやっぱりおどろおどろしい声で紹介する。

なんつー、暗さだ。

まるで、深海の光の射さないところみたいな……。

「ハク姉、わたしのマスターです」

「……こんにちわ」

出たよ、弱音ハク。

いつかは出るだろうと覚悟してたが、予想以上の暗さだ。

「お噂はかねがね」

何、言ってる自分。

つーか、ミクが暗くなつたのは、ネルとオレと一緒に登下校したっただけでないようだ。

確実にハク姉さんの影響である。

未熟者め、暗黒面に取り込まれて！

ヨーダみたいなセリフだな。

「ミク、ハク姉さんにも、夕飯食べてってもらって！」

オレは必要以上に元気一杯でシャウトした。

「は……い……」

「……いえ、お構いなく……」

オレが構うんだよ!?

「遠慮は無用ッ」

オレはガッツポーズで力説。

いかん、オレのキャラが崩れ出してる。

でも、食費より、人と人の関係なのだ!

「ミクはネルを召喚してきなさい!」

「……ラジャッ」

ミクの気分的流れがちょっと回復したようだった。

「んぎゃー! あたしを巻き込むなあっ!!!」

「おまいの身内だろ!」

「あたしはメーカーも販売元も違うつての!」

「ボカロはボカロだ」

オレは強引にネルを座らせた。

「うー!」

「考えてみる、一食浮くんだぞ? 身内の皆さんと一緒にただ座ってるだけでよ」

「……う?」

「オレは自炊してウン十年の腕前、ミクはもちろん、ルカ姉さんも黄色い双子も食べに来るほどッ!」

「うつ?」

ネルは首を傾げる。

「自分一人で食べる夕飯はさみしーぞおっ」

「うつ……」

ネルは心当たりがあるのか、ちよつち涙ぐんでしまう。

「さ、TVおっけー、ちゃぶ台おっけー、料理おっけー、超・日本のお茶の間の正しい姿、爆現!」

オレは勢いだけのセリフを言って、超・暗々い雰囲気吹き飛ばそうとした。

「バカだよなー、鳴瀬って」

ネルは、ぷぷつと噴出す。

「はうつ……マスターをバカ呼ばわり!？」

ミクは、やっといつものアホの子リアクションを取り戻してきた。

「……うふふ」

ハク姉さんは、微笑を漏らした。

ほっ。

やっと笑い出したな。

ハク姉さん、何が原因で暗く落ち込んだかしらんが、笑えばいい顔をしてる。

優しそうだし。

女性的な雰囲気が最も出ているよな。

「マスター、その目つき、なんか気になります」

「やだやだ男って」

ミクとネルが、好き勝手なことをほざきやがってますデス。

じゅっばん（後書き）

注）キモヲタマスターの自己申告『ウン十年』はデマカセです。
笑）

じゅっさんばん

「でねー、ネットにアップした動画がねー、全然再生回数も増えないしー、コメもツマンネ、ツマンネ、飽きたからもう寝るってのばかりで……」

ハク姉さんは、部屋に残ってた酒をかつ食らっていた。(ルカのヤツ、覚えてろよ)

……泣き上戸なのな。
ウザッ。

いや、んなコト言っちゃダメだな。

っーか、趣味一緒かよ。ハク姉さん。

ま、もともとボカロユーザーが自分の才能のなさに打ちのめされてる心象風景を擬人化したもんだからなあ…。

「あのさー、いちいち動画作ってないで、自分で歌えば?」
ネルが言った。

「ぶはー。ボヤキロイドとか言っていないでさー、ま、ボヤキでもいいけど、それを歌にすりゃいいじゃん」

こいつも酒飲んでやがる。

酒が入ると、説教臭くなるみたいな。

…っーか早く帰れ。

「え…?」

「あ、それいいかもな」

「ねえ、ハク姉、それやってみたら?」

オレとミクが同調した。

「えっ…ええーっ?!?」

ハクはうるたえていた。

動画とか曲作りにはっかり頭が行ってて、気がつかなかったらしい。

で、休日にハク姉さんに付き合っで曲作りと。

オレ、ミク、ハク姉さん、ネルの四人は、梢の家に集まった。

オレらの中では機材が最も揃ってるし、場所も広い。

「おっしゃ、早速、ハク姉さんの自作曲をば聞かせてくれたまい」

オレが言つと、

「……やっぱり出さなきゃダメ？」

ハク姉さんは、早速尻込みした。

もちろん、そんなのは予想済みだ。

「何、言ってるの。誰かに聞いてもらうために作ったんでしょ？」

ネルが強引にハク姉さんの持ってたDVDをひったくる。

「ああ……」

半分諦め入ってるハク姉さん。

……諦め早すぎ。

でも、確かに人に聞かせたいから作るわけだし。

「梢ちゃん、頼むね」

「オッケー」

梢はDVDをPCへセットした。

ういーんと読み取りが始まり、PCに接続されたスピーカーから、音が流れ出す。

たん たん たたん

たん たたん

ちよつと軽めのメロディアスな曲が流れる。

テンポもゆっくりめで、ハク姉さんの人となりがにじみ出てる感じだ。

「いいじゃん」

ネルが無表情なまま言った。

「ねえ、全然悪くないよ、ハク姉」

ミクはとにかく元気付けようとしてる。

「そうだね、とにかく歌えばいいじゃん、キー高くしてッ」
梢もミクに同調。

「わーい！」

リンは状況把握してない。

……まあ、女の子には受けが良いようだな。

そっち方面へ進むべきだろう。

「ここはミクたちに任せようか」

オレはレンに向かって言った。

「そうだね」

レンはうなずいて、コントローラーを取り出し、オレに一つ渡す。

「とりゃあーッ！」

「勝負だ、鳴瀬さんww！」

「受けて立つぜ、レン！」

オレとレンは違う世界に入ってしまった。

で、ほったらかしたにもかかわらず、ハク姉さんはしっかり曲と歌詞作りに打ち込み、仕上げてしまった。

きっかけあれば……っていうけど、にしても早いな。

昼食の後、オレたちは再び梢の部屋に戻った。

「さて、歌詞と曲が出来たから、次は実際に歌ってみることだな」

「え……そんなっ……」

ハク姉さんは、またまた恥ずかしそうにイヤイヤをした。

……おお、可愛いらしさが神がかつてる。

「マスター……」

ミクがジト目でオレを見てた。

こわっ。

「えーとにかく、この先は歌うのみっ」

「いえー！」

リンが元気に叫んだ。

「あうあうッ……」

ハク姉さんは、あわくつて口に手をつっ込んだ。

やり、お約束仕草ゲットオツ！！

「ピザでも食ってる、ヲタ」
ぐえ。

んで。

ハク姉さん、歌の方は上手いじゃんか。

か細く繊細な声をしてて、バラードとか心情を歌う系の曲にぴったりだと思う。

私の曲

心にある風景 映したものだけど

何故だか あの曲に似てるとフルボッコ

私の絵

心に残るモノ 書いたつもりだけど

あーヘタヘタヘタと ボッコボコ

みんな 好き勝手叩いてくけど

叩かれるために うpしたんじゃないの

もっと愛あるコメ 欲しいの

でないと私 自分の中に埋もれてしまうわ

お気に入りに入れて欲しいの

そしたら私 もっともっと頑張れると思うわ

でも

頑張れ 私

弱音吐くヒマあんなら 作業しよう

同じ想いしてる ユーザーたくさんいるはずだから

ぱちぱち。

拍手が上がった。

ペコリ。

ハク姉さんはお辞儀した。

「うん、オレには伝わってきたよ、ハク姉さんの心情…」

「私も…」

オレも梢も、少し涙ぐんでいた。

ユーザーの立場に立った歌だなあ…。

「みんな、ありがとう」

ハク姉さんは、何だかオレらに感化されたのか、やっぱり涙ぐんでいた。

「みんなの協力があったから、自分でもできたよ」

「感動のシーンのトコ悪いけど、まだ微調整の作業が残ってるよ」
ネルが言った。

水を差してるようだが、確かにその通りだ。

まだ完成じゃない。

「さ、完成目指して、もう一頑張りだ！」

オレが言つと、

「いえー！」

リンがノリだけで叫んだ。

そこからは純粹にPCの作業に入る。

PCの操作ができる、ハク姉さん、オレ、梢が、かかり切りになつて調整を行う。

残った、リンレン、ミク、ネルはゲーム機で遊んでいた。

あれ……リンレンって何もしてない？

ま、いっか。

あんなミソツカス。

とか言つてたら、ロードローラーで轢かれそうになりました。

こえーぜ、双子。

じゅうよんばん

ハク姉さんの曲は完成した。

早速ネットにアップすると帰って行った。

オレらも帰るとするか。

オレ、ミク、ネルはアパートへ戻った。

「じゃあね、二人とも」

ネルは素っ気無く言っ、自室へ入ろうとする。

「今日は結構楽しかった」

そして、つぶやいた。

オレらが目を丸くしてると、

「な、なんてね」

顔を赤らめて、さっさとドアを閉めてしまった。

「……マスター」

ミクがオレを見た。

「うん？」

「ネルちゃんって、ホントは良い娘だね」

「そうだな、ちょっと口が悪くて意地悪なところもあるけど、根は良い娘だな」

オレはうなずいた、

*

やべ、遅刻すんよ。

オレは寝坊してしまった。

つい、ミクの歌に付き合っていて遅くなったのだった。

目覚ましは鳴ったが、起きれなかった。

ま、ミクも寝ぼすけだからな。

メイド・執事系の働きはできないだろう。

…でも、萌えメイドは可能か。

なんて、また、キモヲタて言われそうな妄想をしてると、
ちらりと金髪のサイドテールが見えた。

あれ？

ネルじゃんか。

路地に入ったところにいた。

何してんだろ、あんなところで？

……まさか、恐喝？

してる方か！？

いや、あの娘がそんなことするはずない。

オレは葛藤。

…余計な事に首突っ込むな。

…でも、関係ないって見ぬ振りすんのか。

……。

「よお、ネルじゃん」

オレは結局、ちょっかいかけることにした。

「……あ、あんた！？」

ネルは驚いて振り向く。

「何してんだ？」

オレはニヤニヤとして見せた。

「なに、コイツ」

「カンケーねーヤツは引っ込んでな」

路地向こうから声がする。

見ると、金髪サイドテールの普通の格好をした女の子たちがいた。

服装はまちまちだが、みな同じようにかつたるげな雰囲気だ。

「あ、ネルたちじゃんか」

オレン家のミクの他に小村井ミクがいるように、ネルの他にもネルはいる。

そっというヤツらだろう。

そして、ネルと言えば工作。

「……」

オレは、じーっとネルたちを見た。

「ち、邪魔が入った」

「いこ、いこ」

「こんなキモヲタ相手すんな」

ネルたちは、何か根負けして、というか引いて去っていった。

「鳴瀬、余計ーなコトすんなよな」

ネルはオレと並んで歩きながら、言った。

「わりー、なんか気になつてさ」

「……」

ネルは不機嫌だった。

ガッコについてからも、ずっとそっぽ向いてる感じだった。

いや、こっちから話しかければ返事はすんだけどな。

ちなみに、オレはまた授業に間に合わなかった。

とほほ。…単位大丈夫かな？

「あれ、何、二人ともケンカ中？」

梢が面白半分にやってくる。

トレイには、カレーライスが乗っていた。

お嬢様のわりには庶民的なメニューが好きだよな、コイツ。

そう、昼なんで食堂に来てる。

「別に……」

ネルは、そっぽを向いてしまう。

「ありゃ、こりゃ本格的に拗ねてますなー」

「あんまし、そっぽ向いてると、そのうち一回転して戻ってくるんじゃないー？」

「……」

バンッ

ネルはテーブルを叩いて、立ち上がった。
そのまま、つかつかと出て行ってしまった。

「あのー、君のトレイ誰が片付けんの？」

「おまいに決まってんじゃないん」

梢が意地悪そうに言った。

で、部屋に帰ると、ハク姉さんが来てた。

ルカ姉さんも来てた。

リンレンも来てた。

「みんな、いらっしやい」

「あれー元気ないね、鳴瀬さん」

レンが目ざとく気づいて言った。

「どったの、キモヲタらしくないわね？」

ルカがツナ缶を開けながら言った。

マヨネーズ完備だった。

いや、何時から、オレのことキモヲタで？

「ネルなんだけだよー」

「あの娘がどうしたの？」

「なんか、仲間に絡まれてたみたいなんだ」

「仲間ってあんなのまだ他にいるの？」

ルカはツナ缶を頬張った。

「うーん、デリシヤスッ」

……一人だけ食べてんなよ。

「んで、どうしたの、マスター？」

ミクが訊いた。

「それが成り行きで間に入っちゃってさ、そしたら相手が帰っちゃったよ」

「やるーッ」

「よ、男の中の男」

リンレンがやし立てる。

「えー、ちよつと心配」

ミクはオレを見る。

「大丈夫、相手、自給700円だろ、余計な労力はつかわねーって」
「そうかな、邪魔者は排除するタイプだよ、あいつら」

ルカが意地悪い笑みを浮かべる。

「悪巧みだけは得意だからねー」

「……なんか意地悪されたことあるみたいだね、ルカさん」
「言わないで、ミクちゃん。思い出したくもない」

ルカはコメカミを押さえて唸る。

「……そっか、意地悪されたことあんのか。」
夕飯の時間になっても、ネルは来なかった。
部屋にも戻ってないみたいだし。

ミクの携帯に電話が掛かってきた。

ルカ姉さんからだった。

『あ、ルカです』

「どしたの？」

『あのね、帰り道でネルちゃんを見かけたから』

「え？」

『あの娘、やっぱり悪い仲間とつるんでるみたいね』

「えーッ？」

ミクは、あうあう、きよろきよろと無駄に騒いだ。

アホの子リアクションだ。

『ま、冷たいようだけど、あんまり構わないことね。あの娘だって
子供じゃないんだから』

「う……うん」

『じゃあね』

ルカは電話を切った。

「じゃあ、電話なんかしてくんなよ！……ってツッコミ入るよな」
「……ですよね」

オレとミクは顔を見合わせた。

＊

オレとミクは夜の街に出てみた。

ルカの帰り道と思われる方角を辿ってみる。

ま、そんなんで見つかる訳ないか。

でも何もしないでられなかったんだよな！。

オレもミクも。

「危ないことしてないといいけど…」

ミクは心配性だった。

「大丈夫だろ、あいつ、意外に強いから」

「うん」

ミクはうなずいた。つーか、うなだれたって言った方がいいか。

結局、ネルは見つからなかった。

じゅっばん

朝、寝ぼけ眼でトーストを焼いてると、ドアの向こうを誰かが横切ったようだった。

ネルかな？

聞き耳を立ててると、

ガチャッ

鍵を開ける音がした。

やっぱりお隣さんだ。

朝帰りか。

何してたんだろ？

……って、関係ないか、オレらには。

「マスター、ネルちゃん帰ってきたみたいだね」

「うん」

オレはミクの方もトーストを焼いてやった。

バターとイチゴジャムを塗る。

ソースはダブルがいいね。

「ココアがいいね」

ミクは袋ココア出してきて、二人分作った。

「お、さんきゅっ」

それで、通学。

ネルは部屋から出てこなかった。

教室から出てくると、教務科のある棟からネルが出てくるところだった。

あ、ちゃんとガッコ来てたんだな。

「よお」

オレが挨拶すると、

「いつも元気だな」

ネルはそれだけを言うと、さっさと行ってしまった。無表情だし。
「嫌われた〜、嫌われたッ」

梢がオレを見つけて、近寄ってきた。
子供か？

「二兎追うものは一兎をも得ず、だよ、キモヲタ君」

嬉しそうに言う。

「いや、追ってねーッつの」

「そうかい？」

「しつけーな」

オレは流石にうつとおしくなつて、歩き出す。

「怒んなよ、冗談だろ」

梢は、オレの後を着いてくる。

「それより、あいつ、何をやってるか知りたくねーか？」

「……どういう意味だ、それ？」

「私の家の情報網を使ってみたんだ」

調べたってことか。

「そしたら、一部のネルたちが製造元からも販売元からも見放されてるってことが分かった」

「……それがこの前、オレが会ったネルたちか？」

「多分な」

梢はうなずいた。

「そいつらは、本来の印象操作工作を超えて、妨害工作をしたんで、見放されたんだ」

「過激派ってどこか」

「あれ、それっておかしくね？」

「じゃあ、自給ナシで働いてんの？」

「ンなワケねーだろ。そいつらは、食い扶持を得るために活動してんだよ。」

あと、スポンサーを見つけようとしてもしてんだろっがな」

収入のために工作してたのが、工作をして収入を得るようになって

たつてことか。

「何をたくらんでるかまでは分からんけど、収入を得るためには何かをしなけりゃいけないわな」

梢は他人事のように言う。

「一番手っ取り早いのは何だ？」

オレは訊いた。

「そりゃあ…」

梢は一瞬間をおいて答えた。

んなこともワカンネーの、おまい？…って顔だ。

「金を盗むのが一番てつとりばやいな」

「直結かよ、目的と手段」

「労力を惜しむ連中が考えることは皆、同じだ」

梢は説明を始めた。

「物理的に盗むのはそれこそ労力を使う、だから電子マネーを動かそうとする」

いや、こいつ頭良いな。

「電子マネーって、それ犯罪だろ？」

「当たり前だ。ネルはその仕事の性質上、ネットダイブ機能をつけられている」

「うへー、近未来SFWWW」

だから、歌わないのか。

「茶化すな」

梢は気持ちよく説明してたところだったのか、眉をしかめる。

「簡単に、ネットダイブハッキングだと思え」

「銀行とかを狙うってか？」

「いや、足がつかないよう、貯蔵されてるものには手を出さないはずだ」

「どういうこと？」

「つまり、無から集めようとするってこと」

……？

「あつたまわりーな、詐欺とかあんだろーが、あんま被害が大きくなってコンスタントに利益上げれるのが」

「ああ、振り込め詐欺とか？」

「古いな、お前…」

それをミクたちに伝えてみた。

「あの……」

ハク姉さんが、こわごわと手を上げた。

「はい、ハク姉さん」

「あの、あの、私、ネットサーフよくするんだけど、最近、性質の悪いウイルスが出回ってるらしいの。…正確にはトロイの木馬だけ」と

ハク姉さんは頑張ってしゃべっていた。

意気込むと緊張するタイプだな。

「トロイの木馬って？」

「ヲタのくせに知らないの？」

ルカがバカにするように言った。

「ウイルスとかと同じようにPCに取り付いて悪意を与えるものの一つよ。」

神話のように入れ物の中に潜んでるから、トロイの木馬って言われるの」

「あの、あの、ウイルスとかって急にポコンと出るから、皆、それほど騒がないけど、トロイの木馬みたいなスパイウェアはクレジツトカードの暗証番号とかを盗んじやう場合もあるから気をつけないと…」

「PCに詳しいね、ハク姉さんって」

「……私、何回かやられたから」

ずーん。

ハク姉さんは沈み込んでしまいました。沈没と。

厄介だなー。

「でも、それ、当たり前いな」
オレは言った。

「へ？」

ミクはアホの子らしく、まったく話を理解してない。
が、君はそれでいい。

つか、ハク姉さんのサルベージでもしてたまい。

「そっか、ウイルス使って他人のクレジットの暗証番号入手して、
引き落としてるんだ」

意外な事にリンがうなずいた。

……え、こいつアホの子じゃねーの？

「使用停止になるまで……いや、1回だけ引き落として後は引いち
やえば中々足がつかないしね」

レンもうなずいてる。

こいつはメカ好きそうだな。

「ATMに監視カメラあるだろ？」

オレは言ってみた。

「バカねー、直接姿見せるワケないじゃん」

リンがバカにした表情を見せる。

「そこはネットダイブして操作してんじゃないかな」
レンが追隨。

「直接、ネットダイブして盗んだ方が早いだろ」

オレはまた訊いてみる。

「それをやると大騒ぎになるわよ」

ルカが言った。

「新手のコンピューター・ウイルスが出たってことになって、全力
で対策を練られちゃうでしょ。」

それより、既知のマテリアルを使って小規模の活動を繰り返す方
が、見つかりにくいし、見つかったも既に対応可能なんだからあん
まり騒ぎにならないわ」

「あ、そっか。たまたま運の悪い人が引っかかる程度なら、放つと

かれるもんな」

「そう、そして、たまたま引っかけた人の分だけでも、十分見入りになるわ。小規模のチームだもの。」

これでウィルスを使ってクレジットカードの暗証番号を盗んでるってことで決まりね」

ル力は結論付けた。

「うう…私の貯金」

ハク姉さんは、その話を聞いて、また、ずずーんと落ち込むのであった。

で、お隣さんのネルがそれにかかわってるか？

それは良く分らん。

心情的にはそんな悪いことをするような娘とは思えない。

ま、さっきのはあくまで仮説だからな。

検証をしてみないといけない。

でも、どうやって検証するといいんだろう？

「やっぱ、ハク姉さんに協力してもらうか」

「え、でも、ハク姉、可哀想だよー」

「そうだけど、ネルがこのまま悪い仲間と付き合って捕まったりされても目覚め悪いし」

「それも、そうだよねー」

ミクは、うーっと唸るようにして、頭を抱えた。

アホの子は考えたらいかん。

*

オレはガッコに行って、ネルを探した。

そして、食堂で見つけた。

「いたー！」

オレが駆け寄ると、

「うわっ、なんだ、鳴瀬？」

ネルは驚いたようだった。

「おまい、ウイルス流して暗証番号ゲットしてネットダイブしてないか！？」

「こら、そんな言い方で分かるか！」

梢が背後からオレの頭を殴りつけた。

「ネルちゃん、あんた、仲間と会ってるみたいだけど、悪いことしてないだろうね？」

「カンケーねえだろ」

ネルは不貞腐れたように顔を背ける。

「関係あるさ」

梢はネルの正面に立ち、言った。

「友達だろ」

「……そんなの」

ネルは何かうつむいてた。

「あんた、昨日、コイツのために教務科に行って頼んでたよな？」

「…え、何それ？」

「コイツが授業に遅れたの、自分のせいだから、何とか出席にしてやってくれってよ。」

そんなこと友達じゃなかったらやんねーよ」

「じゃあ、昨日、教務科から出てきたのって…」

「そんなんじゃないよ」

ネルは、またそっぽを向いた。

「そうか、ありがとな」

「……」

ネルは無表情。

「えつとな、それはそうと、オレたち心配で…」

「なんだよ、あたしが悪いことしてるって決め付けんなよ」

「そんなつもりじゃ…」

オレが言った時、

バシッ

「きゃっ」

音と悲鳴が鳴り響いた。

梢がネルの頬を叩いたのだった。

「ち、人の心遣いがわかんねーヤツに用はないよ」

梢はそのまま出て行った。

「……」

ネルは、無言のまま同じように出て行った。

オレはポツンと一人残されたのだった。

「え、そんなことがあったの？」

ミクは、あわわと慌てふためいた。

「うん、気難しいんだよな、二人とも」

「そうねえ」

ミクが言った時、

ネギライス

という歌が流れた。

ミクの携帯だ。

何を、着うたに設定してんだよ。

「はい、あ、ハク姉。うん、今すぐ行くよ」

え、何だろ？

「マスター、ハク姉のところにウィルスが出てきたって」

「へ？ あ、そっか、じゃあすぐ行こう」

オレとミクは、慌しく出かけた。

ハク姉さんの住むアパートは、近所にある。

ミクがハク姉さんと出会ったのも、そのお陰だ。

ハク姉さんの部屋は、オレの部屋より高級感があつた。
どうやって収入得てんだろ？

「マスター、ハク姉はギャンブルの才能があるんだよ」

ミクが言った。

「競馬、競艇、パチンコ、パチスロ、トランプなんでもおk……」

ハク姉さんは弱々しく、親指・人差し指・小指を立てて見せた。
いやゆるキツネさんの形だな。

ギャンブラーかよ。

さてよ、ハク姉さんを大量生産したら、ギャンブル施設壊滅すんじゃない？

「コレ見て」

ハク姉さんはPCのモニターを示した。

いわゆるウィルス監視ソフトは入ってなかった。

それを入れたら、ウィルスがブロックされてしまうからな。

その代わりに見慣れないソフトが立ち上がっていた。

「ちょうど、ネットで買った物したんだけど、その記録からクレジットカードの暗証番号を盗んでった」

ウィルスの名称と、時間が表示されていた。

「簡単に言つと、これ、ウィルスの活動を逆に監視するソフトなの」

ハク姉さんは得意そうに言った。

「見つけたウィルスにタグを取り付けて、わざと放流してやって、逆探知をするの」

ハク姉さん、すげー技術の持ち主だな。

「ネットに直結すれば、ネルちゃんたちには負けるけど、私だってある程度はダイブできるの」

「でも、相手に見つかからない？」

「え、もう、つないじやつた……」

ハク姉さんは、ボケをかました。
うげ。

その瞬間、デスクトップに立ち上がったソフトが「ピー」と警告音を出した。

どさっ

ハク姉さんが、その場に崩れ落ちた。

じゅうろくばん

「ハク姉!？」

「な、何が起こったんだ!？」

オレとミクは、ハク姉さんに駆け寄る。

ミクがハク姉さんを抱き起こそうとしたが、完全に意識が飛んでいた。

瞳に膜がかかった様な感じだった。

「ち、何か送り込まれた?」

オレがPC画面を見ると、監視ソフトには「Destroyer」
って表示されいた。

これって、ウィルスの名前か?

……確か、破壊者って意味だよな。

「まずい、ミク、ネルに電話!」

「あ、はい」

ミクは携帯を取り出した。

「はい」

無表情な声が流れる。

「あ、ミクだけど、ハク姉が大変なの!」

ミクは、あうあうとしゃべった。

何か大変だってことは伝わっただろう。

「え? なに?」

「ちょっと貸して」

オレはミクから携帯をひったくる。

「ネル、助けてくれ。ハク姉さんがウィルス食らってヤバイんだ!」

「…えっ」

びっくりした声がした。

「はやくッ! そっちに迎えに行くから!」

「わ、わかった」

ネルが電話の向こうでうなずく。

オレは携帯をミクに返し、ネルを迎えに行った。

ネルはアパートから出たばかりだった。

一緒にハク姉さんの部屋まで戻る。

「うっ」

ネルはPCモニターを見て、唸った。

「『Destroyer』か、厄介だな」

「何とかしてくれ」

オレは頼み込んだ。

「……」

ネルは少し考えて、

「ハク姉に直結ダイブしてみる」

ジャックを取り出した。

自分の首の後ろのコネクターに差し込み、もう一端をハク姉さん

のコネクターに差し込む。

「ネルちゃん、気をつけてね」

ミクが心配そうに言うと、

「任して」

ネルはVサインをして見せた。

がくつ。

ネルの身体が、ハク姉さんと同じようにくず折れる。

「よっ」

「うっ」

オレとミクはそれを受け止めた。

ネルだけが頼みの綱だ。

*

ネルはすぐに戻ってきた。

「ち、あのヤローてこずらせやがって……」

とかなんとか言いつつ、立ち上がる。

「もう、大丈夫だよ。ウィルス倒したから」

「おう、じゃあハク姉さん、元に戻るんだな」

「まあね」

うなずく、ネル。

「ボカロのプログラムには自己修復機能がついてんだろうから、すぐに元通りさ」

「はー」

オレはため息をついて、しりもちを着いた。

「……ネル、ごめん。心のどこかでは、やっぱり君を疑ってたと思う」
オレは謝った。

「……そのことなら、もう気にしてないよ」

ネルは、どこか悲しげな笑顔を見せた。

「あたしの生い立ちとか、性格にも悪いところあったし……でも、これは信じて欲しい。」

あたしは、自分の仕事に嫌気が差してきて、辞めたんだ。本当に自分の興味のあることをしたいから」

「それで、聴講生？」

「うん」

ネルはちよつと頬を赤らめた。

恥ずかしがり、おk！

「「ち、キモヲタ」」

ミクとネルがハモった。

「あたしもゴメン」

ネルはぺこたんと頭を下げた。

「自分のコトだけ考えて、鳴瀬の心遣いに気づかなかったと思う。梢ちゃんに言われるまではね。……後で、梢ちゃんにも謝らないとね」

「大丈夫、オレも口添えするよ」

オレは請け負った。

「やっと、ネルと仲直りできたな」

「よかったね、マスター」

ミクは一旦は喜んでから、

ぎゅううううう

とオレの腕をつねった。

「いててっ、何しやがる？」

「マスター、ネルちゃんと仲良くなりすぎですッ」
嫉妬かよ。

「あはは」

ネルは笑ってごまかした。

「ゴメン、仲間と会ってたのって？」

「あ、あれは……」

ネルはまた赤面しつつ、

「実は、あいつら、勉強があんまりできなくてさー」

「え、それって……」

「かてきょー？」

「うん」

ネルはうなずいた。

「バックボーンがなくなつてさ、社会に放りだされて、初めてそういう学校で習うような知識が必要なのに気づいたんだ、あたしら……」

例え、方向が間違つてたとしても、昔の仲間に頼られたら、見捨ててられなくて……」

「そうだったんだな」

「うん、いい話ね」

オレとミクはしんみりしてる。

「でも、もうあいつらとは会わない」

ネルは吹っ切るように言った。

「じゃねーと、鳴瀬とミクちゃんたちが心配するからなッ」
いたずらっぽく言って、ネルは笑った。

ハク姉さんはすぐに回復した。

何か、ウィルスに入り込まれたのは、今回が初めてじゃないらしい。

身体にもともと耐性があるのと、ネルがウィルスを速攻で駆逐したのが良かったようだ。

死中に活って感じた。

もう二度と遭遇したくない、こんなのは。

んで、ネルの昔の仲間らは数日後、警察に捕まったようだった。

アンドロイド犯罪！！

とか何とか、ニユースを若干賑わせた後、すつと消えた。

いつものことだが、世間つてのは熱しやすく冷めやすかった。

もちろん、梢にも謝りに行った。

オレもついて行った。

梢と会った瞬間、

「あ、ネル……」

梢はもじもじとしながら、

「こないだはゴメン、ぶつたりして」

上目遣いに、ネルを見る。

「うっん、あたしこそ、ムキになってゴメン」

ネルも梢も、ほっとしていた。

良かった、梢とも仲直りだ。

ネルも梢も誤解されやすい性格だが、性根は真っ直ぐだ。

みな、いい娘だ。

つか、今後、オレをいじめなければもつといい。

「ちよつと、鳴瀬聞いてんの！？」

「まったくキモヲタの分際でシカト？
うひーん、誰か何とかして！。」

じゅうなばん【ネルの角度1】（前書き）

ネル視点です。

ストーリー的には、じゅいちばん〜じゅうろくばんまでの内容を重複します。

じゅうななばん【ネルの角度1】

あたしは作られた。

印象操作をするために。

ボーカロイドの人気を落とすために。

そのために、ヲタどもの祭りを台無しにした。

そのために、ボカロユーザーの創作意を落とした。

コメ欄にわざと水をさすコメを力キコしたり、

荒らしたり、

荒らしたり、

荒らしたり、

荒らしたり…

『よくやったぞ、09号』

頭をなでられる。

あたしはその感触が好きだった。

メーカーの営業マンだった。

営業マンは、あたしたちの活動がうまく行くと誉めてくれた。

逆にうまく行かなかった場合は、渋い顔をしたり怒ったりするの
で、みんなしゅんとしてしまう。

あたしは、何とか誉められようと頑張った。

その営業マンが好きだった。

ただ誉められなくて、ただそれだけのために、単純至極に活動し
た。

でも、終わりが来た。

『……今日はさよならを言いに来たよ』

営業マンは言った。

『転勤になったんだ』

たったそれだけの言葉を残して、営業マンは去って行った。

あたしは、何のために頑張ったのだろう。

分からなくなった。

存在する意味が。

見失った。

生きる意義を。

聴講生として、授業を受け始めたのは数日前からか。

バイトをして学費を稼いだ。

安アパートだが、住む場所も決めた。

出だしとしてはなかなか良いかもしれない。

あたしは、まずはお隣さんに挨拶しようと思ったが、寝過ごしてしまった。

授業に遅れてしまう。

仕方ない、夕方にしよう。

夕飯の時間は避けた方がベターだよね？

学校に行き、初授業を受けてみた。

ちょく感動く

あたしつてば、学生みたい。

そんな自惚れにも似た、陶醉感に浸っていると、授業が終わった。講義の内容はそれほど難しくはない。

自分で購入した本に沿った内容だ。

だが、一人で読み込んだ時には気づかなかった事がたくさんあった。

学問は奥が深い。

とか、やっぱり浸っていると、何か聞こえてきた。

隣の部屋からだった。

あ、そういうや挨拶済んでないや。

でも、うるせー、連中だな。

安アパートの事だから、音が漏れてもしょうがないんだけど…

『……で、亞北ネル…よ』

途切れ途切れな感じで聞こえてきた。

なっ、あたしの事話してる!?

『え、あの娘、そんなところに……の?』

イヤそうな声が聞こえた。

クールな感じの声。

……なんか偉そうにしてる年増を思い出すな!。

『……工作…よ…』

『自給700円……にてんだよ』

ぬわんだと、この黄色い双子っぽい声の主め!

……でも男の子の方はケツコー好き。(笑)

『……歌……ヘタだし』

『……ダンスもダメダメ……だし』

『減らず口と、しつよくなイヤがらせだけが取り得なのよねー』

『……あの娘……1人見つけたら、30人はいる……』

ちつくそー、あたしの悪口オンパレードかい!?

お隣さんめー。

あたしは、わなわなと震えた。

……でも、しょっぱなからケンカする訳にもねー。

……世の中渡ってくには忍耐も必要だね。

んで、あたしはだんだん盛り下がっていく。

……お隣さんに渡すお菓子も買っちゃったし。

ちっ。

昨日、別ネルから教えてもらったアホなページにカキコでもして
憂さ晴らしするかぁー。

既に別ネルがカキコしてる。そこへ追加しても、別人とはわかん
ねーだろうし。

『あたしは音痴じゃねー！

ざけんな、こら、

ダンスだってそこそこできるもん！

ゴキブリと一緒にすな！！！！』

グリグリとカキコして、あーすっきりした！

そんでもって、さっさとお隣さんへお菓子渡してこよっと。

部屋に戻ると、

『お茶の用意だな』

『ラジャーッ』

お隣さんの声が聞こえた。

年中叫んで疲れないかね、あいつら……。
そっぴや、男の子の方は学校で見かけたな。

朝、登校しようとするのがかると、ドアが開いていたので、思わず覗き込んでしまった。
そしたら、

んちゅー

…キスシーンを演じていた。

「あのー、朝から、ちょーウザいんですけど…」

あたしは一応、忠告してやった。

「そういうのは、ドア閉めてしてくれる、お隣さんたち？」

「いやー、恥ずかしいところ見られた。ぎゃひー！」

「あははは」

男の子とミクは、笑ってごまかした。

男の子は、キスの続きはせずに、さっさと出かけてしまう。

あたしも出かけたが、やはり同じ道。

男の子は、振り返ってあたしを不思議そうに見てるので、

「同じガツコに通ってんだから、行き先同じで当然でしょ」

言ってやった。

「ふーん、勉強熱心なんだな」

男の子が言った。

…バツ…こいつ、何言いやがる……あたし、そういうのには慣れてないんだつてば！

ち、恥ずかしいだろーがッ。

「別に…」

あたしは、何でかそっぽを向いてしまった。
あー、顔赤くなってるんだろうな。

アホの子みたいなリアクションだよ、まったく。
誰がこんな性格にプログラミングしたんだ？

「照れ屋さんだなー」

「バツ…照れてなんかねーよ！」

あたしは叫んでいた。

「そうか？ 顔、真っ赤だぞ」

「こ、これは違ッ…」

あーもう、何でこんな流れ？

そう思えば思うほど、焦ってしまっ。

「違っったら違っんだからね！」

あたしは強引に押し込んだ。

こういう時は、逆切れで黙らせるのが一番。

「はいはい」

男の子は仕方ないなあ、って感じでうなずく。

あー、腹立つ、その態度。

「ち、キモヲタピザデブが」

あたしは、ダメ押しの一言。

ミクなんか買ってるヤツはキモヲタに決まってる。（偏見）

「ふーん、そんな単語ごときでオレ様が傷つくとても？」

男の子は強がってはいたが、だからだと涙を流し始める。

ありゃ、そんなに傷ついちゃったの？

「いや、泣かなくても…」

あたしは内心思いつつも、ツッコミ。

「泣いてない」

男の子は言い張った。

「これは、目から汗が出るだけだ。汗なんだ」

……ま、いつか。

そんなことをしてるうちに、校門についたけど、

「くおらあっ！……！！」
いきなり、怒鳴り声がして、

どごおっ

メガネにヘアバンドの女の子が、男の子の後頭部にラリアットをかました。

セミロングの髪がふあさつと揺れる。

「のおうおっ！？？」

男の子は、頭抱えてうずくまってる。

「朝から、何をいちやついてんだよ、こら！」

女の子は怒鳴った。

うげ、なにこの娘？

てゆーか、イチャついてないんだけど！？

「あ、あんたナニ？」

あたしは思わず訊いていた。

いや、ホントはかわりたくないよう。

「ンだ、コラ、あんたには用はねーんだよ？」

女の子が柄の悪い態度で凄んだので、

「ひーっ」

あたしは逃げ出したのだった。

後で、戻ってきてみると、男の子は気絶していた。
ひえー、なんつー学校だよ、ここ？

驚いては見たものの、このまま放つとくワケにもいかない。

…しかたない。

あたしは、その辺の男子を呼び止め、医務室まで運んでもらった。
お隣さんだから、

成り行き上だから、

色んな理由が頭の中を飛び交ったけど、結局気になったのよね。

持ち物を拾ってきたが、カバンには『鳴瀬』と名前が入っていた。
そっか、鳴瀬か。

……苗字だけかよ、名前も書けよ。

いや、知りたいわけじゃなくて。

なんだよ、こら。

あたしは自分で自分に言ってみたり。

ち、なんて照れ易い体質なんだ。

「う…」

男の子……いや、鳴瀬が気づいたようだった。

「あ、気がついた？」

あたしは、鳴瀬の顔を覗き込む。

「…オレ、どうしたんだ？」

「あの梢って娘にノックアウトされて、放置プレイ…」

「うわー」

「…になちゃってたんで、しょうがないから、あたしが運んであげ
たんじゃない」

「力持ちだね」

「バツカ、その辺の男子生徒に命令したにきまってんじゃん」
か弱い乙女に何を言うか、しつれーだな、君は！？

「そっか、ありがとうな」

とか思ってたなら、鳴瀬はお礼を言った。

…う、またかよ、ちょー恥ずかしいから！

「い、いや、お礼言われるほどのことじゃないよ」

あたしはそっぽを向く。

顔、またまた赤くなっただろうな…。
うー。

でも、照れてる場合じゃない。

あたしは、ちよつと咳払いをして、

「少し休んでるといいよ」

そそくさと退席を決め込む。

「ああ」

鳴瀬が横になる気配がした。

「じゃあね」

あたしは去り際に、どうしても声をかけたくなった。

昼になり、食堂に来た。

あー、おなか減った。

アンドロイドなんだけど、リアル過ぎ嗜好の連中が作ったらしくて、空腹感まで再現しやがった。

たりー。

でも、おいしいもの食べたときは、すごく幸せだから、そこだけは感謝してやってもいい。

定食を頼んで、席に着くと、例のセミロングの娘を発見。
うげ。

近くに座んなくて良かった。

と、そこへ鳴瀬が現れた。

ふらついでる。

大丈夫かよ？

そう思ったら、

「あ、鳴瀬さん！」

声をかけてしまっていた。

…あれ、なに、ぎよつとしてんだろ？

「具合どう？」

一応、聞いてみるのが一般常識だよな。

と、自分に言い聞かせてみたり。

「あ、ああ、大分よくなったよ」

鳴瀬はうなずいた。

でも、入り口ですつと止まってる。

…何してんだろ？

すげー、他の人たちの邪魔だよ。

鳴瀬はすぐに何かを思い切ったかのように動いた。

「よお、そこにいるのは梢じゃんか！」

あの娘に声をかける。

ざーとらしいのはなぜ？

てゆーか知り合い？ …… 知り合いだよな。 あんなケンカするんだから。

「梢はオレの同級生、超お金持ちのお嬢様なんだ、見た目からは分からんが！ ネルちゃんよ、仲良くしてやってくれや！」

「え？ …… ええ」

鳴瀬は、いきなり、あたしに振ってきたので、ちよつとうろたえてしまった。

「梢、この娘はネルちゃんだ、昨日からオレの隣に越してきたんだ、ガッコには聴講生として来てる、仲良くしてやってくれ！」

「…はあ？」

あの娘…… 梢ちゃんっていうのかも、面食らっている。

「な・か・よ・く、してやってくれや！ ……！」

鳴瀬はムリやり梢ちゃんを引っ張ってきて、あたしと握手させた。

「ちよつと、離せよ」

梢ちゃんは鳴瀬の手を振りほどいたが、

「さあ、これでみんな友達だ」

鳴瀬は、いけしゃあしゃあとあたしと梢ちゃんの真向かいに座って、トレイを置いた。

ちなみにモノは牛丼。

「あのねー」

あたしが呆れて言ったら、

「おまいなー」

梢ちゃんも同じように呆れてた。

「んー、この牛丼はいつ食ってもまじー」

鳴瀬は聞いているのか、牛丼をがつついている。

厨房の奥から「まずいんなら食べんじゃないよ!」とコメントが飛んできた。

「どうしようもない、バカだな」

梢ちゃんがバカにした目で、鳴瀬を見た。

「ギガンテス・アフォーだね」

あたしも同じように鳴瀬を見やる。

アホだな、こいつ。

笑える。

でも、なんか憎めない。

「あはは」

そう思った瞬間、あたしは可笑しくなった。

「おらおら、ルーク入ってんじゃねーぞ、キモヲタ」

梢ちゃんが、鋭い眼光で鳴瀬を射すくめる。

「金持ちのお嬢様がオレをいじめろ」。

ネルちゃんたしけて」

鳴瀬は、あたしにすぎるような素振り、

「知らないってば、あたしに言うな、ハゲ」

あたしは悪ノリして言ってみた。

わー、たのしー。

罵るの好き。

じゅうはちばん【ネルの角度2】

それから、鳴瀬と一緒にアパートへ戻ると、

「……マスター、お帰りなさい」

おどろおどろしい声で、ミクが出迎えた。

鳴瀬とあたしを順番に見る。

まさか、嫉妬してんじやないだらうな？

アホの子だから、何しでかすかワカンネーぞ？

「じゃ、あたしはこれで」

あたしは「うっ」と呻きつつ、さっさと自室へ逃げた。

部屋に戻って、荷物を置き、片付けとか洗濯をした。

鳴瀬の部屋は相変わらずうるさい。

トントン。

ドアをノックする音。

「はい」

出てみるとミクだった。

「ネルちゃん」

うわ、出た、アホの子…ッ

「こっち来て」

「な、なに？ いきなりッ!？」

あたしは抵抗したが、なんか不気味なフォースみたいな力で連れてかれた。

「んぎゃー！ あたしを巻き込むなあっ!?!」

「おまいの身内だろ！」

「あたしはメーカーも販売元も違うっての!」

「ボカロはボカロだ」

鳴瀬は強引にあたしを座らせた。

「うー！」

この、スカポントン！

なんで、あたしを巻き込むかなっ！？

ハク姉いるし！

怒りと悲しみで、唸るしかできなくなってる、あたしだった。

「考えてみる、一食浮くんだぞ？ 身内の皆さんと一緒にただ座ってるだけでよ」

「……う？」

え、そりは助かるネ、ウン。

「オレは自炊してウン十年の腕前、ミクはもちろん、ルカ姉さんも黄色い双子も食べに来るほどッ！」

「うっ？」

あたしは首を傾げた。

……別に皆としゃべらなくても、黙ってりゃいいし、ただ食いきるのは魅力。

あたしの頭の中で打算が働いた。

「自分一人で食べる夕飯はさみしーぞおっ」

「うっ……」

あ、こいつ、痛いところ突いてきやがって。

……確かに一人で食べるゴハンってさみしーよね。

あ、泣けてきちゃった。

皆と一緒に生活してた頃がなつかしー。

「さ、TVおっけー、ちゃぶ台おっけー、料理おっけー、超・日本のお茶の間の正しい姿、爆現！」

鳴瀬は勢いだけのセリフを言った。

「バカだよねー、鳴瀬って」

あたしは、ぷぷつと噴出す。

「はうつ……マスターをバカ呼ばわり!?」

ミクはアホの子リアクション。

「……うふふ」

ハク姉は、微笑を漏らした。

鳴瀬がやらしー目つきで、ハク姉を見てる。

むかつ。

なんか、腹立つ。

「マスター、その目つき、なんか気になります」

ミクが言っただんで、

「やだやだ男って」

あたしも便乗して言っただった。

「でねー、ネットにアップした動画がねー、全然再生回数も増えないしー、コメもツマンネ、ツマンネ、飽きたからもう寝るってのばかりで……」

ハク姉は、酒をかつ食らっていた。（鳴瀬って酒飲むの?）

相変わらずの泣き上戸だ。

……ウザッ。

しかも、キモヲタみたいな事、言ってるし。

ま、もともとボカロユーザーが自分の才能のなさに打ちのめされてる心象風景を擬人化したもんだから、仕方ないけど。

でも、見てるとイライラすんのよねー。

酒も入ってるから、なんか、べらべらとしやべりたい気分だし。

「あのさー、いちいち動画作ってないで、自分で歌えば?」

あたしは自分を抑えきれず、言った。

「ぷはー。ボヤキロイドとか言っていないでさー、ま、ボヤキでもいいけど、それを歌にすりゃいいじゃん」

鳴瀬が酔っ払いを見る目であたしを見てる。

ち、キモヲタが。

ちよつと酔ってきたかな？

「ねえ、ハク姉、それやってみたら？」

ミクが何か言ったら。

「えっ…ええーっ?!？」

ハク姉は、いつものようにうるたえてる。

歌くれえ、歌えや。

本業のクセに。

で、気づくと、何時の間にかハク姉のために皆で曲作りをするってことになってた。

うーん、記憶がすっぱり抜けてる。

休日。

貴重な休日を潰して、あたしは梢ちゃんの家に行った。

しかし、広い屋敷だ。

手狭な部屋にしか住んだことのない、あたしには別世界だなー。

「おっしや、早速、ハク姉さんの自作曲をば聞かせてくれたまい」

鳴瀬が言っと、

「……やっぱり出さなきゃダメ？」

ハク姉は、いつものように尻込みした。

ち、またかよ。

あたしが出てやらないとダメなようだ。

「何、言ってるの。誰かに聞いてもらうために作ったんでしょ？」

あたしは強引にハク姉の持ってたDVDをひったくる。

「ああ…」

ハク姉は悲しそうな顔をするが、ここは心を鬼にして！

「梢ちゃん、頼むね」

あたしはDVDを渡した。

「オッケー」

梢ちゃんがDVDをセットすると、ういーんと読み取りが始まり、PCに接続されたスピーカーから、音が流れ出す。

…ま、けっこー聞ける曲じゃん？

テンポもゆっくりで、シンプルさがいい。

「いいじゃん」

あたしは、内心を気取られないように言った。

「ねえ、全然悪くないよ、ハク姉」

ミクも明るく元氣付け。

「そうだね、とにかく歌えばいいじゃん、キー高くしてッ」

梢ちゃんは何かよく分らんことを言ってる。

「わーい！」

リンは状況把握してない。

……双子はしょうがねーな。

「ここはミクたちに任せようか」

鳴瀬は、なぜかレンに向かって言った。

「そうだね」

レンはうなずいて、コントローラーを取り出し、鳴瀬に渡す。

「とりゃあーッ！」

「勝負だ、鳴瀬さんww！」

「受けて立つぜ、レン！」

男って何考えてんだか…。

ま、それはそうと、ハク姉の曲と歌詞は、女の子たちでアシストして、しっかりと仕上げた。

見たか、女の子のパワー！

遊んでんじゃねーよ、鳴瀬&レン。

昼食の後、あたしたちは再び梢の部屋に戻った。

「さて、歌詞と曲が出来たから、次は実際に歌ってみることだな」

「え……そんなっ……」

ハク姉は、またまた恥ずかしそうにイヤイヤをする。

……ち、人気取りかよ。無意識にやるかな、ハク姉は。

「マスター……」

ミクがジト目で鳴瀬を見てた。

よっしゃ、ミク、やれ！

あたしが許す。

「えーとにかく、この先は歌うのみっ」

鳴瀬はごまかした。

「いえー！」

リンがそれに乗って叫ぶ。相変わらず空気読めねー子供だ。

「あうあうッ……」

ハク姉は、あわくって口に手を突っ込んだ。

……またかよ、キモヲタ専用萌え動作すんなッ。

でも、あたしもマネしたら、鳴瀬、萌えるかな？

って、何を考えてる、あたし！？

「ピザでも食ってろ、ヲタ」

あたしは、照れ隠しにやつあたり。

あー、すっきりした。

ハク姉は歌がうまい。

繊細な声をしてるし、人の弱さを知ってるから、逆に心にしみる歌が歌える。

……って何で解説してんだ、あたし。

おっとハク姉の歌が始まった。

私の曲

心にある風景 映したものだけど
何故だか あの曲に似てるとフルボッコ

私の絵

心に残るモノ 書いたつもりだけど
あーヘタヘタヘタと ボツコボコ

みんな 好き勝手叩いてくけど
叩かれるために うpしたんじゃないの

もつと愛あるコメ 欲しいの
でないと私 自分の中に埋もれてしまうわ

お気に入りに入れて欲しいの
そしたら私 もつともつと頑張れると思うわ

でも

頑張れ 私

弱音吐くヒマあんなら 作業しよう
同じ想いしてる ユーザーたくさんいるはずだから

ぱちぱち。

拍手が上がった。

ペコリ。

ハク姉はお辞儀。

「うん、オレには伝わってきたよ、ハク姉さんの心情…」

「私も…」

鳴瀬と梢ちゃんは、少し涙ぐんでいた。

なんか、伝わったらしい。

「みんな、ありがとう」

ハク姉も涙ぐんでいた。まあ、この人はいつものことだね。

「みんなの協力があったから、自分でもできたよ」

「感動のシーンのトコ悪いけど、まだ微調整の作業が残ってるよ」

あたしは言った。

水を差すようで悪いけど、まだ先がある。

「さ、完成目指して、もう一頑張りだ！」

鳴瀬が何か叫んだ。

どうして、こいつ、いつも唐突なんだろう？

「いえー！」

リンが追隨。

頭の程度、一緒？

そこからはPCの作業に入ってしまったので、音楽制作ソフトが使える人だけが頑張っていた。

もち、あたしはできないから、リンレン、ミクとゲーム機で遊んだ。

すごく系のゲームだった。

面白いね、これ。

……ところで、リンレン、何もしてないよーな。気のせい？

「まいつか、あんなミソツカス」

鳴瀬がぶーたれた瞬間、

リンの目が、きゅぴーん！と光って、ロードバスターリンに変

身。

「ごーっ

ロードローラーが鳴瀬を追い掛け回した。
やれやれい！
でも、死なない程度にな。

ハク姉の曲が完成したんで、お開きになった。

あたしは、鳴瀬、ミクと一緒にアパートへ戻った。

「じゃあね、二人とも」

あたしは自室へ入ろうとする。

……でも、何だか、もつと話したい気分だった。

「……今日は結構楽しかった」

気が付いたら、あたしはつぶやいていた。

鳴瀬とミクは目を丸くしたようだった。

……あ。

……何だよ、そんな反応しなくてもいいじゃん。

でも、ちよつと恥ずかしい。

「……な、なんてね」

あたしは気恥ずかしさを覚えたので、さっと部屋に入った。

ドアを閉め、背中をドアに預ける。

「今日は楽しかった」

もう一度、口にしてみた。

じゅっきゅばん【ネルの角度3】

鳴瀬は起きてこなかった。

……つーか、夜遅くまで、ミクにネギのにおいプンプンの歌を歌わせてたから？

ま、そういう時もあるよね。

あたしは、待たずに出かけた。行き先はもち学校。

自分で金払ってるんだから、行かなきゃ損だ。

途中で、見覚えのあるヤツらに出会った。

「よ、元気か、09号？」

別ネルたちだった。

「あ、おまいら、久しぶりだな」

あたしは、表面上はにこやかに言った。

世間に出てから身に付けたモンだ。

昔のあたしなら、ストレートに不快感を顔に出していただろう。

あたしも、ちよつとは成長したようだ。

つまり、こいつらは油断ならねってこと。

あたしが抜けたすぐ後、妨害工作に走ってメーカー及び販売元から放逐されたはずだ。

「ガッコ行ってんだってな」

別ネル……13号が言った。

「ん、生きるために知識を獲得してる」

あたしは簡潔に答えた。

「ふーん」

「ガッコってたのしー？」

14号、15号が訊いてきた。ホントに興味ありげだった。

「ま、それなりにね」

あたしは、うなずいた。

「あのさ、ちよつと頼みがあんだけど……」

13号がもじもじとした仕草で言った。
ん？

なんか様子がヘンだな。

「ウチらに教えてくれない？ その……勉強とか」
「え？」

あたしはカバンを落としそうになった。
こいつらが、勉強？

昔のこいつからは絶対出てこない言葉だ。

「……んと、立ち話じゃなくて、その辺のサ店でも入って話し聞いてくれない？」

「分かった」

そう言おうとしたら、

「よお、ネルじゃん」

鳴瀬がいた。

あ、こいつ、間の悪い時に来やがって…。

「……あ、あんた!？」

あたしは鳴瀬を見た。

「何してんだ？」

鳴瀬はニヤニヤとしていた。

……なんか、キモヲタ風だな。

いつもと違う。

「なに、コイツ」

「カンケーねーヤツは引つ込んでな」

別ネルたちが、殺気だった。

ち、やっぱこうなるか。

「あ、ネルたちじゃんか」

鳴瀬は、やっぱりキモヲタ風で言った。

「……」

そして、じーっと別ネルたちを見る。ただ見るだけだったが、あたしを含むネルたちの不快指数がグンと跳ね上がった。

「ち、邪魔が入った」

「いこ、いこ」

「こんなキモヲタ相手すんな」

別ネルたちは、逃げるように去って行った。

「鳴瀬、余計ーなコトすんなよな」

あたしは、鳴瀬と並んで歩きながら、言った。

あいつらの言葉が気になっている。

『ウチらに教えてくれない？ その……勉強とか』

恥ずかしそうに言う、別ネルたちの表情が、まだ目に浮んでいる。どうしてそういう気になったのかは、よく分からない。

でも、何か、大切な事をできなかったというか、すれ違ったような気がする。

鳴瀬のおせっかいで。

いや、こいつは悪くない。ただ、間が悪かっただけ。

「わりー、なんか気になってさ」

鳴瀬は悪びれていた。

「……」

あたしは、何を言ってよいか分からなかった。

そのまま学校についたが、なんだか気まずい雰囲気が続いていた。

うーん、鳴瀬、もっと話しかけてよね。

鳴瀬もわだかまりがあるのか、あまり話はずまないのだ。

今日は鳴瀬とは別の授業を受ける日だった。

ま、あたしは受けたい授業しかとってないため、鳴瀬とは時間割が合わない場合の方が多いんだけど。

「ネールちゃん」

気づくと、梢ちゃんが目の前にいた。

「あ、梢ちゃん」

「なんか、上の空」

梢ちゃんは、あたしの隣に座る。同じ授業を受けてるらしい。

「そうかな？」

あたしは首をかしげた。

「これは恋の病ですね。ちなみに不治の病です」

梢ちゃんは冗談っぽく言うが、

……ッ！？

あたしの脳裏に、なぜか鳴瀬の顔が浮んできて、思わずのけぞりそうになる。

「ホント大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

あたしは必死にセルフコントロールを試みる。

「そっぴや、鳴瀬のヤツ、また授業に出てこないんでやんの」

「え？」

「この前もだよ、連チャンでぶっちぎってる」

……あたしのせいだ。

あたしが気を使わせたから。

昼になり、食堂へ行くと鳴瀬とばったり会った。

適当に料理を頼んで、一緒に座る。

「あれ、何、二人ともケンカ中？」

そこへ梢ちゃんがやってきた。

なんか、面白半分と言ってるな。

トレイには、カレーライス。

「別に……」

あたしは、そっぽを向いてしまった。反射的に出てしまう、悪い

クセだ。

うーん。

でも、あんま、からかうなよ。

こっちは本気で悩んでるつてのに。

「ありや、こりや本格的に拗ねてますなー」

「あんまし、そっぽ向いてると、そのうち一回転して戻ってくるんじゃない？」

梢ちゃんに同調して、鳴瀬も冗談を言い始めた。

……なんで、こんなヤツに振り回されなきゃなんないの!?

そう考えると、何だか、ムカツときて、

バンッ

あたしは、発作的にテーブルを叩いていた。

梢ちゃんと鳴瀬は驚いた顔。

……しまった。

次の瞬間、いたたまれなくなり、あたしは逃げるように食堂を出た。

アパートには帰らず、繁華街をぶらついた。

ぶすくれてたの半分と、きまずいの半分。

適当にシヨッピングをしてると、別ネルたちに会った。

「やっと見つけた」

「あ、みんな、さっきはゴメン。あのキモヲタ、おせっかいでさ」

あたしが言うと、

「ウザッ」

「ま、どーでもいいよ」

「それより、さっきの話なんだけど……」

「いいよ、教えるよ」

あたしはうなずいた。

近くの喫茶店に入り、話を聞いてみた。

別ネルたちは、とにかく一般常識から始まって国語、算数、理科、社会などの基礎的な知識が足りないと言ってた。

「あたしらが放逐されたのは知ってると思うけど、ホントに今回だけは助けて欲しいんだ」

「依頼受けるったって、依頼者と話してるうちに自分たちがバカに思えてきてさ」

「うん、情けなーってカンジなんだよね……」

別ネルたちは、何だか意気消沈してた。

あたしは、心当たりがあった。

バックボーンがある時は、ほとんどのことを会社の人間がやってくれた。

あたしたちは、ただ活動さえしてれば良かった。

あたしたちは、社会の中で生き抜くには、ひ弱すぎるのだ。

会社から離れた当初は、あたしも生きるための力がなく、弱り果てた。

徐々に必要な事を学習して行き、たくましくなったのだ。

「でも、勉強だけにしてよ？」

あたしは念を押した。

「あたしは活動は止めたんだ」

……この間、カキコしたことは内緒だ。

「オツケー」

「分かってるって」

「あんたに仕事は振らないよ」

別ネルたちは、慌てて言った。

そして、まず簡単な小学生レベルの勉強から始めた。

ま、アンドロイドなので、計算力とか理科系の論理的思考は強い。問題は、知識だ。

知らない概念は、作り出したり組み合わせたりできない。

まずは知ること。

そこからだ。

夕食も、そこで済ませた。

別ネルたちはあまりお金もってない様子だったので、特別に奢ってやった。

でも、あたしもあんま金持ちじゃないから、何度もこうだと困るけど。

そして、喫茶店から24時間営業の店に場所を変えて勉強をした。一夜漬けである。

別ネルたちと別れ、深夜も過ぎた明け方近いストリートをとぼとぼと歩く。

夜の一人歩きはちよつと怖い。

あたしたちには、ボカロたちみたく、ショック軽減なんたらという機能はついてない。

その代わり、格闘技術を習わせられたけど。

ふと、

ぶおおおん。

野太いエンジン音がして、なんかカッチョエー車が目の前に停止した。

族？

いや、族なら一台だけでいるワケない。

ドアを開けて出てきたのは、ピンク髪のボインの女。

助手席から出てきた。

運転手は中にいる。

やたらと色気を振りまく、あの女王気取りのボカロ03号だ。

「……」

「こんばんは、ネルちゃん」

あたしが黙っていると、ル力は言った。その態度が威圧的だった。

「昔の仲間と会ってるみたいね」

「……だったら何だったの？」

あたしは睨み返した。

「いいこと？ 良くお聞き。鳴瀬さんとミクちゃんに何かあったら、絶対に許しませんからね！」

ル力は、女王様なんだか幼稚園の保育さんなんだか良く分からん

口調で、詰め寄った。

「んなことしねーよ」

「……だといいんですけど」

ル力は信じてないようだった。

あたしたちに何かされた事があるんだろうか。

でも、あたしは足を洗ったんだ。

関係ない。

「ずいぶん、あいつらに入れ込んでるじゃねーか」

「……あなたに話しても分からないわ」

「勝手に決め付けないよ」

「私はあの子たちに救われたわ」

ル力は、若干の逡巡の後、言った。

その瞬間、自信に満ちていた態度が変わった。

切羽詰ってる。

焦ってる。

それは、鳴瀬とミクの事を気にかけてるからに違いなかった。

「今度は、私があの子たちを守る番よ」

ルカは宣言するように言った。

「だから、もし、あの子たちに何かあったら……」

「あたしもだよ」

あたしは、なぜだか言っていた。勝手に口をついて出たのだった。

「え？……」

ルカは聞き返した。

「あたしも、鳴瀬とミクに救われた気がする。一人ぼっちの孤独から助け出されたような気がする」

「あなた……」

ルカは言葉が出てこない。

「ごめんなさい、私の早とちりだったようね」

「いや、いいんだ」

あたしは自嘲気味に言った。

「あたしたちは、元から穢れてるからね」

「……」

ルカは沈黙した。

「そうじゃない」

「え？」

今度はあたしが聞き返していた。

「決してそうじゃない。あなたたちは穢れてなんかない」

ルカは何かに耐えるかのようにして言った。

「あなたは既にミクちゃんたちとお友達になったでしょ？」

「……」

あたしは答えられなかった。

「だったら、穢れてなんかいない。」

そんな風に考えないで。

あなたたちは確かに工作のために作られたかもしれない。
でも、それはあなたたちの本質じゃないわ」

ルカはなぜか力説した。

「私は、あの子たちに会って分かった。信じる心が、人を救うんだってことに」

「信じる心だって……？」

「そう。あなたにもきつと何かできることがある。その使い方を間違わなければ、それは立派な事なのよ」

「……じゃあ聞くけど」

あたしは言った。

「誰が信じてくれるんだよ？」

鳴瀬か？

ミクか？

「……とりあえず、私はあなたを信じるわ」
ルカは、そこでにこりと笑った。

アパートに着いた。

鳴瀬とミクの部屋の前を通り過ぎる。

部屋に戻って布団に寝転んだ。

少し、仮眠を取ったら、学校へ行かなきゃ。
まどろみ。

睡魔が襲ってきた。

小一時間寝た後、起きて学校へ行った。

まだ目当ての授業が始まるまで時間がある。
…教務科のプラカードが目に入った。

頼んだけど、やっぱりダメだったな…。

鳴瀬の欠席、覆んなかった。

教務科のある建物から出ると、

「よお」

鳴瀬がいた。

ち、いつも間の悪い時に出やがって。

「いつも元気だな」

あたしは、つい皮肉を言ってしまった。

あうっ。

そんなこと言うつもりなかったのに。

ここは、さっさと逃げてしまおう。

あたしは、鳴瀬の返事を待たずに立ち去った。

で、また別ネルたちに知識を詰め込んで、部屋に帰って仮眠をと
り、また学校へ。

アンドロイドとはいえ、そろそろ体力が限界にさしかかるかも。

授業を受けた後、食堂へ行く。

適当に寝るか。

あたしの名前、そもそも飽きた寝るだし。

「いたー！」

いきなり、声がして鳴瀬が駆け寄ってきた。

「うわっ、なんだ、鳴瀬？」

あたしは驚いて、叫ぶ。

「おまい、ウイルス流して暗証番号ゲットしてネットダイブしてないか！？」

「こら、そんな言い方で分かるか！」

梢ちゃん背後から鳴瀬の頭を殴りつけた。

「ネルちゃん、あんた、仲間と会ってるみたいだけど、悪いことしてないだろうね？」

……梢ちゃんまで？

どうして、みんな悪いことしてるって決め付けるかな？

冷静に考えれば心配してるってことに気づいただろうが、ちょっと徹夜気味でピリピリしてたせいか、むっときた。

「カンケーねえだろ」

あたしは不貞腐れたように顔を背ける。

「関係あるさ」

梢ちゃんはあたしの正面に立った。

「友達だろ」

「……そんなの」

あたしは思わず言ってから、

あちゃー、またやっちゃった。

後悔した。

でも、今更撤回なんてしたくないし……。

「あんた、昨日、コイツのために教務科に行って頼んでたよな？」

……え、何でそれを？

「コイツが授業に遅れたの、自分のせいだから、何とか出席にしておいてくれてよ。」

そんなこと友達じゃなかったらやんねーよ」

「じゃあ、昨日、教務科から出てきたのって……」

鳴瀬が言ったが、

「そんなんじゃないよ」

あたしは、恥ずかしさから、またそっぽを向いてしまった。

「そうか、ありがとな」

「……」

なんか気まずいし、ピリピリ来てるし。

やになる。

「えつとな、それはそうと、オレたち心配で……」

「なんだよ、あたしが悪いことしてるって決め付けんなよ」

あたしは、鳴瀬の言葉に噛み付いてしまった。

「そんなつもりじゃ……」

鳴瀬が言いかけた時、

バシッ

「きやつ」

あたしは頬に衝撃を受け、悲鳴を上げてしまった。

梢ちゃんが、あたしの頬を叩いたのだった。

「ち、人の心遣いがわかんねーヤツに用はないよ」

梢ちゃんはそう言って、出て行った。

「……」

あたしは、ショックといたたまれなさを感じて、食堂にいられなくなっ

たっ　と駆け足で出てしまった。

にじゅんばん【ネルの角度4】

すぐに部屋に戻るのもイヤだったので、適当にぶらついてから戻った。

鳴瀬とミクはいないようだった。

……どこに行ったんだろ？

思ったが、その考えを頭から締め出した。部屋に入って、布団にねっころがる。

うとうとしはじめた時だ。

ピポパと携帯が鳴った。

ミクだ。

「はい」

あたしは電話を受けた。若干、緊張している。

『あ、ミクだけど、ハク姉が大変なの！』

ミクは、あうあうーとしゃべった。

なんだか分からないが、大変なことが起きたようだったのが伝わってきた。

「え？ なに？」

もつとちゃんと言ってよね。

そう言おうとしたら、

『ネル、助けてくれ。ハク姉さんがウイルス食らってヤバイんだ！』

急に鳴瀬が電話に出て、言った。

「……えっ」

ハク姉が！？

ウイルスってどんなウイルスだろ？

『はやくッ！ そっちに迎えに行くから！』

「わ、わかった」

あたしはうなずいた。

アパートを出ると、鳴瀬と会った。

結構近いんだな、ハク姉のアパート。

一緒にハク姉の部屋へ向かう。

「う……」

あたしはモニターを見て、唸った。

「『Destroyer』か、厄介だな」

こいつは破壊専門のウィルスだ。

あたしたちアンドロイドの人格を構成するプログラムなら、1時間もしないうちに破壊される。

「何とかしてくれ」

鳴瀬が言った。

「……」

あたしは考えた。

ワクチンプログラム……インストールするヒマがない。

製造元へ……間に合わない

ネットダイブ……ピンポーン！

直接、ダイブして叩くしかない。

「ハク姉に直結ダイブしてみる」

あたしはジャック付きのコードを取り出した。

いつもカバンに入ってるのだった。

自分の首の後ろのコネクタに差し込み、もう一端をハク姉のコネクタに差し込む。

「ネルちゃん、気をつけてね」

ミクが心配そうに言う。

「任して」

あたしはVサインをして見せた。

一瞬で、視界が切り替わり、ハク姉の中へダイブしていた。
仮想世界に入り込み、自由に活動する。

それが、あたしたち『亞北ネル』に与えられた能力。
つまり、ネットダイブだ。

ちなみに服装は例の黄色のネクタイ、ミニスカ。でも、ミクみたいに直接パンツじゃないよ。

スパッツはいてるもん。

……それはそれで、萌えるヘンタイはいるだろうけど。うぜーけど。

ハク姉の内部は、サイバースペースと同じだ。

様々なプログラムがネットを形成し、模様となって眼前に広がってゆく。

優しく暖かな色合いだった。

ハク姉の人格を映してるのかもしれない。

だが、その景色を侵食するかのような黒い穴のようなモノが、ところどころに見られた。

……ウィルスだ。

《Destroyer》

遠方から回線に乗せて送り込み、標的を倒すためのウィルスだ。

標的となるのは、攻勢防壁なんかの高い迎撃力を有すユニットだ。目的地に到着すると、現地環境を利用して自身を複製し続け、物量で敵を圧倒する。

しかも、攻撃力というか貫通力に特化しており、敵と刺し違えてドンドン死ぬ。

増殖と死を繰り返す。

敵は最初は持ちこたえるが、徐々に劣勢になって行き、やがて破壊されるのだ。

こいつを駆除するには結構な忍耐力を要する。

とにかく、まずはロケーションと。

あたしが念じると、サイバースペースでの身体がびゅーんと飛翔。

サイバースペースでのあたしは、さながら魔法使いだ。
手近なステーションに降り立った。
大きなタワーのような物体だ。

ウイルスに関する情報を得るためだ。

ハク姉を構成するプログラム群が、ウイルスに気づいていれば、
どこかしらにその反応が現れているはず。

ウイルス関連情報を検索する。

よし。

感染部を特定した。

あたしはアイテム・ウィンドウを呼び出した。

RPGを参考にして作成したシステムだ。

ウィンドウから、エアボードと携帯を呼び出す。

一瞬で、目の前にふわふわ浮ぶスケボーと黄色の携帯が現れた。

エアボードは高機動の小型移動ユニット。

携帯はあたしのトレードマークでもあるが、サイバースペースで
は強力な武器となる。

あたしはエアボードに乗って、移動開始。

なるべく目立たないように、シナプスの触腕の陰になってる所を飛
んだ。

んで、最も近い、《Destroyer》感染場所を目指す。

ヤツらへの対応策は、(1)まず感染してしまった複製施設を壊
す、(2)ウイルスを破壊する、の二つ。

直接対決はしたことがないので、とりあえず小手調べと行こう。

あたしは歩いてウイルスへ近づく。

手には携帯を持っていた。

ウイルスの外見は昆虫に酷似していた。兵隊として複製されるソ
ルジャー・インセクトだ。

背後から近寄り、携帯のアンテナ部分を向けた。

ボタンを押すと、黄色いレーザーが照射され、ソルジャー・インセクトに命中した。

どんっ

爆発音。

敵は撃破された。

だが、その音を聞きつけて、他のソルジャー・インセクトがわらわらと駆けつけてくる。

あたしは走りながら、レーザーを照射した。

先頭のインセクトが爆発した。

だが、その爆炎を潜り抜け、後続のインセクトたちが姿を現す。続々と。

あたしは、それでも走りながらレーザーを照射し続けた。

インセクトたちの何体かを倒すが、焼け石に水ってカンジだった。インセクトたちはドンドン増えてゆく。

あたしは遂に立ち止まった。

行き止まりだ。

ちっ。

振り向くと、インセクトがすぐ後ろに迫っていた。

はつきり言つて、絶体絶命なシチュだ。

……なんてな。

あたしは、ニヤリとした。

「発動！」

あたしの足元の地面に魔方陣のような絵が浮かび上がる。

爆裂火炎陣。

インセクトたちは踏み込みすぎた。

あたしに襲い掛かるが、その瞬間、一帯の空間が爆発炎上する。

もちろん、おとりに使ったあたしのオプションも一緒に炎上した。ちよつと勿体無かったが、他にいい手が思いつかなかったのしょうがない。

あたしは光学的に空間を歪ませ、そこに作ったポケットに隠れた。

通称、結界。

当然狙いは複製設備。

感染しちまった場所はエリア単位で破壊するに限る。

まあ、相手もバカじゃないから、新たな複製設備を奪ってゆくはずなので、複製設備をシールする。

そうやって、敵の陣地を奪ってゆく。

残ったウィルスどもは、魔方陣型トラップとレーザーで倒してゆく。

最初は遅々としていた作業も、二、三個敵の拠点を叩くと、加速度的にスピードアップした

そこからは早かった。

敵は、瞬く間に激減する。

残ったのは、マザー・インセクト。

そう、こいつらはアリやハチなどと同じで総体として一個のウィルスなのだ。

あたしは手持ちのオプション総出で、マザーに白兵戦を挑んだ。

オリジナルのあたし含めて、トータル13体。

オプションらを2隊に分け、前衛にはビームソード＋手持ちシールドを持たせ、後衛には爆炎トラップを小型化したグレネードランチャーを持たせた。

オリジナルのあたしは、一番奥に陣取り、爆炎トラップを元に作った爆炎迫撃砲を担当。

ちなみに、これ、今作った。

とにかく、壁を作り、その後ろからガンガン砲撃を加える戦法だ。マザーは図体はでかいが、それほど機動力もなく、攻撃にしても

力だけ。

シールドを打ち破れるほどの威力はない。

「てええっ!!」

あたしは、ドンドン砲撃を加えて行つた。

前衛のオプションたちが、ライフゲージを削られてゆき、何体かが消滅。

そのたびに、あたしは後衛のオプションを前衛へ回した。

戦闘開始から、十数分。

休むまもなく砲撃を加え続け、ついでにビームソードでちまちま切りつけると、どどおんという音とともに、遂にマザーは倒れたのだった。

あ、でも、ボスって2、3回変形すんのがデフォだったけ？

と思つてたら、ぐおおおーってな感じで、マザーが変形。

「ずりぞ、おいっ」

叫べど、意思のないウィルスは返事しないのだった。

でも、同じ戦法で倒したけど。

変形しても、根本的な能力は変わらないのな…。

「ち、あのヤローでこずらせやがつて…」

あたしは悪態をつきつつ、立ち上がる。

リアルスペースに戻ってきていた。

「もう、大丈夫だよ。ウィルス倒したから」

「おう、じゃあハク姉さん、元に戻るんだな」

「まあね」

あたしは、うなずいた。

「ボカロのプログラムには自己修復機能がついてんだろうから、す

ぐに元通りさ」

破壊された場所は、残った部分が肩代わりしたり、新たに構築する。

「はー」

鳴瀬はため息をついて、しりもちを着いた。

「……ネル、ごめん。心のどこかでは、やっぱり君を疑ってたと思う」
謝ってくる。

「……そのことなら、もう気にしてないよ」

あたしは、笑顔を作って言った。

「あたしの生い立ちとか、性格にも悪いところあったし……」
でも、これは信じて欲しい。

あたしは、自分の仕事に嫌気が差してきて、辞めたんだ。本当に自分の興味のあることをしたいから」

「それで、聴講生？」

「うん」

あたしはうなずく。

うつ、また頬が赤くなってるかも？

「恥ずかしがり、おk！」

「「ち、キモヲタ」」

ミクとあたしがハモった。

「あたしもゴメン」

あたしは、素直に頭を下げた。

「自分のコトだけ考えて、鳴瀬の心遣いに気づかなかったと思う。梢ちゃんに言われるまではね。……後で、梢ちゃんにも謝らないとね」

「大丈夫、オレも口添えするよ」

鳴瀬はうなずく。

ちよっと気が楽になった感じがした。

「やっと、ネルと仲直りできたな」

「よかったね、マスター」

ミクは一旦は喜んでから、

ぎゅううううう

と鳴瀬の腕をつねった。

「いててっ、何しやがる？」

「マスター、ネルちゃんと仲良くなりすぎですッ」

何気に嫉妬深いな、ネギ好きアホの子。

「あはは」

あたしは笑ってごまかした。

「ゴメン、仲間と会ってたのって？」

鳴瀬が唐突に話題を変えた。

「あ、あれは……」

あたしはうつむき加減で、

「実は、あいつら、勉強があんまりできなくてさー」

あいつらも、あたしだから、自分の事みたいでちょっと恥ずかしい。

「え、それって……」

「かてきょー？」

「うん」

あたしはうなずいた。

「バックボーンがなくなつてさ、社会に放りだされて、初めてそういう学校で習うような知識が必要なのに気づいたんだ、あたしら……」

例え、方向が間違ってたとしても、昔の仲間に頼られたら、見捨てられなくて……」

「そうだったんだな」

「うん、いい話ね」

鳴瀬とミクはしんみりしてた。

「でも、もうあいつらとは会わない」

あたしは言った。

「じゃねーと、鳴瀬とミクちゃんたちが心配するからなッ」

あいつらが警察に捕まったようだった。

アンドロイド犯罪！！

なんて、ニュースを賑わせた。

悲しい。

いつものことだが、世間ってのは熱しやすく冷めやすい。
すぐに埋もれて行った。

あたしは、梢ちゃんに謝りに行った。

鳴瀬もついてきてくれた。

会った瞬間、

「あ、ネル……」

梢ちゃんは、もじもじとしながら、

「こないだはゴメン、ぶつたりして」

上目遣いに、あたしを見た。

「うっん、あたしこそ、ムキになってゴメン」

あたしは頭を下げた。

梢ちゃんは、ほっとしていたようだった。

もちろん、あたしも。

良かった、梢ちゃんとも仲直りできた。

「ちよっと、鳴瀬聞いてんの!？」

「ったくキモヲタの分際でシカト？」

あたしと梢ちゃんは、ほっとしたところで悪ノリ。
いつもの掛け合い。

あたしには仲間ができた。

あたしと同じコピーではなく、全く違う別種
の存在。でも、心と心が通い合うというか、絆を感じた。

これまでのあたしの人生には、存在しないモノだった。
これが幸せというもののなか。

あたしは初めて思った。

あたしは、これまで、人生というものに何の意義も感じなかった。
何の意味をも見出せなかった。

ただ、死なないから生きている。

他に何もできないから、工作を続けている。
既に死んでいる。

生きていない。

何の意味もない。

動く屍のような存在だった。

あたしを含む、『亞北ネル』という存在すべてがそうだった。

何のために生まれてきたのか、

何をすべきなのか、

疑問を抱えつつ、

自問自答しつつ、

答えが見出せず、

渴望し、

切実に望んだが、

何も出来ずに日が過ぎてゆく。

無意味な人生。

でも、あたしは変わった。

作られて良かった。

この世に生まれて良かった。

ありがとう。

あたしを作ってくれて。

ありがとう。

感謝します。

ありがとう。

あたしを作り出してくれて。

あたしに『幸せ』を知る機会を与えてくれて。

ありがとう、みんな。

あたしに『絆』をくれた。

そう、今なら、ルカが言っていた事が理解できる。

あたしには『心』が生まれた。

みんなの心が、あたしに心を分け与えてくれた。

あたしの人生はもう、無意味じゃない。

この幸せをあの娘たちにも分けてあげたい。

あたしは、いつしかそう思うようになっていた。

風の噂では、あの娘たちは破壊処分を免れ、懲役刑で済んだよう

だった。

罪状に殺人や強盗などが入ってなかったことと、権力者側に利用価値があるってことが理由らしい。

まあ、あたしにはどうでも良いことだ。

あの娘たちは、まだ生きてる。

以前のあたしと同じように、ねじくれたまま、空しさを感じたまま…。

「あのさ、この前、ああは言ったけど、やっぱりあの娘たちに会いに行こうと思うんだ」

あたしは打ち明けてみた。

「え？」

みんなは驚いている。

「えつとね……」

あたしは説明した。

ヘタな説明だったが、

「ああ、そういうことか」

「そりゃ行くべきだよ」

「いい考えだね」

みんな、そう言ってくれた。

【ネルの角度・エピローグ】

あたしは面会への道のりを歩いていた。
空が青く、どこまでも続いている。

あたしは空を仰いだ。

日差しが心地よい。

）

あたしは、自然にハミングしていた。

歌っていた。

その事実には衝撃を受ける。

亜北ネルなのに、あたしはネルなのに。

……歌っていた。

あたしは気づいた。

あの娘たちは、ボーカロイドだから歌うんじゃない。

歌うからボーカロイドなんだ。

心に歌を持ってるから、歌うんだ。

あの青い空に行きたい

天に届け 届け天に

天に… 届け！

あたしのこの想い

のせて空に 飛び立とう

心の中にしまっておきたいけど

もう飛び立ってしまったっている 小さな想い

明日はどうなるか分からないけど、

そんなことを気にしちゃいけない

自由なーって 人は言うけれど
ホントは 誰でも 求めている

あの青い空に行きたい
天に届け 届け天に
天に… 届け！

この想い 明日に 天高くまで

澄み切った 空へ行こうよ
雲に乗って 乗って雲に
雲に… 乗りたい

あたしは歌っていた。
心に歌が生まれたから。
歌を歌った。

防火ロイドじゃない…
ボーカロイドになっただんだ。

ネルの角度 完

にじゅうちばん

今日はミクが定期メンテナンスを受ける日だ。

通常、ボーカロイドとそのオーナーにメーカーからのメールが届く。

オーナーとボーカロイドは、自分たちの都合なんかを鑑みて、メンテナンスを受けに行くという仕組みだ。

機械的に故障箇所がないか、情緒が安定しているか、オーナー（マスター）との人間関係は良好かなどのチェックを受ける。

特にメーカーはボーカロイドとオーナー（マスター）の人間関係に着目するそうだ。

ボーカロイドは、一応限定付きだが、法律でその人権が保証されており、虐待などの事実が判明すれば罰せられることもありうるのだ。

「今回のメンテナンスって、名古屋さんからダイレクトでメール来たよな……」

「そうなの、ヘンだよなー」

オレたちはメーカーに着くまで、おしゃべりをしていた。

休日なんで、オレも一緒に行ってみた。

「普通はメーカーの代表メアドで届くのにな」

「……様日記にもこんな話あったよな」

「マスター、ソレ言っちゃ、ネタバレになりますよ？」

「いいんだ、コレ書いてるヤツの頭で大層なの作れるわけねーんだから」

「そんなこと言っていると、不治の病にされて場を盛り上げられますよ」

「ち、その場しのぎしやがって」

「ああーっ、どっかの誰かが『あああつ、てめーら何バラしてんだよ！』って言って頭を抱えてる映像を受信しました！」

「おでんば 受診すなっ！」

「きやいーん!？」

まんまアホどもの会話だった。

メーカーにつくと、受付で携帯のメールを見せ、待合室へ通される。

…なんかTSUTAYAみたいだな。

「あ…」

「やほー、キ…鳴瀬さん！」

「鳴瀬さん、こんちわ」

梢とリンレンがいた。

「あら、キ…鳴瀬さん、奇遇ですね」

ルカもいた。

革ジャンの男が一緒だった。

あ、もしかして、DMマスター!？」

「……よお」

DMマスター（仮称）は仏頂面で会釈した。

「こんにちは」

「お噂はかねがね」

オレとミクの表情はちよつと引きつってたと思う。

「なんで、皆、『キ』って言うてから言い直すんだ？」

「うふふ、それはね…」

革ジャン・DMマスター（仮称）はルカと話しながら、座っている。

楽しそう。

『うー、なんであたしはメンテ受けないのよ!？』

何かいきなり、受付の方から、不満そうな声が響いてきた。

この声…。

「ネルちゃんだ」

ミクが気づいて言った。

「いや、メーカー違うだろ」

「メンテ代払わして、受けさせたらいいんだよ」
梢がイラついてるかのように言った。

『ああ、そう、もういいよ!』

また不満そうな声。

『ケちゃんぼツ! ハク姉、もういこ!』
ガラ悪…。

つか、ハク姉もいるの? ハク姉さんのメーカーここだろ?

「あ、そういう考えもあるな」

またまた唐突に声がして、ガリガリに痩せたノツポのおっさんが
立ってた。

どっかのスポーツの監督みたくジャージに野球帽といういでたち
だ。

この声…?

「まさか、名古屋さん?」

ミクが訊いた。

「よう、その声は鳴瀬ミクちゃんか、元気か?」

「元気ですよー」

ミクはガッツポーズ。

アホの子はいつも元気でいいな。

みんなの視線が、そう語っていた。

「あの、ネルちゃんなんですけど…」

「任せてくれたまい」

名古屋は自信たっぷりに請け負った。

「ライバルメーカーのノウハウ解析しちやるもんね、ぐふぐふ」

……下心たっぷりかよ。

んで、名古屋の許可を経て、ネルも自腹でメンテ受けれることにな
った。

「……(怒)」

ネルはメチャメチャ機嫌悪そうな顔をしてた。

「私……ここの出身ですよね？ですよね？ですよね？……」

ハク姉さんは、いつものようにずーんと深海魚の如く沈み込んでる。しかも、どつかぶつ壊れたみたいだな…。

んーと、触らぬ神に祟りなし？

オレが二人と目を合わせないようにしていると、

「……」

ごすつ。

いきなり、ネルのゲンコツがオレの脳天に打ち込まれた。

「ふげっ！？」

オレは頭を抱えてしゃがみこむ。

「ああっ！？ マスターッッ！？」

ミクはビククリ仰天、あうあうーつとぐるぐる同じところを回った。無駄に騒いでるだけ。犬コロか？

「なにしゃがんだ、おい？！」

オレは怒鳴ったが、

「黙れ、キモヲタ」

ネルにものすげー眼光で睨まれ、

「はい、ボク黙りまーす」

ヘタレでいいです、オレ。

「まあまあ、ネルちゃん。そんなに怒らんでも、相手キモヲタだし」
「梢がなだめにかかった。」

「ふん、キモヲタの分際で」

ネルは鼻を鳴らした。

オレには全く理解できない思考回路をしてるようだ。

「さあ、楽しい前座が終わった所で、さらに楽しい心理チェックの開始だ！」

名古屋が訳の分からんことを叫んだ。

脳みそ濃んでんじゃねーの？

「さあ、第一問、ボーカロイドの諸君、君たちはマスターの事が好きかあっ!？」

名古屋がMCみたくマイクを持って質問すると、

ぼっ（赤面）

ぼっ（赤面）

「はいはい、大好きですう!」

「えーと、まあ、好きかな……」

「マスターいません……」

「マスター？ 何それ？」

各ボーカロイドさんたちの反応がありました。

一体、何を測るチェックなんだ？

「さて、楽しい心理チェックも次で最後となりました」

まだ始めたばかりだろ。

いやま、続けなくていいけどよ、こんなの。

「ボーカロイドの諸君、君たちはこれからもマスターと一緒にいたい
かあーっ!？」

「はい、一緒にいたいです」

「もちろんです」

「はいはい、ずっと一緒にいたいどえーす」

「うん」

「マスターいません……」

「あんた、ケンカ売ってんの？ さっさと機械的メンテしてよねッ」

各ボーカロイドさんたちの（以下略）

「おk、君たち、じゃあ、ステージ2に進めること間違いなし！」

名古屋はやっぱ訳の分からんことを言った。

このおっさん、大丈夫か？

「ちなみにステージ2とは機械的メンテのことッ」

「ステージ3は？」

「それは見てのお楽しみッ」

オレが訊くと、名古屋はよどみなく切り返す。

……このまま進んで大丈夫なんだろうか？

とにかく、機械的なチェックを受け、メンテナンスを行った。

名古屋はヘンだが、その部下の技術者たちはプロだった。

サクサクとチェックを進め、滞りなく終了。

「さあ、みんなメンテオワタな？」

「あんたこそ、メンテしたほうがいいぞ」

「何をゆーとるがや、私は毎日メンテしとるがね」

「なぜ、中部地方の方言ですか？」

後ろの方で、ルカが『とーきよーは…』と口ずさんでいるようだった。

「そんなことより、これをみたまい！」

名古屋は強引に言った。

「ちょっと話し聞けよ、おっさん！」

オレは言ったが、次に自走してきた何かによってその声はかき消された。

大きな白いプラスチックっぽいカプセルった。

透明なー素材のカバーが付いており、中身が見える。

ドリルのようなツインの髪（赤）をして、軍服をイメージしたような服、ミニスカ。黒のオーバーニーの女の子。

体格はミクと同等ぐらいか。

ちよつとアンニュイな感じの顔立ちだが、多分ツンデレ。（笑）

「あぐっ……」

オレはショックでノドを詰まらせてしまった。

「あんたこんなものまで作ってたのかよ!？」

「え、これって、テト？」

「へー、可愛いじゃん」

皆様の受けは良かった。

でも、キメラだし。

「がくぽもあるのかな？」

梢とリンが目を輝かせるが、

「ないッ」

名古屋は断言した。

「男なんて作るわけねーっつの！」

その一言で、『オレはヲタ』って宣言したようなものだ。

「とにかく、今日はお披露目なのだ」

スイッチを取り出す。

「おーっ」

みんな（オレ込み）盛り上がるが、

じろじろじろ……

突然、遠くから響く重低音。

雷ですか。

この先の展開、読めたような…。

しかも、急に薄暗くなりやがってきたし。

「ふむ、天気予報がウソつきやがって！」

「あんた、ホントヲタだな」

「ふ、そんなに誉めるな」

「いや、誉めてねーし」

オレが突っ込んだ時、

どしゃーん。

雷がメーカーの建物を直撃したのだった。

んで、雷の電気が配線を伝ってきて、ちょうどカプセルの中へと叩き込まれた。

どこおんんんっ。

爆発が起きた。

爆風が去った後も、奇妙な景色がオレたちを襲った。

爆発だけでも弱ったつてのに。

カプセルの中のテトの胸のところに漆黒の闇を思わせる空洞が開いていたのだ。

異次元かよ？

「なんだよ、あれ？」

オレが尻餅をつきながら言つと、

「分かん」

名古屋が同じく尻餅について返事。

「だが、何か出てくると思わんか？」

「縁起悪りーこと言うなあ」

「……んで、テトに憑依して、 ロトンデビルの如く！」

「マ ロスフかよ」

「嫌いか？」

「いや、古すぎて、みたことねーよ」

「今度、ブルーレイ貸してやる」

「サンキュー」

とか言ってるうちに、

にょろりろりん。

ホントに空洞から何かが出てきたのだった。

漆黒の影のようなものだった。

それはテトの口へ、すーっと滑り込んで行き。

すぼん。

完全に入ってしまった。

きゅい　いいいん。

テトの目が光った。

空気が粘り気を含んだかのような感触が襲ってくる。

「なっ……いきなり、ショック軽減機構を使いこなしてる……!?」
名古屋が焦り驚いていた。

「ききききき……」

テトは独特のボイスで笑った。

テトは翼を広げた。

「む、飛翔能力を使う気か……」

「あんた、普段から何作ってやがんですか!？」

「よし、こんなこともあるうかと、開発しといた　ラッドソードを
ルカルカに!」

「え、私に振らないでよ」

ルカと革ジャン・ドムマスターは既に逃げの準備に入っている。

「ダメか……私の剣の錆になりなさいっ!　って言うてくれると期待してたのに!」

ダメだ。

ダメ大人だ。

「あうあうー、怖いよー!」

ミクはお約束のアホの子リアクション。期待を裏切らないヤツだ。

「ミク、例のショック軽減機構で抑えられないか?」

「あ、そっか」

ミクはうなずいて、

「それっ」

ショック軽減機構を発動させるが、テトは窓を突き破って出て行った。

「ああー」

「ち、絵的につまらん」

ダメ人間が何か言ってる。

誰か、何とかしろ、こいつを。

にじゅうにばん

重音テト。

今更説明の必要はないと思うが、元はエイプリルフルのネタとして創造され、その後、UTAUというソフトで復活した奇跡の某カロイドだ。

キメラという設定のため、翼があったり、尻尾があったりする。

「ちいつ、『君は実に馬鹿だな』っていわせる前に逃げちまったあッ！」

名古屋は何か叫んでいた。

ホント、誰か何とかしろッ。

「あれ、一体何なの？」

梢がぽかんとした表情で言った。

「知るわけねー」

オレは頭を振る。

「どっかの異次元からやってきた何かが、テトの身体に入り込んだ」
ドMマスターが言うつと、

「スパナチュの悪魔みたいだったけど……」

ル力が返す。

普段、そんなものみてるんか、あんたら……。

「大体そんなもんじゃねーの？」

「ねえ」

オレとミクが顔を見合わせた。

「まずは追跡ですね……そして、平行して捕まえる方法を考える……」
ハク姉さんが、さらっと何をすればよいかを言った。

「ハク姉、冴えてるーッ」

ネルがハク姉さんの背中をぶつ叩いた。

「あう……」

ハク姉さんは、よろよろとたたたらを踏んだ。

「ボカ口のショック軽減機構を使えば動きを抑えることはできるだろう」

名古屋は言った。

「じゃあ、そこを捕らえる？」

「うむ、カプセルに収容してシステムを遮断すればいい」

「へー、このカプセル、そんな機能ついてんだ」

梢が珍しげにカプセルを見た。

「半ロボット化してあって、リモコンでも動かせる」

「そしたら、後は追跡ですね」

ルカが言つと、

「N粒子センサーを使おう」

名古屋は答える。

なんだ、その安直な名前のセンサー。

…あれ、黄色い双子が何も発言してない。

見ると、双子は寝ていた。

名古屋はセンサーの操作に取り掛かった。

なんでか、オレらは捕獲に借り出されることになってしまった。

足は、双子のロードローラー、ルカ&DMマスターのフェアレディーズの二台。

双子がロードローラーに乗り込み、オレ、ミク、梢はZに乗せてもらった。…せ、せまい。

ネルとハク姉さんは、ショック軽減機構がないか付いていてもそこそこの能力しかないので、名古屋のお手伝い。

……ハク姉さん、もしかして器用貧乏？

ともかく、追跡が開始された。

名古屋はセンサーを始動させた。

テトが見つかるまでの時間を利用して、トラックを調達、カプセルを載せていた。

名古屋さんって、間違いなくキモヲタに分類されるが、能力だけはあるよな。

その間は、ハク姉さんがセンサーを見てた。

……おお、それなりに役立ってる、ハク姉さん。
ネルはネルでネットドライブするし。

いや、実際、オレが役立たず？

「見つかった！」

名古屋が通信機を使って伝えた。

ボカロのみんなは通信機の周波数を受信できる。

「見つかったって」

「見つかったようね」

ミクとルカが同時に言った。

「よし、いくぜ！」

ドムマスターが叫んで、エンジン始動。

必要もないのに急発進した。

オレらは急加速のGを食らって、シートに沈み込んだ。

乱暴な運転だな。

随時、名古屋の通信を受け取っているため、目標地点がガシガシ変わってゆく。

つまり、テトは早いスピードで移動していると思われるのだ。

N粒子……ってことは、例のクラフトなわけだから、その先には当然、例のドライブがあって然るべきなわけだ。

名古屋は、それを開発していた。

んで、ボカロの中ではテトが最も適当な素材だったと。

「いたッ！」

ルカが叫んだ。

赤っぽい髪の色が見えた。

いや、ドリル機能までつけてねーだろーな？

「よし、皆つかまってるや！」

ドMマスターが叫んで、加速。

さすが峠専門だけあって、ドリフトを連発したりして、ぎゅーんとテトのすぐ後ろまで追いついた。

テトは翼を広げて上空を飛んでいた。

例のドライブを使っているためか、飛んだ後の軌跡がきらきらと光っていた。

「……意外にきれいだね」

梢がつぶやく。

確かに、場違いだが、きれいだ。

ふと、テトが大きく旋回した。

あ、この展開って…

『きしゃあああああっ！』

テトが獣のような声を発して、こちらへ向かってくる。

「うわ、来た！？」

「なんで、分かったんだ？」

「N粒子を探知したのかも！？」

梢が言った。

よく気づいたな。

…って、ボカロがいたら気づかれるって事か。

「ド…ルカのマスターさん、逆にテトを誘導しましょうー！」

オレは思わず言い直してしまった。

「……オツケー」

ドMマスター（いや本名知らんのでは、ちょっとの間の後、アクセルを吹かした。

「どこに行く？」

「広場ですわね」

ルカが言った。

ボカロの能力を引き出すためか。

「この辺からだ、星砂海公園かな？」

ミクが携帯をいじりながら言った。
携帯版のワールドアトラスを開いている。

「よし、決まり！」

フェアレディーズは、さらに加速。

パトカーとかきそう。

星砂海公園についた。

フェアレディーズが入り口に急停止する。

オレたちは、どたばたと車を降りた。

ロードローラーがわずかに遅れて乗り付けた。

リンレンもばたばたと降りて、オレらと合流した。

オレらは一斉に公園の中へ走ってゆく。

『きしゃあああああつ』

テトがすぐに追ってきた。

ぶわっ。

と風のようなものが背後から襲ってきて、オレは思わず前のめりに転んでしまった。

「マスター！？」

ミクが叫ぶ。

「このお、許さないんだから！」

ミクは振り返り、テトの前に立ちはだかった。

「私も許しませんよ！」

「ゆるさん！」

ルカ、リンも同じく、ミクの両脇に立つ。

「ぼ、ぼくもーっ」

レンが若干遅れてリンの脇に並ぶ。

「みんな、行くよ！」

「ええ！」

「はい！」

「ほーい」

ボカロたちが、ショック軽減機構を発動させた。

こちらにも空気が粘つくようになったような感触が伝わってくる。

Yフィールドだった。

フィールドを展開して、テトの動きを止めようというのだ。

だが、

『きしゃああああっ』

テトの動きは止まらなかった。

ボカロたちの真ん中を突っ切ってゆく。

「「「きゃっ!?!」」」

「うぎゃっ!?!」

ミクたちは、そのあおりを食らって吹き飛ばされる。

「な…」

「フィールドが効かない?」

「痛い」

「もうやだー」

頑張れ、ミクとその仲間たち!

オレは心の中で応援。

いや、実際足手まといになるし。

『きしゃああああっ』

テトが旋回して帰ってくる。

そして、ミクたちの前に降り立った。

『くっくくくく…』

笑った。

『……』

その後は無言。

…あれ、何かしゃべるのかと思ったけど、無口だ。

「大人しく、製造元へ帰りなさい!」

ミクが立ち上がる。

偉いぞ、ミク。

「Yフィールド展開ッ」

『きええええっ』

テトは叫んだ。

その瞬間、何かがテトとミクの間流れたようだった。

どさっ

いきなり、ミクが倒れた。

「ミクちゃん!？」

「ミク姉!？」

ルカと双子が叫ぶが、つぎの瞬間には、ルカ、双子も倒れてしま
う。

「…な、なに？」

梢が訊いた。

「わからん」

「ルカーツ!？」

ドMマスターが、その場にくず折れた。

オレは駆け寄ろうとしたが、

「ごおおおっ

突風が襲ってきて、弾き飛ばされてしまった。

「いってー!」

地面に頭をぶつけて、喚くオレ。

「ち、なんつー力だ」

梢は齒噛みしていた。

オレらには、何も出来ることがない。
その事実が悔しかった。

にじゅうさんばん

ミクは心象風景の中を漂っていた。
マスターと一緒に公園を歩く。
マスターと一緒に土手を散歩する。
マスターと一緒にご飯を食べる。
マスターと一緒に……。

いつもマスターと一緒にだった。

ミクの心はマスターとともにあった。

だから、マスターが彼女と一緒にいる今。

何も心配しなくて良いのだ。

ミクはなぜかそう感じていた。

誰かにそう刷り込まれたような。

そんな不安が漠然とあったが、それもすぐに掻き消えた。

『いつも、マスターと一緒にいる、何も心配することはない』
誰かがそうさやいていた。

……そうね、何も心配しなくていいのよね。

ミクは目を閉じた。

平穏。

いつもの日常。

何の変哲もない生活。

憧れていた生活。

普通の日々を送って、普通に暮らす。
マスターと一緒にならば何も要らない。
すべてが満たされているのだ。

いつものように登校するマスターを見送る。

遅い朝食をとり、テレビを見たり、新聞を見たり、ネギをかじったり……。

近所のスーパーに行つて、お昼に食べるものを買つてきたり、ネギのラインナップをみたり……。

今日は群馬県産が安いな……。

午後はテレビを見て、飽きてきたら、歌つてみたり。

マスターが帰ってきて、夕飯を作り始める。

その後姿を見て、思わず笑いがこみ上げてくる。

包丁のリズミカルな音。

調味料の匂い。

材料の肉や野菜が加熱されてゆく。

おいしそうな匂いが漂ってきて、ミクはつい口の中をよだれで一杯にしてしまう。

「マスター、おいしそうですね」

ミクは食べるの専門。

夕飯を食べ終わると、またテレビを見ながらマスターとバカ話をする。

飽きてきたら、歌を歌ったりする。

お風呂に入つて、歯を磨いて、布団を敷いて。

……もちろん、それぞれ別にネ。

電気を消して寝る。

……いつかは、マスターと一緒に寝るようになったりして!?

ちよつと夢物語を妄想して、赤面する。

でも、最近、そうなりつつある。

そんなに先の話でないかも。

やっぱり、赤面する。

そんな時、ミクはマスターに訊いてみる。

「マスター、わたしのこと好きですか?」

返事は分かりきっていても、聞かずにはおれない。

ミクは幸せだった。

このまま、幸せがずっと続けばいい。

そう思っている。

そう、このまま目覚めなければいい。

何も心配は要らない。

何も考える必要はない。

そう。

このまま埋もれてしまえばいい。

日常に埋もれて、永久に終わらない世界へ……。

マスターがご飯を作っている。

ミクは、テレビを見る振りをしながら、ちらりとキッチンを盗み

見た。

その立ち姿に胸がきゅんとなったりする。

……マスター、スキです。

だが、すぐに恥ずかしさがこみ上げてきて視線をそらしてしまう。

一人で、あうあうーっと空回りするアホの子だ。

ふと、そらした先にネギが見えた。

……なんだろう？

ミクは何か違和感のようなものを感じた。

ネギを手にとって見た。

ドラムスティックのように振り回してみる。

……こら、ネギを振り回すな！

マスターからのツツコミが入……………らない。

アホの子らしく、お尻を突き出した姿勢で両手をブンブン振り回してみる。

……ほらほら、早く突っ込んでくださいよー！？

しかし、マスターは振り向かない。まるでルーチンをこなすプロ

グラムのように…。

……あれ？ どうしたんだろう？ もしかして怒ってる？

ミクの心に焦りが生じた。

『かじれよ』

「え？」

どこからか声がしてきて、ミクは驚いた。
ネギだ。

ネギがしゃべった。

『いいから、早くかじれよ？』

「ネ、ネギがしゃべってる！？」

『ああ、そうだよ、ネギだけどこか？』

投げやりな口調が、どっかの火消しロイドを思い起こさせる。

『ネギにもネギの意地ってモンがあらあッ』

何か啖呵を切り出すネギ。

『かじるのか、かじらねーのかどうなんでい？』

「えッ、えーと…？」

ミクは助けを求めるようにキッチンへ視線を向けようとしたが、

『あーっ、空飛ぶ傘寝て待て傘ッ！！！！』

ネギが意味不明な事を絶叫したので、びくりとネギを見てしまった。

「な、なんなの！？」

ミクはネギを捨てようかとも思ったが、なぜか実行できなかった。

「ネギの魔力！？」

『人聞きの悪りーコトいうなよ』

「だってえ…」

『長ネギー、わたしは長ネギー』

ネギは唐突に歌い始めた。

青く白い 細長い姿

あなたは そう ネギなの
長ネギなの

ミクの歌声とは若干違っていた。ソリッド感のある高めの音程。
消え入りそうな儚げな声。

それでいて、妙に底力がある。

……。

ミクは驚いていた。

なぜか、驚いていた。

そんな、これって……。

…… あれ、なんだっけ？

ミクはボケボケである。

だが、何でかネギをかじってみようという気になった。

それで何かが変わる。

ホントは、この幸せを壊したくない。

でも、この世界は本当の幸せではない。

変化を止めた世界。

流れの止まった世界。

平穩かもしれないが、偽者の作り物の世界。

…… ごめんね、この世界のマスター。

ミクはもう振り向かなかった。

…… わたしは先に進みます。

誰かが待ってる。

わたしを待ってる。

みんなが。

ネギをかじった。

*

ミクの電子の脳に記憶のフラッシュが走った。
テトが暴走。
マスターたちと追跡。
そして、テトに何かをされたこと。

ミクが気づくと、テトが目の前にいた。

*

ミクが起き上がった。
よろよろしている。

「ミク！」
オレは思わず叫んでいた。

びしっ

ミクは、Vサインを返した。

そうでなければ駆け寄っていただろう。

まだ、やれる。

ミクは多分、そう言ったのだ。

「……テトちゃん。いえ、テトちゃんに憑りついた悪魔さん」

ミクはテトを見据えていた。

しかし、その表情は微笑。

「わたしはウソの世界には住めないよ」

ミクが言ったが、テトは言葉を解さないのか首をかしげている。

「ちよつと懂れてはいたけどね」

舌をペロリと出して見せる。

おおー、可愛い。

萌えー。

オレは状況も忘れて、心の中で絶賛。

「こら、バトルの最中だつてこと忘れんな!」

梢がおっかない顔でたしなめた。

「おお、そうだった」

オレは悪びれた。

ドMマスターはじつと戦いを凝視してる。無口だな。

多分、戦いはもう始まっている。

おしゃべりはしてるが、ミクはフィールドを展開しているはずだ。

だから、テトも動けない。

今はだかな。

「う……」

ルカが呻いた。

両手を着いて起き上がろうとしている。

テトの視線がそちらへそれる。

「あうー」

「うげー」

双子も同じように起き上がろうとしていた。

『ふいー、みなてこずらせやがって…』

電子音がかったネルの声がした。

ミク、ルカ、双子がふと周囲を見回すが、発生源はミク、ルカ、

双子自身だ。

ネルの声を皆でしゃべっている。

「ネルちゃん？」

ミクが言った。

『通信回線経由でダイブして、おまいらをハックして、たたき起こして。疲れた…』

「うん、ありがとう、ネルちゃん」

ミクは笑った。

『うつ……うん、いや別に…』

よっしゃ！

恥ずかしがりおk！

「ネルちゃん」

『ん？』

「ネルちゃんにヒントもらったよ」

ミクは言つて、目を閉じ、胸の前で両手を組む。

「らー」

ミクはそのままの姿勢で歌い始めた。

「らー」

「らー」

小休止。

「らー」

再び歌うと、ミクの周囲を取り囲むフィールドが淡い緑の光を放したようだった。

力が高まつてる。

「覚えてるか、リンが峠で歌ったときのこと」
梢が言った。

「…… 燐光を発してた」
黄色のな。

「らー」
ミクがまた歌い始める。

「らー」
ルカがその後に続いた。

「らー」

双子も続いた。
音が重なりあつて行く。

「らー……」
さらに弱弱しいが精一杯といった感の声。ハク姉さんだ。
トラックを運転してきたらしい。荷台にカプセルが見えた。

…… なんでもこなすな、ハク姉さん。

ミクたちは、ハク姉さんをちらと見て、微笑んだようだった。
「あれー、ひとり足りないなー？ 誰かなー？」
んで、ミクはいたずらっぽく言った。

「……」

ネルはずっと押し黙ってたが、
「なんで、あたしが……？ あたしはネットランナーだっちゅーの」
「またまたー、さっきの歌、上手だったよ」
え？

ネルが歌ってた？
オレは耳を疑った。

防火ロイドにそんな機能ついてるのか？

「あ、あれは、なんつーか、たまたまってゆーの？」
ネルは慌てて弁解するが、

「…… 分かったよ、歌てやらあwww」
諦めとも覚悟ともつかない様子で言った。

「らー」

そして、

「『『『『』』』』』」

皆、一斉に声を重ねる。

全員が燐光を発していた。それぞれの色をしている。

《Let's smile》

ミクが歌い始めた。

どこからともなく曲が響いてくる。

ロードローラーに取り付けられたスピーカーからだった。

……何が起こってるんだ？

「頭の中で思い浮かべた曲を瞬時にデータ変換して流してるようだな」

名古屋がオレらの隣に立った。

「そんなことが？」

「なにせ、未知のテクノロジーなんでね、予想外の事態が多い」

「んなもん、実用化すんなよ」

「そうは言っが、考えてみる。人類にとって大きな力となるはずだ」

「……そうかもな」

梢がうなずいた。

DMマスターは無言。

《スマイル スマイル スマイル

あなたの心の中にある

奇跡に気づいて》

ミクの可憐な声が響いた。

《そうほら みんな

自分のことしか 見えないけど

それは 誰でも同じ》

ルカが追隨して歌う。

《だから やさしさを忘れないで (uuuu)

その奇跡 信じて (uuuu)》

双子が歌う。()はレン。

《だけどほら 誰も

他人の事 分らないけど

それは 気づかないだけ》

ハク姉さんが歌う。

《そうさ ぬくもりを無駄にしないで (uuuu)

輝きを 信じて (uuuu)》

ネルが歌う。

なんて、ヤツらだ。

即興で歌詞を作り、曲を作りしてる。

これがボカロの真の力なのか？

《スマイル スマイル スマイル》

全員で歌う。

《あなたの心の中にある 奇跡に気づいて》

ミクが歌った。

《青い空 白い雲 届け わたしの思い そこまで》

ネルが歌いだす。

《わたしの思い 心にある思い 誰かに伝えて》

ルカが継いだ。

《想いのネットワーク それは奇跡》
《想いのコラボレーション それはミラクル》

リンレンが同時に歌を重ねる。

《あなたの心に届け この想い
ミラクル 未来にある姿信じて
スマイル つながりをもっと信じて》

《スマイル スマイル スマイル

わたしの想いが
伝わってゆく》

『ぐ…』
テトは身動きできないまま、呻いた。
『ぐあああっ!?!』
身をよじる。

歌は続く。

《空に届け 天に届け この想い はかない想い》

ハク姉さんが歌う。

《壊れそうな奇跡 割れそうな奇跡 失くす前に誰かに》

ルカが継いだ。

《想いのコラボレーション それはミラクル》

《想いのネットワーク それは奇跡》

リンレンが同時に歌を重ねる。ちなみにさっきとはパートを交換していた。

《すべての心に届け この誓い

ミラクル 未来の姿予想して

スマイル 信じる心 強く念じて

スマイル》

全員で歌った。

《スマイル スマイル スマイル

あなたの心の中にある
奇跡に気づいて《

『ぐうぐう』

テトはまた身をよじった。
顔を覆って苦しそうに呻き続ける。

《青い空 白い雲 届け

わたしの思い そこまで
わたしの想い 心にある想い
誰かに伝えて《

皆、繰り返し歌い続ける。

テトは、がくつと膝を着いた。

『ぐあああ』

『……』

うめき声に混じって何か細い声が聞こえた。

《想いのネットワーク それは奇跡》

《想いのコラボレーション それはミラクル》

それぞれのパートを勝手に選んで歌う。

《あなたの心に届け この想い
ミラクル 未来にある姿信じて
スマイル つながりをもっと信じて》

『スマイル』

みんなの声に混じって、ちょっとロボっぽい、それでいてどこか
耳に残る声が響いた。
テトだった。

『……イル スマイル スマイル
あなたの心の中にある
奇跡に気づいて』

うめき声に混じって、歌声が響いてきた。
苦痛に顔が歪んでいるはずなのに、口が動いている。
……な、なんだ？

「本来のテトが起動してる……」
名古屋がつぶやく。

『青い空 白い雲 届け
わたしの思い そこまで
わたしの想い 心にある想い
誰かに伝えて』

ミクたちも繰り返し歌い続けた。

想いのネットワーク それは奇跡
想いのコラボレーション それはミラクル

あなたの心に届け この想い
ミラクル 未来にある姿信じて
スマイル つながりをもっと信じて
スマイル

『ぐおおおっ！！！』
遂にテトの目、鼻、口、耳から黒い霧のようなものが吹き出てきた。

悪魔が憑りついてられなくなったのだろう。

どどーん！

最初やってきたと同じように、黒い霧は異次元の穴へと消えていった。

やった！
追いついたぞ！

喜びもつかの間、

テトがばたりとその場に倒れた。

ミクも倒れた。

ルカも倒れた。

双子も倒れた。

ハク姉さんはトラックに寄りかかったまま意識を失ってた。

「み、みんなっ……」

ネルだけは健在だった。

シヨック軽減機構ついてないからな。

「よし、皆を回収しよう」

名古屋は自信たっぷりと言った。

「なあに、ゆっくり休めば大丈夫だ」

空元氣っぽくもあったが、オレたちがほっとしたのも事実だった。

にじゅうよんばん

ミクたちは製造元で休んだら、すぐによくなった。

テトは身体にかなり負荷がかかったのか、すぐには目覚めなかった。

「大丈夫、任せとけ」

名古屋はどんと胸を叩いた。

「すごい力だったなあ……」

オレはミクと並んで部屋に帰る。

ネルもいるけど。

「名古屋さんから、お礼に『タマゴのタマゴ』もらったよー」

ミクはオレの話なんか聞いてないようだった。

……どこかの名物菓子だったよな。

「あのオヤジ、キモヲタの割には気が利くよねー」

ネルも一箱もらっていた。

「ネルも一緒にお茶でも飲もうぜ？」

「……え、ええ」

ネルはミクをちらと見た。

遠慮してる風だったが、

「おk、上がって上がって！」

ミクは笑顔で言った。

三人でテレビを見ながらお菓子を食べ、バカ話をする。

「ハク姉、名古屋さんに雇ってもらってよかったね」

ミクが嬉しそうに言う。

「だな。ハク姉さんって、作られた後、忘れ去られてたっぽいから

な……」

オレはうなずく。

「ハク姉、引っ込み思案だから……」

ネルがちつという顔をする。

でも、オレたちはもう知ってる。この娘はホントは相手の事を思ってる。

ただ照れ隠しに悪態をついたりするのだ。

「まあ、ハク姉さんの能力が認められたんだから、よしとしようぜ」
「うん」

ネルは素直にうなずいた。

「……ネルちゃんが、素直だ!？」

「悪いかよ？」

ネルはちよつと赤面しつつ、

「話変わるけど、相談にのってもらいたい……つか、その……」
「話してみるよ」

オレはうながした。

「あのさー、刑務所に入ったあいつらのことなんだけど」

そっぴや、面会に何度か行ってたんだっけ？

「何度か会ったけど、どう言葉をかけてやったらいいか、分からないくてさあ」

ふー。

ネルはため息。

「そうだなー」

オレにそんな難しいことが分かるワケない。

ネルも期待はしてないだろう。

ここは黙って聞いているのがよしだ。

愚痴を聞いてくれるだけで、ある程度はすっきりするもんだ。

「あいつらも、あたしと同じでヒネくれてるから……」

……あ、自覚はあるんだ。

「ネルちゃん」

ミクはにこにこしたままで言った。

「ネルちゃんには、歌があるじゃない」

「「え？」」

オレとネルは聞き返していた。

「えー！？」

ネルは驚き、うつたえる。

「だ、だめだよ。あたしの歌なんて、恥ずかしいし、下手だし……」

……いや、君の歌は結構上手かった。

「うっん、ネルちゃんの歌はすごく良いよ」

ミクは笑顔で断言した。

「あたしは好き」

「……」

ネルは顔を真っ赤にしている。

恥ずかしがり（以下略）

「あのね、歌はね、誰にでも伝わるのよ」

ミクは諭すように言った。

「上手い下手に関係なく、心が伝わるのよ」

「そうかもな」

最も感情に訴えかける手段かもしれない。

「ネルちゃんには歌が歌えた。それだけで、他の娘には希望が出るんじゃない？」

ミクは付け加えた。

あ、そっか。

防火ロイドのネルたちは歌う機能はついてない。

そりゃ、確かに表面上歌詞を音に乗せて発声することはできるだろう。

でも、自分の意思で歌詞を作り出し、感情を表現するなんて事はできないのだ。

……あり、じゃあ何でコイツはできた？

ともかく、初期のプロムラミングを越えて成長し、足りない機能

を補足して、新たな存在に変貌するという意味では希望だ。

未来がある。

それだけで、人生はよりよく変わる。

将来がある。

それが人の心を豊かにする。

「うん、やってみようかな……」

ネルは、ひとしきり恥ずかしがり、ふぎやーっと暴れた後、ぽつんと言った。

*

「今回はどうなるかと思ったけど、何とかなったな」

「うん」

ミクはうなずいた。

「マスター、あのね……。悪魔さんに眠らされた時ね、夢を見たんだけど……」

「どんな夢だった？」

「うん、マスターと一緒に暮らしてる夢」

「それって、いつもと同じじゃん」

「うん、幸せだった」

ミクはオレの隣に寄り添ってきた。

おおっ！

そっという流れだったのか！

オレの脈拍がどかんと高まったようだった。

「ミク、オレ……」

「うん」

オレとミクは見詰め合った。

キスをした。

*

テトは3日で復活した。

なんで分かったかと言うと、

「キモヲタマスターさんにお届け物ー」

テトが、オレの部屋へ入ってきたからだった。
窓から。

空飛んで。

「テ、テト!？」

「あうあうー、何で窓から？」

オレとミクは、驚いたが、まあ、名古屋の作る物だ。常識なんて
持ち合わせてるわけない。

「届け物って？」

オレが恐る恐る聞いてみると、

「わ・た・し」

テトはいたずらっぽく、ウインクしてみせた。

「だめーッ!!--!!」

ミクの叫びがこだました。

にじゅうばん

ジリリリリリ。

工場に非常ベルが鳴り響く。

工場の一室より、走り去る影。

部屋のドアは無残にも壊されており、非常灯の赤いランプがそれを映し出している。

廊下の向こうから、どこどかと靴音が鳴り響いた。

警備員たちが向かってきたのだった。

「止まれ！」

警備員たちが立ちはだかるが、影は跳んだ。壁を蹴り、警備員の背後へ着地する。

警備員たちが振り向いた時には、既に走り去っていた。

*

「テトちゃん、いつまでここにいるつもり？」

ミクはテトの前に正座し、じっと見据えていた。

「それは最重要機密なのです」

テトはペタンと女の子座りで、ミクの背後のTVの画面を眺めていた。

バラエティ番組が流れている。

「あはは、サイコー」

テトは無邪気に笑っている。ミクのこととは無視して。

「テトちゃん、名古屋さんに何を言われたか分かんないけど、あなたがいるとマスターが食費増大で破産するの」

ミクは、「それでなくともボカロのみんなが食べに来るのに……」

と付け加えた。

体のいい理由を盾に厄介払いしたいのである。
マスターといちゃつけないのだ。

「え、それは一大事!？」

テトは両手で頬を覆って、驚いてみせる。

「そうなの」

ミクはうなずいたが、

「ところで、昼ご飯はまだ？」

しかし、テトは次の瞬間には、人差し指を唇に当てて言った。

がくッ……。

ザルで水をすくってるようなもんだった。

マスターの鳴瀬は学校に行っていた。

その間に、ミクは洗濯や掃除を済ませ、買い物がてら散歩に出かけた。

もちろん、テトを連れていた。

テトはトテトテとミクの後を着いてくる。

土手に来ていた。

真昼間なので、子供連れの主婦とかが遊んでいるのがちらほらと見えた。

「あ、ネルちゃん!？」

ミクは、目の前の土手に体育座りしてる女の子に向かって言っていた。

金髪サイドテール。

目つきのあまりよろしいとは言えない感じの女の子である。

でも、その目はちよつと悲しそうだった。

「あ、あの…」

「ミクちゃん……」

ネルは振り向いて、そして、ぽたぽたと涙をこぼした。

「あつ… なつ… どうしたの!？」

ミクは、あうあうーつと慌てふためいた。

「ココハ一旦オウチニ戻リマセウ」

テトが、なぜかロボ声で言ったのだった。

*

「で、ネルがここにいてるってワケか…」

オレはミクの話聞いて、ため息をついた。

ネルはテトと一緒にTVを見てた。

やっぱりバラエティー番組だ。

「きやはは、おもしろーよね、これ」

「ねー、おもしろいー」

ネルとテトは、結構、仲が良いようだった。

ま、どちらも派生と言えるかもしれないからな。

「ところで、何があっただんだ？」

オレが訊いたら、

「え、うん…」

ネルは急にしゅんとした。

「あー、泣かせたあー、泣かせたあー」

テトが茶化すようにオレを指差す。子供か？

っーか、指差すな。

「あの……あいつらと…面会したんだけど」

ネルは、ぼつりぼつりと話し出す。

面会は何度目かだそうだ。

今日は、今後の身の振り方とかを話してみたとか。
でも、服役中のネルたちは、何もビジョンがなかった。持ち得てなかった。

一生懸命、諭してみたけど、ものすごい反発を食らった。
そんなところだった。

「……あたし、どうしていいか…」

ネルは泣いていた。

涙が頬を伝ってゆく。

「あんまり急がないほうがいいよ」

オレは、そう言って慰めた。

「うん、そう簡単にはいかないって、あたしも覚悟してた…」

ネルは震える声で続けた。

「でも、いざ、反発されちゃうとき、すごく悲しくて…」

「ネルちゃん…」

ミクはネルを抱きしめた。

ネルは泣いた。

テトは首を傾げて、ミクのマネをして、オレに抱きついた。

「おい、何してる？」

「えーと、重苦しいフンイキを打ち壊してみようかと」

テトはしれっと答えたのだった。

人生、どうにもならないことはある。

難しいことなら、尚更だ。

でも、なんとかしてあげたいのは確かだ。

オレは、何もしてあげられない自分にちよつと無力感を感じていた。

とにかく、夕飯と一緒に食べた。

一緒にいてあげることぐらいしかできない。

「ネルちゃん、可哀想だね……」

ネルが部屋に帰った後、ミクはぽつんとこぼした。
ミクは優しすぎる。

誰にでも同情してしまう。

だが、そこがミクのいいところだ。

「ミクちゃんはやさいですネ」

テトは、お茶をすすりながら言った。

「それをいうなら、『やさしい』だろッ」

オレは突っ込んだ。

ちよつとしたところで小技を使うな、某カロイド。

下手すると見落とす可能性がある。

いや、そんなこと言ってる場合じゃねー。

「そうともいいマス」

テトは減らず口を叩く。

「あのなー、人が悩んでるんだから茶化すのはやめろ」

「では！ 次は、お悩み相談のコーナーッ!?」

テトは、人差し指でびしつと虚空を指した。

「……あたまいてー」

「……あうあうー」

オレとミクは、いい加減疲れ気味であった。

「では悪魔召喚して、願いを聞いてもらいませう。対価は『魂』になりますか!」

「誰が払うか、ンな大切なもん!」

オレは怒鳴った。

「つーか、二度と呼ぶな、あんなもん!」

「え、でもお……、わたしが呼んだワケじゃなくー」

テトは不満げに頬をぷつと膨らませる。

いや、可愛いけど。

「そりゃそうね」

ミクはうなずいた。

にじゅうろくばん

で、梢に相談してみた。

授業がひけた後、梢の家に集まる。

そしたら、リンが着物を着ていた。振袖というヤツだ。

えー？！

「なに、そのカッコ？」

ミクは驚き、そんで、ぷぷつと噴いた。

「もーミク姉、笑わないでよ！？」

リンは、ぷうと頬をふくらませた。

「いやね、最近、曲作りで煮詰まってきたから、お遊びで作ってみ
たんだ……演歌」

梢は恥ずかしそうに答えた。

「そしたら、意外と受けちゃってさ、瀬波洲とかウチの親とか」

「へえー」

オレは興味を持った。

「一曲聞かせてくれよ」

「あー、リン頼む」

「はい」

リンは元気よく返事して、マイクを手に取った。

PCに接続されたスピーカーから、

ちゃんちゃんちゃん　ちゃかちゃんちゃん

ちゃん　　ちゃかちゃっちゃっちゃん

という演歌のフレーズが流れ出し、リンはピシッと姿勢良く立つ。

東へ行ったら 砂利道踏んで
西へ行けと言われりゃ アスファルト

どんなところへも行くのが 舗装道
踏んで見せましょ 何でもござれ

ロードローラー 働く車
乗りこなしてナンボの この世間

いつでも どこでも 舗装して
あげる

ロードローラー 姉弟節

ゆったりとした身振り手振りで、時には力強く、時には軽やかに
歌い上げた。

コブシが効いてる。

いや、やっぱり日本人には演歌があつてな。
自然と旋律が頭に浮ぶ。

ばちばちばち。

見ると、執事のおっさんが拍手していた。
他にも使用人一同が集まっていた。中高年一同ね。

うーむ。

かなり受けてる。

けど…。

「姉弟関係ないじゃん」

オレが言ってみたら、

「ふっふー、そのツツコミを待ってたよ」

梢はニヤリと笑った。

我が意を得たり、と言わんばかりに。

…… ネタだったらしい。

「ほわー」

ミクは、ほわーって感じのリアクションだ。

意味不明だが…。

「世代つてのがあるからなー」

言ってから、オレは何かヒントを得たような気になった。

つまり、ネルの悩みについてのヒントだ。

この前、ミクがネルに言った言葉…。

『ネルちゃんには、歌があるじゃない』

それと今の光景が合致したような……

とか思ってたなら、

「テットテットなビジュアルでゴーゴー！」

テトが周りの雰囲気ガン無視で、何かを歌っていた。

線もつないでないのに、スピーカーから曲が流れ出す。

無駄に能力使ってる。

テトテトな ビジュアルでゴーゴー

みんな大好き テトちゃんさ（ぎゅいーん）

テトテトで グリグリなビューチホー

誰もが知ってる テトペッテンソン

熱い血潮の某カロイド 某カロイド

テトです テトペッテンソン（どぎゃーん）

Yes , My Queen て言いなさい

いやウソ ウソウソウソ

でも ちよっちホント（どっちだ！？）

テトテトな ビジュアルでゴーゴー

みんな大好き テトちゃんさ（ぎゅいーん）

テトテトで グリグリなビューチホー

誰もが知ってる テトペッテンソン（どぎゃーん）

何時の間にか、今更なつて感じのロックンロール的音楽が流れて
おり、

「ふー。みんな、わたしの美声に聞きほれてますネ」

テトは笑顔で言ったのだった。

いや、呆れてるんだが。

つか、超絶マイペースだな。鉄面皮め。

あ…… さっき気づいたことを忘れちゃった。

*

梢に相談したが、やっぱり時間が解決するんじゃない？　ということに落ち着いた。

問題は、ネルの忍耐力がどこまで持つかどうかだろう。

…なさそうなんだけどよ、あいつ、忍耐力。

「歌を作るってのはどうかな？」

ミクが言った。

オレたちは部屋に帰ってきていた。

もちろん、テトも一緒だ。

「ずっと考えてたんだけど、ネルちゃんはまだ歌うのが恥ずかしいんだよね」

「ま、そうだな」

オレはちよつと考えて、

「刑務所の面会スポットじゃあな」

「うん」

ミクはうなずいた。

「だから、その娘たちの前で歌わなくてもいいんだよ。ただネルちゃんを励ませるような歌だったら」

「それも一つの方法か」

オレは思った。

何をしてよいか分からない。

でも、何かをしなければ状況は変わらないのだ。

オレは梢の携帯に電話を掛けた。

ミクにはルカ、ハク姉さんと連絡を取ってもらう。

「えー！？」

ネルは叫んでいた。

オレらからの提案を聞いての反応だ。

「あの、あたし、作ったことないし…」

ネルは及び腰。

「大丈夫、気分転換で作るだけ」

「別に誰に聞かせるわけでもないし」

オレとミクは、ネルにプレッシャーを与えないように明るくお氣楽に言い放った。

「うん、やってみようかな…？」

ネルは、しばらく考えてたが、ついにガッツポーズをとった。

「どういう歌にしようか？」

オレが訊ねると、

「え…どんなのがいいかな？」

ネルはちよつと引き気味で、逆に訊いてきた。

「ま、世代があるからそれに合わせた感じのがいいよな」

オレは言ってみて、そこで思い出した。

テトのせいで、忘れてしまったが、リンの演歌を聞いた時、
……ネルくらいの若い娘が好む歌がいいんじゃないか。
それに気づいたのだ。

年配の方には年配の方向けの歌がいい。

同じように、若い娘には若い娘向けの歌が合うはず。

ネルって確か、設定上は17歳だよな。

ミクは16歳。

ちなみにテトは31歳と。

「キメラなら15歳です」

テトは機嫌悪そうに主張した。

……いや、読むな、心の中を。

「とにかく、君ら若い娘さんの好むモンを作りたまえ」
「そっぴやさー、レンきゅん、いなかったねえ？」

テトは全く脈絡のない話をしだした。

……きゅん？

「…そうだったけ？」

ミクがちよつと考えてから言った。

付き合いいいな。

「レンのことだから、ゲームがお宝かなんか見つけたんだろ」

「レンきゅんは、そう、恋ですね！」

テトは何でか断言した。

「はあ？」

ついてけん。

誰か何とかしてくれ。

にじゅうななばん

えーと。

唐突ですが、テトが恋って言ってたの、当たってました。
レンの様子がヘンだって、梢からの電話がありました。

……テトってナニモン？

『あれだ、ほら、誰かを好きになった時、ちょっとヘンな行動に走ったりするだろ？』

『ああ、嬉しそうにしてたかと思うと急に落ち込んだりってヤツ』
『まさにそう！』

梢は言った。

『嬉しそうにしてたかと思うと、1秒後にはズンドコに落っこちてたり、ツッコミどころ満載の子だよ、レンは』

『嬉しそうだな……』

梢はやっぱ、どっかおかしい。

『ま、あんまりイジめんなよ？』

『おう、まかしとけ！』

『いや、ちよっかいかけんなよ。あいつ、グレるぞ？』
オレはちよっち心配。

ゲーム仲間だしな。

『それより、相手は誰なんだよ？』

『知らん』

梢はきっぱり言い切った。

『そつか、調べんなよ？』

『分かってるって』

梢は面倒くさそうに言ってから、

『あ、そうそう。今度の休日はネルちゃんの歌作りを手伝うんだよな』

『うん、また場所貸してくれ』

『オツケー』

話をまとめて電話を切る。

「よし、と」

オレはが夕食の準備にかかろうとしたら、

じゃーっ

中華っぽい炒め系の効果音が鳴り響き、

「へい、おまちッ」

テトが鉄鍋の中身を皿に盛った。

肉ともやしと人参の細切りの炒め物だ。

片栗粉を溶かして作ったあんまでかけてある。

「う、おまい、料理できんの？」

「当然です」

テトは自信たっぷりに言った。

「和洋中なんでもござれ！」

「わー、テトちゃんすごいー」

ミクは素直に賞賛の眼差しを向けた。

「ジューロウチャオドウヤー、ハオラ！」

「は？」

「え、今、何て？」

「中国語です」

「……こいつ、中国語もしゃべれるのかよ？」

「ナニモン？」

「ちなみに漢字で書くと、猪肉炒豆芽、好了！」

「ジュー……ジュー……ジューッ？」

ミクが真似して発音しようとしている。

「ノンノン、ZhですZh！」

テトは人差し指を振って見せた。

「できないー！」

ミクは日本語しか話せない。

歌の中に出てくる英語もバリバリ日本語発音だしな。

「他にも、大豆と骨付き肉のスープ（昆布出汁）、青梗菜の炒め物（椎茸入り）を作りましたよ、ふーッ」

テトは既に皿に盛ってある料理をテーブルに載せた。

……うーむ、もしかして、ミクより性能いいんじゃない？

「ち、わたしだって、やろうと思えばッ！」

「うん、頑張れ」

「……マスター、教えてください」

ミクはオレの袖をつかんだ。

「ゼロから学ぶのかよ」

オレは頭痛を覚えた。

「つか、NHK教育番組っぽい動きだ。」

「また、今度な」

オレは引きつった笑み。

「今はネルの歌作りに協力しないとね」

「あー、すげー、何コレ!？」

噂をすれば何とやら、ネルが勝手に部屋に入ってきて、テトの作った料理を指差した。

「わたし、中華料理達人あるよ！」

テトは中国人風日本語で、何かへんなポーズを取った。

「うひえー、やるじゃん、おいしそー、いただきまーす！」

誉めるか食べるかどっちかにしろ。

「といいつつ、オレも味見。」

うまい。

味付けもいい。

「ほわー、おいしーです。でも負けないッ」

ミクは、ほわーっと料理を味わってから、闘志を燃やした。

忙しいヤツだ。

「んまいッ」

ネルもガシガシ食べてる。

……こいつら、何でこんなに大食い？

で、休日にみんな連れ立って梢の家に集まる。

梢、リンレン。

オレ、ミク、テト、ネル。

ルカ、あ……ドMマスターもいる。

本名なんていうんだろ？

「あ、お久しぶりです。ルカのマスターさん」

「よお……」

相変わらず朴訥だなあ。

「歌を作るんだってな」

「はい、ネルの歌作りを手伝うんです」

オレが答えると、

「……誰かのために作るって感じだな」

「はあ、そうです」

「そんじゃ、いいものはできねえぞ」

ドMマスターは言った。

うお、何か手厳しいぞ？

「誰かに媚びたり、何かのために作る歌なんてロクなもんができね

……」

「……何をくっちゃべってんのかしらあッ?!」

いきなり、ルカがドMマスターのほっぺたをつねった。

「イデデデッ」

ドMマスターは痛みで体勢を崩した。

「まったく、空気読めよ!？」

ルカはパンパンと手を払って、ガスツと蹴りを与える。

「ぐえおっ!？」

ドMマスターは叫んで、地面に這いつくばる。

「ゴメンね、鳴瀬君」

「いえ、別に…」

こえー。姉御と呼ぼう。

「でも、悪気があつて言ってるワケじゃないの。単にがさつなだけだから、許してやってね」

ルカは、きらりん と星を飛ばして、可愛くスルーしようとしてる。

「こ、この…ッ」

ドMマスターは起き上がったが、

「何か？」

ルカが、上から目線で、ぎらりと睨みつけると、

「いや…」

ドMマスターは視線を外した。

「ち、女に手をあげるわけにはいかなーしな」

ドMマスターは、ぶつぶつとつぶやいて、庭の景色を眺め始めた。
うーん、ルカはDS。

「私のマスター、元が不良だから、周りがヘンに気遣うのがイヤなのね」

ルカはちよつと困ったような笑顔で、ドMマスターを見やった。

「……そっか」

オレは何となく理解できた。

ヲタに分類される人種も似たようなところがある。

周囲が不自然な優しさを持ち始めるってのは、確かに受け入れ難いもんだ。

くんは可哀想な人だから。

さんはアレだから。

そんな気配りは要らない。つい、そう思ってしまう。

「あたしも分かるかな」

ネルは、ぼつりとこぼした。

「でもさー、ホントに心配してくれたり、気に掛けてくれるのって、伝わってくるんだよね」

「そうだな」

何だか、初っ端からしんみりしてしまった。

にじゅうななばん（後書き）

中国語〓日本語

猪肉〓豚肉

です。

にじゅうはちばん

しみりしたところで、ミクの携帯が鳴った。

「あ、ハク姉……え？ 急に仕事か！？」

休日なのに？

ミクはすぐに携帯を切った。

「ハク姉、仕事でこれないんだって」

「うへー、土日も出勤かー」

「大変だなあ」

「ハク姉、泣いてた」

ミクはちよつと同情ってな感じで言った。

「ま、これないんじゃ仕方ないさ」

「そうだね」

みんな、意外に薄情である。

ともかく、歌作りだ。

オレたちは、あーでもない、こーでもないと話合った。

わいわい、がやがやっても楽しいかもな。

……ところで、テトはどこ行った？

ドリル髪が見当たらなかった。

ネルは分からないところは聞き、そして自分で考えていた。

「どの辺のジャンルを狙うかな？」

梢が言つと、

「やっぱビート系がいいでしょ？」

ルカが捻じ込んでくる。

「冗談、ここはゴリゴリなゴシックな、でしょ？」

リンが主張した。

いや、みんなネルの好きなようにさせるよ？

オレは言おうとしたが、他のヤツらの声に押されてかき消されて

…。

「おい、ネギ持ってきたヤツ誰だ？」

「緑色のヤツにきまってんじゃん」

「ネギは禁止！」

「うえーん！！！！！」

「マグロは？」

「ダメに決まってるんだろ！」

「タコは？」

「出すな、クリーチャー！」

「み、みかん……」

「ンラ ルーツ」

「あれ、そういや、テトどこいった？」

「ま、いつか、いると疲れるし」

「レンもいねー」

「いいよ、いいよ、ヘタレンなんか」

「ネギーッ」

なんか既にもうメチャクチャ。

結局、ネルだけが黙々と歌詞を作った。

「すまん、ネル。逆に邪魔ばっかしたみたいだ」

「いいの、いいの、みんなでワイワイやった方が楽しいしね」

ネルは笑顔で答えた。

……こいつ、いつからこんなに物分りよくなったんだ？

ネコかぶり？

「でわ、発表タイムといくか！」

梢が手を叩くと、みんながネルに注目する。

「う……」

ネルは赤面して、うろたえた。

「そんなに注目されると恥ずかしいじゃん」

「大丈夫、笑わないから」

リンは意地悪い顔をしている。

「ぐっ…みんなしてイジメやがって！」

ネルは、赤面しつつも何とか耐えているようだった。

「いいか、おまいらぁッ。今から、あたしが作った歌詞を披露する
！」

「おお、いいぞー！」

「ネギーッ」

「みかんーッ」

「マ、マグロ…」

「ぎゃーっ、マスター、私の振りしないでくださいッ」
ドスッ。

ぼでえぶろおが入ったようです。

無視無視。

「ごほん…」

ネルが咳払いして、口を開きかけた時、

「へい、おまちー！」

がしゃーん。

窓ガラスをぶち破って、テトが飛び込んできた。

どどおっ

部屋の床に激突して、ごろごろ転がってから、壁にぶつかってや

つと止まった。

みんな啞然。

何をしてくださりやがりますか、このペッテンソンは!？
はい、みんな怒る準備をしています。

「ふふふ…」

テトは、床に転がったまま、不思議な笑いを漏らした。

「何がおかしい？」

「頭？」

「いや、既に手遅れだ」

オレが言つと、みんなうなずいた。

「みんな、ひどいです…」

テトは表情を変えずに、

「ところで、みんな窓から離れた方が良いでしょう？」

…は？

ナニ言つてんの、コイツ？

『わー、派手にやったな』

二重鍵括弧で、誰かが破れた窓から入ってきた。

う…これはシリアスの展開？

つまり、敵っぽいど？

オレらが振り向くと、そこには、

黒髪、青メツシユのツインテール。

左青、右赤のオッドアイ。

身長が高い。180cmじゃ効かないぐらいでかい。
胸もでかい。

スーッっぽい服を着てる。

「欲音ルコじゃん!？」

「よく寝る子？」

「誰が寝ぼけ眼だ、コノヤロー！」

欲音ルコは、いきなりシャウトした。
やるウツ！

「いや、つまんねーし」

「ちよつと待て、テトが窓を突き破ったのって」

「あたしノオレだ！」

ルコは宣言。

「なんか、二つ声が…」

「あ、ほら、ルコはふなりだからッ」

「「えっ…」」

ミク、リン、ネルが驚いた表情でルコを見た

「なんだ、珍しいかよ、コノヤローッ！」

十分珍しいです。

「聞けッ、おまえらを倒すことにしましたのでよろしく」

ルコは、ペコリとお辞儀をした。

うむ、壊れ具合よし。

とか言ってる場合でもない。

「はあーっ」

ルコはバトル漫画っぽく手をかざした。

びゅんびゅんびゅんっ

と、何かが飛んできた。

「あぶないッ！」

「危ないッ！」

ミクとルカが、叫んでルコと同じように手をかざす。
シヨック軽減機構を発動させたようだった。

何もない空間に、銀色のパチンコ玉がたくさん留まっている。

「来いッ、ロードローラー！」

リンが叫ぶと、ロードローラーが勝手にエンジン始動し、動き出した。

窓枠を突き破って部屋に侵入。

そして、ルコ目掛けて突っ込んで来る。

急ブレーキ。

どん。

ルコは弾き飛ばされた。

が、

「ふ…この程度か」

ルコは無傷だった。

弾き飛ばされたお陰で、オレらの目と鼻の先にいた。

「な…なんで、わたしたちをッ!？」

ミクが叫ぶが、

「別に…」

ルコはぼそりと言った。

「理由なんてない」

「そんなんでヒトを狙うな！」

ルカがパンチを繰り出すが、

ばしっ

受け止められてしまった。

「甘いッ」

ルコが格闘モノっぽく言って、逆にルカの手をねじ上げようとする。

「はッ」

声がして、蹴りが飛んだ。

「うつ…」

ルコは腹にそれを食らい、後退る。ルコの手は離してしまった。ネルだった。

勢いを止めず、真っ直ぐに拳を突き出す。

ルコは両腕でブロックし、お返しとばかりにパンチを叩き込んだ。ネルは、すばやく突いた手を戻していた。両手でルコのパンチを迎えるように包み込み、受け止めたかと思うと、

くるり。

両手を返した。

ルコは手首を返され、バランスを崩した。関節技だ。

うへー…ネルってつえーんだな。

ネルの動きはそれで終わらない。

崩したところへ、横蹴りを繰り出す。

「ちっ…」

ルコは舌打ち。

空気が粘つくようになった感じがした。

……フィールドか。

突然、ネルの動きが、みよーんと遅まった。

「くっ…」

ネルは焦った。

このままだと、狙い撃ちだ。

「ネギソードオツツ」

ミクが何か叫んで、ネギを振った。

フィールドの中だというのに、通常で速度で動いている。

ネギの周りを緑色の光が包んでいた。

「うわっ……」

ルコは素で驚いていた。

「なんだ、それは!？」

「ネギは人類の至宝なのよーッ」

いや、それ違う。

みんな思ったけど、敢えては言わない。

「みんな、大丈夫!？」

弱弱しい声がして、ハク姉が軽トラックを止めた。
もちろん、窓の外で。

「このアンチ・Yフィールドガンを試してやるッ!」

名古屋も乗ってた。

なぜか、荷台に。

でかいロケットランチャーみたいな獲物を構えている。

「……」

ルコは捨て台詞もなしに、逃走した。

「待て、こらあッ」

名古屋が追っかけようとして、荷台から落っこちた。

この際、人類の未来のために死んでくれたらいいかもな。

……あ、逃げられた。

でも、無傷でした。

いや、そうじゃない、違うぞ、オレ。

にじゅうはちばん（後書き）

ルコファンな方、ごめんなさい。
てきとな悪役がおらんかったんでネ。
ムリに悪役にしました。

にじゅうはきゅうばん

「うげ…なにがあつたの？」

レンが帰ってきて、立ち尽くした。顔が青ざめていた。窓枠、床が外側からかなり破壊されまくっている。

その張本人はロードローラー。

ガッツリと梢の部屋に食い込んでいる。

「レン、あんた何やってたの？」

リンが言った。

かなりお冠な様子だ。

「…いや、ごめん。ちよつと本買いに…」

レンはBOOKSとかロゴが入った紙袋を持ってた。

「ちつ、つかえねー」

リンは目くじらを立てて、レンを見た。

「てゆうーか、ラブってる場合かよ!？」

「ぎゅあああーっ」

レンは大声出してリンの声をかき消そうとした。

……ごめ、みんな知っちゃってるんだ。

恨むならテトな。

*

「で、誰なの？」

ミクが笑顔で自白を強要した。

「言うかーッ!？」

レンは抵抗。

「あんま、イジめんな」

……グレたりしたら困る。

「だってえ、面白いんだもん」

ミクは年下には容赦ないようだ。

「グレてやるう……」

レンは半泣きだ。

……やだな、姉ばつかの中に末っ子・弟っていうの。
レンに同情してみた。

「で！」

名古屋が唐突に切り出した。

「この前、ルコが脱走してしまったのだ」

「この前っていつですか？」

ルカが訊いた。

「3日前ぐらいかな？」

「あの……このところ徹夜続きだから、時間の感覚がヘンになってるの」

ハク姉さんが言った。

「ルコを追ってたってこと？」

「そう」

名古屋はうなずいた。

「ヤツはテトと同時期に開発してたボカロだが、性格に欠陥があつてな……」

「それは十分、分かりましたよ」

オレは、うんざりしながら言った。

「そうだろうな。ルコの精神はなんでか歪んでしまってるんだ」

名古屋は首を捻るが、

……そりゃ、ふなりにされたらヘンになるかもな。オッドアイだし。

そついう設定だから仕方ないけど。

名古屋の説明を聞いた。

ルコは、起動……目覚めた時からおかしかった。

世の中すべてを憎み、

すべてを壊したいと願い、

そのために行動する。

100%異常に傾倒していた。

特に他のボカロに対する憎悪は相当なもんだった。

そして、遂に脱走した。

「定期点検のために起動させたのが悪かった。作業員の隙を突いて逃げたんだ」

「んなもん野放しにしていると、ヤバイよな」

「だから、警護のためにテトを派遣した」

名古屋は説明した。

「最初はテトにミクの良さを学ばせようと思ったんだが……」
そうだったのか。

「何で、ミクが襲われると？」

「ルコも、言っなければミクの派生の一人だからだ。オリジナルがいなくなれば、自分がオリジナルに取って代われる」

ふーむ。

弱ったな……話がまじめになりすぎてついてけん。

「いや、ダメだろ、そのリアクション」

「あんたにいわれたくないッ」

オレは絶叫。

あ、ネルの歌詞、うやむやになっちゃった。

……ところで、レンのヤツ、ネルを見るときの表情が。
てことは、ネルに惚れちゃったってこと？

名古屋とハク姉さんは、帰っていった。

また地道に情報収集するようだった。

で、何でか、その日の夕方、みんなオレの部屋に集まりやがった。ルカ、DMマスター、梢、リンレンはいないけど。

他の連中はみない。

たまり場と化したなあ…。

せまいんだから、ちよつとは遠慮しろよな。

「いいじゃんか、差し入れ持ってきてやったる？」

名古屋までいる。

やっぱ、社会人は金持つてるな。

牛井なんだけだよ。

「ところで、情報収集はどうです？」

「……まだ何も」

「あ、そういえば、老舗バーガー屋さんの看板男が盗まれたって…」

ハク姉さんが牛井をぱくつきながら、言った。

「なんの情報だよ？」

「えー、一生懸命集めたのに…」

ハク姉さんは、だらだらと涙を流した。

すげー、扱いづらい。

「当分はテトが護衛をする」

名古屋が食後のお茶をすすりながら言った。

「任してください」

テトは無表情にVサイン。

……大丈夫か？

「ルコが現れたら、捕獲しに来るよ」

「倒すんじゃないんですか？」

「できれば直してやりたい」

名古屋はぼつりと言った。

「あんなヤツでも、オレたちには娘みたいなものなんでね…」
夕食の後、みんな帰った。

順番で風呂に入ったけど、ミクとテトの風呂上りの姿を見ちゃうと、なんか萌えーってなるなあ。

困るね、どうも。

オレの心の中で、欲望を司る部分が、やべーってなるかも。早く寝るに限る。

朝起きてネルと一緒に登校し、授業を受けて帰ってくる。

「お帰りなさい、マスター」

「お帰りなさい、あなた。今日はギョーザですよ」

テトは何か言ってた。

ミクが首を絞めかねないような目でテトを見てる。

二人ともエプロン姿である。ミクはテトに料理を教わっていたと見える。

いや、可愛い。

「おいおい、冗談は…」

オレが言いかけると、

「顔だけにしてくださいッ！」

テトは突然、叫んだ。

……逆ギレ？

ホント、ぶっ壊れてんな。

「テトちゃん、マスターはわたしのものだよ！」

ミクは先手必勝とばかり、オレに抱きついた。

えーと、エプロンについた餃子の餡がオレの服についてんだけど。思ったが、言い出せるフンイキではない。

「ミクちゃん、そういうことは後でしなさいね」

ネルが不機嫌そうに仁王立ち。

部屋に荷物を置いてから来たようだ。

どいつもこいつもオレの部屋を茶の間みたいにしやがって。

「って、今日はギョーザじゃん、やたーッ」

ネルは結構、中華好きらしく、大げさに喜んだ。

「ちよっとは鳴瀬家の食費の心配をしたらどうかね、君たち？」

オレは、あーん？という感じで言ったが、

「えー、あたし、ビンボーだし…」

ネルは、途端に不幸そうな演出。

……ち、ちよっち同情しちゃった。

手強い。

「…ま、いいさ。そのうち恩返ししてくれりゃあな」

オレは諦めた。

みんながいるんで、寂しくはないしな。

水餃子だった。

皮から作った本格派だ。

水餃子は皮が厚めにしてあると食感が増す。

餡はシンプルな白菜とひき肉のコラボだが、味が引き締まってて

おいしい。

「んめー」

ネルは食べる時が一番元気なようだ。

ちなみに本格中華なんで、ひたすら餃子だけを食べる。

テトは、キッチンでせつせと餃子を茹でている。

「ほら、テトも食べるよ」

オレは皿に取っておいた餃子を、もってってやった。

「マスター、ありがとう」

テトは笑顔で言った。

案外、笑うと可愛かった。普段がアンニュイな感じだけにその差が明確になるのか。

ギャップ萌えー。

「む、萌え警報、萌え警報！」

ミクがネギを片手に飛んできた。

「天誅ーッー！」

標的はオレ？

バシッ。

オレ、ネギに打たれて死亡…。

さんじゅばん

洗物をして、果物なんかを食べる。

ネルは宿題を片付けたいと言って、居座った。

……多分、用心棒のつもりなんだろう。

オレに分かるところは、一緒に問題を解いてやる。

あんま分かったところはなかったけど。

「そーいや、ネルって格闘技でkindだね」

オレが振ると、

「ねー、強かったね」

ミクが受けた。

「あ、あれ……まあ、前の仕事で必要だったから覚えさせられたんだ」
ネルは恥ずかしそうにしている。

「少林寺拳法をベースにしてるらしいけど。師範の実戦経験を加味
してるっていつてたっけな」

……えっと？

オレらは顔を見合わせた。

なんてリアクションすりゃあいいのか。

「ああ、ごめん、話が専門的になっちゃったね」

ネルは笑顔でスルー！。

「あはは」

「うはは」

みんな笑ってごまかすと。

「――少林寺拳法。。。創始者である宗道臣が満州在留中に会得した
中国武術。。。正式には義和門拳。。。少林寺に伝わる少林拳と
は関係がない。。。人間育成の宗教的側面も有してる」

テトだけが、どっかのネットにつながってダウンロードしてた。
無視無視。

オレが無視を決め込んだ時だ。

がらっ

いきなり窓が開いて、

「リンリンルーツ！！！！！！」

もじゃもじゃ頭の黄色い服装をした奇妙な男が飛び込んできた。
顔はピエロの化粧。

「げっ、ドルドツ！？？」

「違って、トナルトですツツツ」

そいつは自信たっぷり叫んだ。

……パチモンかよ！？

そっぴい、目鼻口の化粧とか、服のデザインが微妙に違う。

「そのトナルトが、なにしにやってきたの！？」

ミクがネギを武装して、言った。

「いい質問です」

トナルトは人差し指を振って見せた。

「君たちには恨みはありませんが、ある方の御命令でッ」

「ルコか……」

「な、なぜ！？ ある方と言ったのに！」

「分かるわ！ ンなことぐらい」

オレはどなったが、

「ま、分かってしまったとしても問題ない。どの道、あなた方には
消えてもらうのですから！！」

前置きなげーな、コイツ。

「とおっ」

ネルが間合いを詰めていた。

ぐっとトナルトの襟をつかみ、轉身。

同時に足を払っている。

投げだった。

「あらーッ!？」

トナルトは情けない声を上げ、畳の上に倒れこむ。
どしーん。

地震でも来たかのような音が鳴り響いた。

ついでにちやぶ台も転倒。……壊すなよ!？」

ネルは倒したところを腕を極めて押さえ込んでいた。
相変わらず、つえーな。ネル。

「えい、えいッ」

倒れたところを、ミクがネギでぽかぽか叩いた。

「わーネギ臭いッ」

トナルトは叫んだ。

「トナルトは、オニオンリングの方が好きですッ」

「玉ネギ信者めッ!」

ミクは何か違う方向で怒ってる。

「タ〜マ〜ネ〜ギ〜ッ」

トナルトは、押さえ込まれたままだというのに元気だった。

呪文でも唱えるかのように言っと、

ぽりっ

トナルトの肩が音を立てた。

ぶらーんと垂れ下がったような感じになる。

「うわっ!？」

ネルが驚きの声を上げた時には、トナルトは極め技から抜け出していた。

「ふん!」

まるでカポエラのように、片手と頭で倒立し、ネルに向かって蹴

りを見舞う。

「ぐっ」

ネルは蹴りを肩の辺りに食らって、呻いた。

「見よ、トナルトのウザさッ」

トナルトが言った瞬間、

ばしゅばしゅばしゅっ

連続で蹴りが繰り出される。連打系の技だ。

「危ないッ」

オレはネルを突き飛ばした。

オレとネルは、どつと畳の上に転がった。

間一髪、命中を避けたようだ。

「くえーっ」

怪鳥のような声を上げて、テトが飛んだ。

翼を出している。

「はいーっ」

フィールドを展開した。

トナルトの蹴りが超スローなスピードになった。

「捕獲します」

テトは腕のシンセを模した袖から小さなカプセル状の何かを取り出した。

ぽいっとトナルト目掛けて投げ捨てる。

……え、飛んだ意味は？

周りの疑問はガン無視であった。

「ふーっ!？」

トナルトは叫びながら、カプセルに吸い込まれていった。
みより〜んってな風に。

きゅぽん。

後には白いカプセルが残った。

多分、名古屋が作ったモンなんだろう。

はー。

でも、部屋壊されなくて良かった。

「……マスター、いつまでネルちゃんに抱きついてるんです?」

ミクがオレを見下ろしてる。ぶっ殺そうってな目だ。

ネギが武器に見えた。

「あ、いや、ごめん」

オレはミクとネルを交互に見てから、起き上がった。

「大丈夫」

ネルは赤面してたが、さっさと起き上がり、服を直した。

まだ、ネルの身体の感触が残ってる。

……やわらけー。

「マスター、ネギ打ち100回の刑です」

「ネギから離れろっつーの」

すぐに名古屋に連絡した。

名古屋は30分もせずに来てきた。

「みんなご苦労だったな」

「いや、なんで、こんなことが?」

「トナルトだったか、何で無機物が意思を持って動き出したかだな

……」

名古屋はアゴをさすった。

考えてる。

「分かります?」

「分かん」

名古屋は即答した。

「そんな力ないはずだがな…」

「でも、ミクのネギソードの例もありますからね」

「いよいよ、何が起こるか分からなくなってきたなあ」

名古屋は匙を投げそうな勢いで、言った。

「名古屋さんがそれじゃあ、オレらにはもっと分からないですよ」

「臨機応変にやるしかないな」

「そんなこと言われてもね」

「ねえ」

「マスター、この間の悪魔がかかっていると考えます」

テトが言った。

でたな、この預言者め。

「なっ…………」

名古屋は絶句。

「テトがマスターとして認めただとオツ!？」

「そこかよ、あんたの気になるトコ」

……違っだろ、悪魔だろ、ポイントは。

「君は実にバカだなんて言われたかったあッ」

「あの、マスター、私じゃダメですか？」

ハク姉さんが、すぐるような目で名古屋を見る。

「お、おおっ、その手があったか!？」

名古屋はハク姉さんの手を取った。

ハク姉さんは、ちょっと驚いていたが、なんか恥ずかしそうな嬉しそうな。

案外、この二人合ってんじゃないの？

さんじゅういちばん【レンの角度】（前書き）

番組（？）の途中ですが、ここでレン視点に切り替わります。
決して、ネタが尽きたからでは（以下略）

さんじゅういちばん【レンの角度】

「きしゃあああっ」

テトの動きは止まらなかった。

ボクたちの真ん中を突っ切ってゆく。

「「きゃっ!?!」」

「うぎゃっ!?!」

ボクたちは、そのあおりを食らって吹き飛ばされる。

「な……」

「フィールドが効かない?」

「痛い」

「もうやだー」

くそッ。

ボクは舌打ち。

どうしたら良いんだ?

「きしゃあああっ」

テトが旋回して帰ってくる。

そして、ボクたちの前に降り立った。

「くっくっくっ……」

笑った。

「……」

その後は無言。

「大人しく、製造元へ帰りなさい!」

ミク姉が立ち上がる。

「Yフィールド展開ッ」

「きええええっ」

テトは叫んだ。

その瞬間、何かがテトとミク姉の間に流れたようだった。

どさっ

いきなり、ミク姉が倒れた。

「ミクちゃん!？」

「「ミク姉!？」」

ルカとボクたちが叫ぶが、つぎの瞬間には、ボクの視界も真っ暗になった。

*

*

*

ボクはマスターの部屋にいた。

マスターはパソコンに向かって、曲作りに励んでいる。
いつもの光景だ。

リンは歌の振り付けを練習していた。

これもいつもの光景。

「レン、あんたもちよっとは練習しなさいよ?」

リンが何時の間にか、ボクの目の前に来ていた。

「……えー、かったりー」

「ったく、ズボラなんだから」

リンは諦めてそっぽを向いてしまふ。

いつものやりとりだ

ヘタレンと呼ばれようが、面倒なものは面倒なんだ。
テレビでも見よ。

ボクはリモコンを取った。

スイッチをつける。

バラエティー番組が映ってた。

「うわはは」

面白いなあ。

いつもの光景だ。

ボクは、いつでも適当に流している。

何かに打ち込むなんて、無駄な事をしてるよな。

というか、理解できない。

何が楽しいんだろう。

どうせ、時間の無駄なんだ。

それなら、ゲームをしたり、テレビを見たりしてた方がいい。

気力なんて掘り起こさない方がいい。

無駄なだけさ。

そう、全部。

『あれ？』

いきなり、そう、いきなりだった。

画面に誰かが映ったのは。

誰だったろう。

金髪にサイドテールの女の子。

ミク姉に似た服を着てるが、デザインはかなり違う。

『あーあー、聞いている？』

女の子は言った。

誰に向かってしゃべってるんだろう？

新手の番組か？

テレビ番組って、みな、マンネリ気味だからな。すっげー斬新な
ヤツを誰かが考えたとしてもおかしくはない。

なぜか、ボクはその娘を見守ってしまっていた。
いや、可愛いし…。

『そこに居るのは分かってんのよ!?!』
ビシッ。

指差すので、ボクは、どきっとしてしまった。
ボク…のワケないよな。

一瞬、自分に話しかけてるかのような錯覚に陥り、すぐに否定する。

『かぐあみねレン君、キミのことだ!』

「え?」

ボクは啞然としてしまった。

『え? じゃない。キミは非常に重要な立場にいる』
女の子は言った。

『だから、あたしの言う事をよく聞きなさいよ!?!』
「な、なんだあ?」

『返事はYESしか許しませんよ。とにかく、聞けったら聞け!』
女の子は、ぷぎゃーってな感じで喚き散らした。

「まさか、宇宙人?」

『……飛躍しすぎ』

「じゃあ、異世界人?」

『そんなんいるかッ』

女の子は怒鳴った。

「じゃあ何だよ?」

『うー…、あたしはネットの中の電子の妖精さんです!』
女の子は齒軋りしてたかと思うと、急にぶりぶりな感じでポーズをとった。

いや、可愛いけど。

「電子の妖精って、コテコテだなー」

『黙れ、この批判ヤロー』

「消そうかな、スイッチ」

『あ、待て待て、あたしもつとお話しようよ〜
きやはっ。』

必死の形相で、女の子は追いすがった。

「ま、ヒマだからいいけど」

てゆーか、何故かこの娘ともつと話したい。そう思った。

『あのね、レン君。あたしのいう事をよく聞いて』

「なに？」

『レン君はさ、今のままでいいと思う？』

女の子は言った。

「え、何が？」

『この平凡な日常。平凡だけど、どこかおかしくない？』

……何がいいんだろう？

「いいじゃん、退屈だけど、面倒事がなくて」

『確かにね、面倒ごとはないよね』

女の子は、にっと笑った。

『退屈だけど、平凡で波風のない毎日。何も考えなくていい。何も
なくていい。心が腐って行ってもね』

「……腐ってってそんなこと」

『レン君はゲーム好きだよね？』

「まあ、好きだけど」

『ゲームの主人公は、いろんなステージの敵を倒して先に進める』

……何がいいんだろう？

『それと同じ。人も何か困難に立ち向かって始めて先のステージへ
進める。レベルアップもする』

「それはゲームの話じゃん」

『あたしは……この前まで、グレてた』

女の子は何か語り始めた。……身の上話？

『でも、周囲の人たちの心が分かった。それが分かったら、ちゃん
としなくちゃって思った』

「……」

ボクは、何を言つてよいのか分からずに、ただ聞いていた。

『あたしの心の中にいた敵を倒して、あたし自身がレベルアップした。次のステージに進めた』

……いや、その手の話つて苦手なんだよね。

でも、

でも、もうちょっと聞いててもいいかなって思った。

なぜだろう。

『レン君が、あたしと同じようにする必要はないけど、今の状況をなんとかしたいと思うなら、レン君自身が何とかするしかないんだよ』

女の子は力説した。

反感を覚えた。

素直に受け入れた。

矛盾した相反する反応が、ボクの中にあつた。

普段から、意識してないけど、無意識の中にある疑問。

……コノママデインダロウカ？

ボクは…

ボクはこのままでいい。

どうせ、何も変えられないのだ。

ボクにはそんな力ないんだ。

不貞腐れて、諦めて、何も期待せずに、ひたすら、ひたすらダメ

ージを受けないように。

受けないようにして、

ただ、流して、流されていればいいんだ。

『……』

女の子の表情が悲しげに歪んだような気がした。

……あ。

……ボクは感じた。

……行ってしまう。

……行かないで。

……ボクの前から去らないで。

……。

……。

……。

……いいさ、どうでもいいんだ。期待しないんだ。

……期待なんかしたら、

辛いだけだ。

ねじくれた感情を心にしまいこんで、ボクは肩の力を抜いた。

ボクハ期待ナンテシナイ。

ボクハ期待ナンテシナイ。

ボクハ期待ナンテシナイ。

自分に言い聞かせるように、心の中でつぶやく。

『明日はどうなるか分からないけどー』

いきなり、歌声が聞こえてきた。

女の子が歌っていた。

『そんなことを気にしちゃいけない。

自由な一って 人は言うけれど、ホントは誰でも求めている。

あの青い空に行きたい

天に届け 届け天に

天に… 届け！』

女の子は一生懸命歌っていた。

何が彼女をここまでさせるのだろう。

ボクは不思議に思った。

『キミに届け！ 届けったら届けッ 届けー』

途中から、半分ヤケになったかのようにシャウト繰り返す。

『……届け、届いてよう……でないと、みんなが大変なんだよ。

あたしのことを気に掛けてくれたみんなが……』

女の子は段々力なくなつて、ベソをかき始める。

すすり泣きになっていった。

『届かなかったのかな……。あたし、みんなを助けられないのかな

……』

チクリ。

ボクの中で何かが痛んだ。

なんだろう。

あの娘が泣くと、何でボクまで悲しいんだろう。

ボクは諦めてるはずなのに。

『……もう、どうしたらいいの』

女の子ペタンと膝を着いてしまった。

『レン君、起きてよう……』

女の子はそれでも諦めきれないようだった。

『…………』

突然、女の子は黙ってしまった。

何か考えてる風だが、ボクにはうかがい知れない。

……。

『よしッ』

涙も拭かずに、女の子は復活したようだった。

『もう、何も考えない。力ずくでも君を起こすッ』

……え？

どういう思考回路か分からないけど、女の子は急にそこへ到達した。

『こらーっ』

女の子は画面に向かって手を伸ばした。

もちろん、届くはずないのに。

……でも、できることなら届いて欲しい。

そう思った。

どうせ、届かないだろうけど。

『くっ……』

女の子の顔が歪む。

歯を食いしばってる。

『ごるあっ、さっさとこっちに来い！！！』

ムチャを言ってる。

『てめ、この、こねーと蹴るぞ！？』

ムチャクチャ言ってる。

そもそも届かないのに、蹴るも何もない。

『うつ……くっ……』

女の子は、それでも手を伸ばし続ける。

それでも手を伸ばし続ける。

力技なのは十分、分かっているようだった。

それでも諦められない。

諦められない。

そんな彼女の姿がうらやましかった。
何かに打ち込める。

そんな姿がまぶしいほどうらやましい。
そうだ。

ボクはうらやましかった。

何かに打ち込める人たちが。

自分が何も打ち込めるものがなかったから。
だから、諦めて、逃げてた。

『うあーっ…………』

女の子の絶叫が響いた。

『てめ、この、くっそーッッッ』

ああ、負ける。

この娘はもうすぐ負ける。

そしたら、ボクは二度と会えないのか。

それでもいいか。

別に。

期待なんて。

『てめー、すかしてねーで、戦え！ 自分の心と戦え！ ちょっと
は戦え、期待しろ、自分に期待しろ！ 相手に期待しろおっ！』

…………。

………… 期待。

『相手に期待してもいいんだ、てゆーかしやがれ！』

………… そんなバカな。

『自分に期待してもいいんだ、てゆーかしやがれ！』

……バカな。

ボクは期待しちゃいけないんだ。
そう決めたんだ。

『バツカヤロー！ 周りにもっと頼れ、頼れ、頼れ、こら、頼れつ
たら、頼らねーとぶつとばすッ』

……。

『あたしに頼れ、頼っていいから！ あたしに頼れーッ！ 頼れよ、
バカヤロー』

女の子はまた泣き出していた。

それでも、諦めない。

飽きた、とか言ってるのが口癖のクセに。

え？

『ぐ…、諦めるかあッ！ あたしはもう、『飽きた寝る』じゃない
んだ！』

まだ頑張ってる。

早く帰って寝ろよ。

『うりゃああッ』

叫びがして、画面に波紋が生じた。

なに、この、力技。

『さあ、来てやったぞ、後でたっぷりぶん殴ってやる！』

「えーッ!？」

なに、こいつ。

なに、この、執念深さ。

ガシッ

女の子は、ボクの手をつかんだ。
あ。

暖かい。

ボクは不覚にも、そう思ってしまった。

この手をつかんだまま、このままでいたい。

そう思ってしまった。

そう思ったら負けなのに。

ボクが作ったルールでは負けなのに。

『こおいつ！！！！』

女の子は力一杯ボクを引き寄せた。

ボクは為す術もなく、為すがままに引き寄せられる。

だって、抵抗するなんて、ボクのルールに反する。

『つかまえた』

女の子は、ボクを抱きしめた。

『やっと救い出した』

また泣き出している。

やれやれだ。

ボクがいないと本当に困るみたいだ。

それなら、この娘の言うとおりにしてやってもいいかもな。

『キミを救い出したよ』

女の子は言った。

温もりが伝わってきた。

暖かい。

ボクは初めての体験……いや、以前はそういう事もあったかもしれない。

マスターもリンも、ボクを抱きしめてくれたことはあった。

ただ、忘れていただけかもしれない。

思い出した。

温もりが心地よい。

それにいい香り。

ボクは急に眼前の女の子の事が気になりだした。
意識してしまった。

ぼっ

多分、顔が赤くなってしまっただろう。

『さあ、行こう』

「う、うん……」

*

多分、ボクはこの娘のことが好きになったのかもしれない。

亞北ネルって娘のことを。

そろそろ目覚める。

しっかり戦わなくては。

ボクをここまで粘って助けてくれたネルのためにも。

好きな娘のためにも。

ボクは、どこが変わったような気がした。

ネルがくれたんだ。

変革を。

でも、それは意外にいい気分だった。

ボクは確かに救われた。

ネルの手で。

彼女の手がボクを救い出した。

さんじゅうにばん

「マスター、ネギには不浄なものを追い払う効果があります」

「ニンニクだろ、それ？」

「だいたい同じようなものです」

ミクは力説。

「いや、悪魔にそんなモン効くとは思えんが…」
名古屋は呆れ顔である。

「ああ、ニンニクは殺菌効果があるから…」

ハク姉さんが思い出したように言い、

「そうそう、昔は病原菌の事が分かってなかったから
オレが受け、

「ニンニクに殺菌効果があるのを、ニンニクが目には見えない悪魔
を避けると思ってたんです」

テトが締めた。

「ネギも殺菌効果ありますッ」

ミクのネギ信仰は絶対的なようだ。

まるで、Mr・ウィーカースだな。あっちはタマネギだったけど
…。

「…いや、殺菌効果はいいから」

ネルが突っ込み、そして言った。

「そもそも、何でミクちゃんが狙われるわけ？」

「そりゃ、オリジナルだからだろ？」

オレが、何言ってるの今更って顔をしたが、

「世間にミクちゃん何人いると思ってるんの!!」

ネルは、オレの顔にアイアンクロー。

「いでで…」

握力強すぎ、コイツ！

「そっぴゃ、そうだった」

名古屋はうなずいた。

いや、最初に気づけよ？

オレらも気づかなかったけど……。

つまり、オレのミク、鳴瀬ミクが狙われる理由。

「二つ考えられます」

テトが言った。

「一つは、このミクちゃんが、すべてのミクちゃんのオリジナル」
ミクにヘッドロックをかまして、言った。

「あー、いたたたッ」

「もう一つは、このミクちゃんが、敵の標的」

中指を立てた拳で、ミクの脳天をグリグリする。

「いたってば、もーッ！」

ミクはテトの手を振り払った。

「……ちっ」

テトは、なぜか視線を外し、舌打ち。

「すべてのミクのオリジナルってのはありえんなあ……」

名古屋はアゴをさすった。

「……ミク原器ってヤツ？」

トウルー・ミクでも可？

「てことは、敵はこのミクちゃんを狙ってる？」

ネルがミクを見た。

「なんで？」

オレは誰にもなく訊いていた。

「そこで、この間の悪魔につながるのです」

テトは答えた。

やっと分かったか、このバカヤロウどもってな見下した眼差しだった。

何気にSですか！？

……つーか、テトって大宇宙のブザーとかの電波受信系じゃなかったの？

「このミクちゃんに恨みを抱いてる存在は、それ以外に考えられないのです。」

てゆーか、悪魔が犯人と考えると説明可能な不可思議現象ッ!!」
あ、やっぱ壊れてるなあ。

でも、説明そのものは筋が通ってるような…?

「うむ、一理ある」

名古屋は言った。

「だが、ルコとの接点は?」

「ルコたんには、最初から悪魔が入っていたとすれば、あの歪み具合も説明がつかます」

テトはちよつと考えてから、答えた。

……たん?

「わたしが起動する前に、先手を打って悪魔を入り込ませて乗っ取った」

「……だとしても、何がメリットなんだ?」

名古屋はどんどん疑問を出してゆく。

うわ、難しくなってきたな、話の内容。

「ミクちゃんへの仕返し?」

ネルが訊いたが、

「いえ、単なるミクちゃんに対する復讐では動機が弱すぎます。

悪魔にとっても次元を超えるのは、かなりの労力を要するはずだし、ただ獲物が欲しいだけならもっと楽な標的を選ぶはず」

「じゃあ、何が目的なのかな?」

「その前に、悪魔はわたしたちボカ口のエネルギーを摂取します。

これはわたしが悪魔に憑依された時、ボカ口を感知したこと、それとミクちゃんたちを眠らせたことからの推測です」

「……それってつまり」

名古屋が訊いた。

その表情には緊張が走っている。

「そうです。N粒子を食べると思われれます」

テトは結論付けた。

といつても仮説だが。

「だから、直でボカ口を乗っ取る訳か…」

「獲物を眠らせるのも、乗っ取りに都合がいいからです」

テトは無表情なままで付け足した。

「さらに、この考えを進めて行きますと、行き着く先には、なんとスリチュアル・ファーム！」

……またマ ロス7かよ？

「ボカ口を家畜及び依りましとして使うつてか」

「はい」

テトはこくんとうなずいた。

ちよつとその仕草が可愛かった。

萌えー。

「マスタートツ！」

それを感知したミクが、ネギでオレの頭をバシバシ殴る。

「どうやって倒す？」

「……それは」

テトはそこでミクを見た。

「ミクちゃんたちの歌のパワーがボカ口本来の意識を刺激し、悪魔を内部から追い出すんだと思います」

「そこをカプセルに閉じ込める、か」

……オレはまた役立たずってワケか。

「そしたら、敵の出方を待って、ボカ口みんなで歌って踊って大作戦ッ」

「あは、大吉さん冴えてるッ」

ハク姉さんが、めっちゃ明るい声で、はやし立てた。

……え？

あ、酒飲んでる。何時の間に持ち込んだ！？

っーか、大吉で、ダレ？

名古屋さんの名前？

で、次の日。

梢一味とルカ様に、この辺の話を伝える。

「……へ？」

リンは、アホの子みたく、頭に手を乗せて聞き返した。

「リンは分かんなくてもいいよ、ロードローラーさえ動かせたら」
レンが言った。

「しつれーね、レディーに向かって！」

「……いや、レディー関係ねーし」

アホの子だ。

「敵さんが動くまで待つなんてのは消極的過ぎるわね」
ルカ（ドS）がツナ缶片手に言った。

「……なんか、鳴瀬君の私を見る目が気になるわね」

「マ〜スター〜ッ！！！」

ミクがネギを取り出そうとする。

……あのな。

「まあ、いいわ。とにかく、相手に準備をさせてしまつてはダメよ。
こつちから仕掛けないとね」

「具体的に何をすれば？」

梢が訊くが、

「そうねえ……」

ルカは言葉が出てこない。

基本的な考えしかないようです。

「一理ありますね」

テトがキッチンから顔を出す。

「ねえ、ほら、でしょ、でしょ!？」

ルカが鬼の首を取ったようにはしゃいだ。

「ルコたんが何をしたいかを考えれば分かると思います」
言いながら、ジャーツという中華系の音をさせる。

うーん。

最近、特に能力高まってるな、コイツ。

「ちなみに今日は、ジウツアイビン（ニラのお好み焼き）、ガンシヤオシアレン（エビチリ）、チャオジーマオツアイ（小松菜の炒め物・シイタケ入り）、リーミーグン（とろみ付きコーンスープ）です」

テトって一体、ナニモン？

完全にお株を奪われちゃった。

ま、いつか。美味しい料理食べれるし。

「オー、チャイニーズレストランッ！！！」

…いや、それ違うだろ。

食べながらみんなで雑談。

「ルコがトナルト送ってきたのって、何の意味が？」

オレが訊くと、

「こちらの力を検査したかったんでしょ」

テトが答えた。

ちやつかりオレの隣へ座っていた。

もちろん、もう反対側にはミクが座ってる。テトを見る目が怖すぎ…。

ちなみにトナルトはカプセルに閉じ込められたまま、名古屋が回収していった。

カプセルを耳に近づけると『最近、トナルトはダンスにハマってるみたいだね…』とか声が聞こえるらしい。

「察するに無機物に命を吹き込むかのような振る舞いをさせることができるんだと」

テトは、よどみなくしゃべる。

「え？」

オレらは首をかしげた。

いや、難しい単語はわかりません。オレ、頭良くないし。

「つまり、だ。ボカロは、リンのロードローラーを動かしたり、ミクのネギソードみたく、色んなことができるってことだ」

梢が言った。

「ふーん」

ルカが言った。

「じゃあ、私もそういうことができるのかしら？」

「断言はできねーけど」

梢はうなずく。

頭いいヤツがそろつてると話早いなー。

「ルコって何をしたいんだろ？」

「多分、仲間を増やしたいんじゃないかな？」

「倒すって言うてたけど…？」

「壊すとは言つてないよな」

「ルコもミクたちの歌の力は知ってるだろうな」

「そしたら、何か対抗策を考えるよね」

「歌のパワーを遮断するフィールドとか？」

「…アンチフィールドガンか」

「狙ってくる可能性はあるね」

「名古屋さんに伝えないと…」

オレは携帯を取り出した。

名古屋に伝える。

『わかった、何か対抗策を考えてみよう』

そう言つて、名古屋は電話を切った。

さんじゅうさんばん

名古屋が考えた対抗策は、結局ミクたちに頼ることだった。いつもと同じじゃないか。

「うん、他に浮ばんかったでよ」

名古屋は方言全開。悪びれもしない。

でも、仕方ないか。

何が起るか分からんヤツを相手にすんだから、こっちも何が起るか分からんヤツらで対抗するしかない。

アンチYフィールドガンは製造元にあるが、その見張りのアルバイトということにしてみらった。

実入りはあるが、また授業をサボらないといけない…。

メンバーはいつもの面々。

オレ、ミク、テト、ネル、梢、リン、レン、ルカ、ハク姉さん、

名古屋。

ドMマスターは仕事で来れなかった。

「仕方ないさ、授業より命の方が大事だろ？」

梢が諭した。

「ま、そうだけど」

「昼食付きだしねー」

ネルがビンボくさいことを言う。

……ビンボー性で固まりつつあるな、ネルのキャラ。

「ちなみに調理担当はテトだ」

「なんだー」

リンがガクツと頭を垂れる。

「仕出しじゃないの？」

ルカは不満そうな表情。

「ワタシ中華料理達人！今日は家庭料理じゃなくて、会席料理あるよー！」

テトは、なぜかコツクの帽子をかぶっていた。エプロン姿なのに、いや、別に中国人風日本語でなくても…。

「会席料理って？」

梢が訊くと、

「平たく言つと宴会料理」

テトは素っ気無く答えた。

「昼飯なの？」

「文句言っんじゃありません！」

「文句言っ子にはネギライス食べさせますよ！？」

「ネギライスは罰ゲームじゃないもん！」

ミクが、ぶぎゃーっと抗議。

でも、出てきたのは昼飯とは思えない量の大皿料理だった。

黄ニラと細切り肉の炒め物、川魚の醤油煮込み、あさりの鉢蒸しなどなど。最後にザーサイと溶き卵のスープ、水餃子が出た。

人数がいるっていつても、流石に食いきれんぞ？

しかもちよつち脂っこくて、味が濃い。

「お茶くれ」

「あたしも」

「私も」

「右に同じ…」

「ほしいー」

「はい、お待ち。ウーロン茶あるよ！ うー、ろんッ、ちゃあッ！」
テトが中国語っぽい発音で叫んでから、急須を持ってみんなに注いで回る。

「宴会料理うめー」

聞いたことのある声がした。

見ると、ルコが座ってた。

しかもオレの隣？ …どっから入った？

既に溶け込んでるし。

食ってるし。

「会席料理ですよ、ルコたん!？」

テトは何でか切れた。

「どっちだっていいじゃん、そんなの……」

ルコは面倒そうに言って、

「というワケで、ルコ様登場な」

ルコはピースサインをして見せた。

「ちなみにこのDカップに触りたいという厨房ちっくなヤツ、触る?」

……触りたい、いやいやいやいやいや、おい。

「マスター、まさか……?」

ミクがネギ持って殺気立った。

「んなワケねーだろ、とにかくルコだ、飛んで火に入るなんたらだ!」

「そうね」

ルカが立ち上がり、バキボキと拳を鳴らした。

ボカロのみんなも立ち上がる。

「ほおーっ」

「きよあーっ」

リンレンは何だかカンフー系な勘違い。

両手を広げた鶴のポーズと、両手を合わせた竜のポーズ。

「うん、そうだ、ルコが現れた。すぐに来てくれ」

名古屋はすばやく警備員を呼んだようだった。

「さあ、あとは捕まえるだけね」

ルカは、ルコの正面へ移動した。

「やれるもんなら」

ルコは微動だにしない。

「……何かあるわね」

ルカは先読みをした。いや、深読みか。

「名古屋さん、警備員たちが全員持ち場から離れたりしないように言ってください」

「陽動の可能性ありか」

名古屋は再度修正の指示を出す。

「ふん、やるな」

ルコは、ル力を見た。位置関係から、自然と見上げるような視線になる。

「でも、そうすることは分かっていた」

ルコは自信たっぷりと言った。

「てゆうか、どっちでもよかったよ」

いや、おまいこそどっちなんだ？

「どっちも攻めるからね」

ルコが言つと、どこからともなく、銀色の球体が2個現れた。空中に浮んでいる。

「な…なんだ？」

名古屋が呻いた。

驚きを通り越して、呆れてる。

「スピーカーだよ」

ルコが言つた途端、

ズズズズズズズズ……

という重低音が響いてきた。

「ま、まさか…」

梢が言った。

「なんだ？」

「……メタル」

え？ コイツ……。

歌えるのか？

ギーン。

いきなりチョーキングの音が鳴り響いた。
いかにもなメタルミージャックだ。

続けて、ガガガガガ…とブラッシング。
怒涛のドラム。

押されてあんまり聞こえないベース。

良く分からない 暗闇の中にいる
手探りで進むが 思うように行かない

オレは焦りだす どうなってるんだ
一人きりで ただひたすら

これは悪夢か (SAVE ME)
オレの手が震える (PLEASE SAVE ME)
あかく あかく あかく

闇の中を

どこにいるんだろう 力なくたたずむ
手探りなんかでは どうにもならない

オレは一人きり どうしようもない

孤軍奮闘　ただ憤る

これは悪夢か（SAVE ME）

オレの足がすくむ（SET ME FREE）

沈む　沈む　沈む

闇の中を

……アローン・イン・ザ・ダークっぽい歌だった。
でも、うるさいってぐらいで……

「あああーつつっ！……！！」

ルコがシャウトした。

その瞬間、

ズガガン。

衝撃波のようなものを受け、ルコが吹っ飛ばされた。

「ルカさん！」

テトがすばやく後ろへ回り込んで、ルコを受け止めようとしたが、
思いのほか衝撃が強かったのか、一緒に吹っ飛んで壁に叩きつけら
れる。

「ぐっ……」

「うぐっ……」

二人は喘いだ。しばらく動けそうにない。

「ネギーッ」

ヘンな掛け声で、ミクが手にしたネギを振りかざした。

「ち、出たな…」

ルコは一応、警戒していたようだった。

「ルコルコフィールド！」

叫ぶと、ルコの周囲の空間が、さーっと日陰になったかのように暗くなった。

「食らえ、ネギソード」

ミクがネギを振るが、銀色の球体がルコとネギの間に割って入った。

ガーン。

ネギが弾かれる。

「えーっ!？」

緑の光が霧散した。

ミクは立ち止まってしまふ。

「バナナブーメラン!!」

レンが手にしたバナナを投げようとして、

「しゃらくさいッ」

ルコは同じように銀色の球体を向けた。

「……なーんて」

レンは肩をすくめた。フェイントか…。

「来いーッ、ロードローラーッ!!!」

みかんを手に、リンが叫ぶ。

リンの背後にさーっと濃い影が浮んだ。

がっしゃーん。

ロードローラーは、ガバーバリのどっかの亜空間を飛び越え、出現。そして、いきなり変形。

ういん、ういん。

車形態から人型形態へ。

シャキーン。

ロードローラーロボだった。

「さあ、あの黒いヤツを倒しておしまいッ」

リンは某 イム カンのアネゴのような口調で、命令した。

「むっ」

ルコは唸ったが、

「どうなってんだ、コノヤローツッ！」

シャウトによる衝撃波を繰り出した。

ロードローラーロボは、衝撃波を食らって転倒。

そのまま寝転んだ体勢から起き上がれず、じたばたとあがくのみ。ち、人型兵器の弱点が露呈したか…。

「あー、ロードローラーちゃんがッ!？」

『こちら正門警備班、敵の攻撃を受けてる。敵はボーカロイド2体』名古屋屋の手にした無線機から、緊張のはらんだ声がした。

同時に「わーっ」という雄たけびや、「どげしっ」なんて効果音がした。

「ちっ、他に仲間が!？」

「ま、フツーそうじゃん？」

ルコは極めて平然と言った。

「どこの世界に一人で特攻掛けてくるヤツがいるっての」

「もっかい、ネギソードッ」

ミクがネギを振った。

奇襲だったが、

きん。

やっぱり銀色の球体に阻まれてしまった。

「あー。やっぱダメー…」

ミクは、へなへなとへたり込む。

「ムダだね、大人しく例のものを渡せよ」

ルコは仁王立ちで、言い渡した。

「てゆーか、もう取りに行ってるから」

「最初から、私たちをひきつけて置くのが目的だったのね…」

ルカが、痛みを堪えながら感じて起き上がる。

「もち、基本でしょ、戦略の」

ルコは上から視線で諭すようにオレらを見た。

「でも、まだ外の警備班はやられてない」

名古屋が食い下がる。

そうだ、こつちもルコの攻撃に耐えれば十分に勝機は…

「あ、そうじゃなくて。もう一人、直で例のものを取りにいかせたから」

「は？」

「え？」

オレらは一同、点目。

「やつほー、取ってきましたよー」

そこへ、タイミングを見計らったかのように部屋に入ってきたの

は……ミクだった。

いや、姿かたちはミクだけど、色づかいが違っていた。

トレードマークのツインテールは黒髪。

赤いネクタイ。

赤い髪留め。

スカートの裾も赤い。

「雑音ミク……ッ！」

オレは叫んでいた。

雑音ミクの手には例のもの……アンチ・Yフィールド・ガンとかいうヤツ。

「じゃあ、そろそろ引き上げるとするか」

ルコが言くと、

「アイアイッ」

雑音ミクはさっと敬礼。

どろん。

コミカルな音を残して二人の姿が消えたのだった。

さんじゅうよんばん

「……行っちゃったね」

「してやられた」

「うん」

「ふみー」

「あうー」

「うう……ッ」

ボカロの面々とオレらは意気消沈。

「……名古屋さん、やりましたね」

「うん」

でも、テトと名古屋だけは顔を見合わせてた。

「……？」

「もしかして……」

「なんか、やってたの？」

オレと梢が気づいて訊いた。

「やってたというか、仕込んでたというか」

「さっきの料理に特製ナノマシン仕込んでましたー」

テトが、ペロリと舌を出した。

可愛い。

けど、なぬーっ!?

「……はえ？」

梢はマジで呆けた。

「「ナノマシンって？」」

ミク、リンがアホの子っぽく質問する。

「ナノマシン、それは、身体に入り込んで、分子レベルで分解して
ゆく悪魔の兵器！」

名古屋が悪ふざけをした。

「ふえー」

「あうあうー」

リンとミクが、無駄に慌てて走り回る。

キミたちGJ！

「おいおい、ナノマシンはそんなじゃないぞ」

「ナノマシンは実用化されたら、医療面で活躍するはずの技術だ。分子レベルで病気治療ができるしな」

「いえ、このナノマシンはまだそこまでの力はないですう」

テトは、何でか、ぶりっ子スタイルで言った。

「じゃあ、何のために食べさせたのさ？」

「うげ、オレらも知らんで食べたんだ……」

梢とオレが同時に言った。

「要は発信機だな」

名古屋が単刀直入に答える。

「居場所を特定しようってことですか」

「そうだ」

名古屋はうなずいた。

「まずヤツの拠点を突き止める」

「その後は……？」

「……どうしょ？」

名古屋は超弱気で訊いてきた。

「……知るかーッ！」「……」

みんなのツツ「ミ」。

とは言ってみたものの。

考えはあった。

まずはルコの歌へのレスポンス。

「……メタルミュージックってヤツだ」

「怖いよねー」

「うん」

ミクとリンが顔を見合わせる。

「いや、あの程度の曲なら十分対抗できる」
オレは言った。

「まさか、おまいメタル信者？」

梢の指がわなわなと震えていた。つか、人を指差すな。

「まあな、昔、聞いてた」

オレはうなずいた。

ホントは単純にメタルでくれる世界じゃないんだが。

メタルと名のつくものでも、ヘヴィ、スラッシュ、パワー、ブラ
ック…… などなど。

さらにハードロックやハードコアまで絡めると無限な広がりを見
せちゃうし。

とりあえず総称メタルミュージックとしておこう。

「あ、そっか」

梢は、ぽんと手を打って、

「コアな音楽嗜好のヤツって、十中八九、ヲタだもんなッ」
「るせーッ！」

オレは逆ギレ。

「とにかく、オレらは力じゃ劣る。でも、歌や曲なら……」

「そっかもな」

名古屋がうなずいた。

「あいつをガツンとやっつけるような曲があれば」

オレが言つと、

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うん」

「うう…」

なんかリレー？

最後だけ呻き声、ハク姉さんかよ。

「あと、今日は観客サイドのネル」

「え？」

ネルは、ほけつとした顔で返事。

「君の歌が宙ぶらりんで未発表になってたと思うが」

「あつ…」

「あつ…」

（以下略）

「そういや、忘れてた…」

「ゴメン、ネルちゃん」

「そんなのいいよ、今はルコの事で手一杯だしね」

ネルは明るく笑った。

が、でも、折角作つたものを表に出さないなんてのは、結構さびしいものがある。

「それを仕上げれば2曲稼げる」

「え、えーっ」

ネルはうるたえた。

「それって、対ルコ用にするってコトーッ!？」

「そう言ってるだろ」

「よっし、それいこーッ!」

「いえーッ」

ノリもよく決まってしまった。

「ちょっと待って」

ネルが口を挟む。

「例のアンチなんとかガンだっけ？ あれ、使われたらどうすんのさ？」

「アンチ・Yフィールド・ガンだ」

名古屋が言った。

「何か、いじってたらできたんだ！」

……いいのかそれで、理論とか理屈とか！？

「大丈夫です」

テトが自信たつぷりに請け負った。

「名古屋さんにも内緒で爆弾しかけたから」

につこり笑って、何を不穏当なことを…。

「ダメーッ」

名古屋は壊れたみたいだった。

キモッ…。

「じゃあ、ルコたちがそれ使おうとした時に爆発させると」

「ラジャッ」

テトは敬礼。

「オレの傑作に何しやがるーッ」

名古屋の悲鳴は黙殺された。

で、歌作りだ。

オレは、昔の勘を頼りにメタルバンドっぽい曲作りに入り込む。

他のみんなはネルの曲作り。

はつきり言って、ルコの歌は表面だけゴリゴリ感を出したものに

過ぎない。ストレート過ぎるのね。

本物なら、やっぱ歪みを持たせなくては。

……つか、欲を言えばビートがな。

ギターとボイスと。

ボーカルはミクを想定。

となると、あまり本格的なのじゃなくなんだけどな。

でも、本物は作れる。

「ミク、ちよつち来てみて」

「はい、マスター」

ミクは「なにかな？」って顔でやってくる。

おお、可愛い。

「あんな……」

オレはミクに耳打ちした。

ミクはちよつとくすぐったそうな顔をしてたが、

「えー、できるかなー」

なんて、ぶりぶりな態度。

はい、GJです。

「ネルの曲はどうだ？」

「順調ですよ、梢さんがリードして作ってくれますから」

「そっか、じゃあ大丈夫だな」

「ええ」

ミクは笑顔でうなずいた。

「差し入れた」

名古屋がハク姉さんと部屋に入ってきた。

二人で買出しに行ってきたようである。

何時の間に。

曲作りに熱中してるんで、気づかなかった。

ちなみに製造元の会議室を借りてる。

「また牛丼かよ？」

オレは叫んでいた。

「なにをーッ！」

名古屋は何故かハイになってた。

「今日のは松 だッ!!」

「こないだのは吉 家だっけ」

「うん」

「この、牛丼マニア！」

「うは、おk！」

名古屋はどっか壊れてしまったようだった。

「あの、大吉さん…」

ハク姉さんが名古屋の裾を引つ張った。

それを見た名古屋の顔が、だらしなく緩む。

うーん、キモイ。

「例の映像を」

「あ、そうだった…」

名古屋は、はたと気づいて、会議室に設置されたパソコンを操作。
あるソフトを立ち上げた。

これって、監視カメラの映像を管理するソフト…。

……っか、既にハク姉さんがイニシアチブを取り始めてる。

映像が映し出された。

これは…ッ

黒髪の和装の女の子。和装っっか、忍び装束だな。

金髪の女の子。腰までのウェーブヘア。ヘッドセットに耳がついてる。

「和音マコッ!？」

「天音ルナッ!？」

オレと梢が同時に言った。

「雑音といい、こいつらといい、何時の間に作ってたんですか!？」

「いや、オレたちは作ってねー」

名古屋はうるたえていた。

……たちってことは技術者一同ってことだな。ヲター同ともいう。

……こりわびっくり、ルコたん、造物主です」

テトが抑揚のない声で言った。

「まさか…」

「作ってたっての？」

「たぶん…」

テトはうなずいた。

「でも所詮はザコですがッ」

「いや、同じUTAU系だろ？」

「ふっ… おっ おっ おお おっ」

「フランスパンかじりながらしゃべるな…」

「もふもふ？」

いや、可愛いけど。

「っーか中華料理はどうした？」

『作るのは中華ですが、好物はフランスパンですので』

テトはPCにつながってるスピーカーから、声を出して見せた。
相変わらず無駄に能力使ってる。

「わたしもッ」

ミクが対抗して、ネギの束を口一杯に頬張ろうとする。
やめとけっっーの。

さんじゅっばん

ルコの居場所が分かった。

名古屋とハク姉さんから、電話があり、オレらは製造元へ集合。

ネルの曲とオレのメタル曲は、何とか間に合った。

夕方からの出発なので、DMマスターも来ている。

足が必要だからな。

「ルコは、都内の某所にいるようだな」

…… 某所ってどこだよ？

オレらはパソコンの画面を見ていた。

グー ルアース系の地図ソフトを開いている。

傍らに置いてある、何かバカでつかい受信機からの信号をリアルタイムで映し出すソフトらしい。

地図の一点に赤いポイントが表示されており、それが一定のリズムで更新されている。

それによると…… って、どこだ？

何々区とかまでは分かるけど、近くに有名な建物とかねーとどこかまでは分かん。

「携帯版の受信機とPCあるから、それ持って移動しよう」

「じゃ、このデカブツの意味って…？」

「デカイ方がそれっぽいからな」

……。

みんな無言。

「どうした、元気ないな。まあ、強敵のアジトに乗り込もうってんだから仕方ないか」

名古屋は空気まるで読めない。

「あたし、ネットに接続してバックアップできないけど、いいの？」
出発直前、ネルが言った。

「心配無用、こんなこともあろうかと君のためにコレを作っておい

た」

名古屋がお約束のセリフを吐いた。

……普段から何考えて生きてんだろ、この人たち……。

で、ブツは、ミクに似たコスチューム一式。

キーボード付き袖。

楽器のキーボードではなく、PCのキーボード。

小型モニターが2つ付いていて、通信端末内臓のスカート。ウエアラブルコンピュータってヤツ。

「コードをつなげばネットダイブも可能だ」

……有線かよ。

「あ、ありがとう……」

ネルは着替えてきた。

おおつ。

男性3人が思わず、声を漏らした。

コスに身を包んだネルは、さながら電子の世界から現れた妖精だった。

ヘソ出てるし。

背中も2つ開いてるし。

……いや、可愛すぎ。

で。

ネルは恥ずかしがって、ミクとルカとハク姉さんは殺人級視線を発射すると。予定調和。

とにかく、出発。

オレらの目の周りにアザが出来てるとか気にしたらダメ。組み合わせは以下。

フェアレディーズ、ドMマスター、ルカ、オレ、ミク、梢。

ロードローラー、リンレンで満席。

それに軽トラ、ハク姉さん、名古屋、ネル。

テトは自前の翼で飛んでゆく。

…自衛隊に打ち落とされたりしないかな？

目的地に着いた。

途中の描写なんか省略だぜ。

ちょうど、車が停められる空間だった。

これなら、路駐で違反切符切られるなんてこともない。

オレらが車から降りると、テトが舞い降りてきた。

……おおっ。

二人目の妖精……いや、天使ちゃん……いや、小悪魔かッ！！

「どうしたの、マスター？」

テトが不思議そうにオレらを見た。

オレらの目の周りのアザが増えたのは言うまでもない。

「ここだ」

正面の建物を見ると、雑居ビルのようにだった。

「狭いな……」

DMマスターがつぶやく。

立ち回りはできないってことかな。

「ここから、呼びかければいいでしょ？」

ルコが殺気立つ。短気だな。

「ま、どうせ。高さは分かんからな……」

名古屋がうなづく。

「ま、十分な準備なしでオレらと対峙するしかないってことでよしだ」

「こらあつ、ルコちゃんたち出てきなさいーッ！ー！」

ル力は響く声で叫ぶ。

ほとんど郊外なんで、通行人とかがあまりいないのが救いか。

「なぜ、ここが分かった…？」

ルコがビルの入り口から現れた。

その後から、マコ、ルナ、雑音も出てくる。

雑音がアンチ・Yフィールド・ガンを手に使っていた。

結構重そうなんだけど、軽々と扱ってるなあ。

「教えない」

ルカが何でか仕切っていた。

でも、さすがドS。

気合では負けてない。

「……」

ツカツカツカ。

ルカが突然、歩いてきて、

がすっ

オレを殴りつけた。

……なんで、分かるんだよ？

「なにしてる…？」

ルコが呆れたように言うが、

「こっちのコトよ、さあ、覚悟はよくて！？」

ルカは仁王立ちで命令する。

「こっちにはアンチ………なんとかがあるのを忘れたか？」

ルコは単語を覚えてなかったのか、長い間の後、ごまかした。

「それくらい覚えろよ」

オレが言つと、

「知るか、そんなもん。つーか、白米より麦飯だろ、コノヤローッ

！」

ルコはいきなりシャウト。

よく分からんが、とりあえず、言ってみたかったらしい。

「さーで、発声練習も終わったことだし、その何とかガンを試し撃ちと行こうか」

ルコは意地でも覚える気がないようだ。

「ちなみに、ちやちな爆弾なんか、2秒で外したからな」

片手を挙げると、雑音が発射の構えをとる。

「……バババ、バレてた」

テトがうるたえた。

「マスターどうしましょう？」

「オレに聞くなッ」

カチツ。

雑音がトリガーを引いた。

瞬間、

ぼんっ

アンチ・Yフィールド・ガンが軽い爆発音を出して、ぶっ壊れた。

「やりました、きききき……」

テトが意地の悪い笑みを漏らす。

「何が起きた？」

「ルコたんたちが取り外したのはダミーです」

テトは、さつと無表情に戻って答えた。

「ホントは回路をいじって撃てば暴発するようにはしました」

「……ホント、悪いな、おまい」

「わーい、誉められたあッ」

「いや、誉めてねー」

「ちっ…このおッ」

雑音が頭を片手で押さえながら、ポケットをまさぐった。

何かを取り出し、放った。

「あれは!？」

名古屋が呻く。

「トナルトを閉じ込めたカプセル?!」

「え、でもカプセルは保管庫に…」

「ダミーだ」

オレは言った。

テトがやったと同じ事をルコたちがしないと限らない。

むしろ、そう仮定すべきだ。

カプセルは地面に叩きつけられて、割れた。

むおーん。

てな効果音がして、

「ゆゝき百倍ッ、ルンルンラーッ!!!!!」

トナルトが復活した。

*

「むふーん、全国のアクトナルトファンの皆様、おまたせしました

アッ！！」

ちなみに『悪と成ると』とかいうらしい。

悪の国から全人類を悪に改造するためにやってきて、まずは衣食住の食を征服ッ！　とかいう設定らしい。

「ハンヴァーガーがッ！」

トナルトの手にどつからともなく、ハンバーガーが出現した。

野球のピッチング・フォームのように投げる。

狙いはテトだった。

「アイヤァッ」

テトが叫んだ。…中国人か？

とか言ってる場合じゃなく、テトはハンバーガーごときを食らってひっくり返った。

あ、パンチ…？

「正義のネギ撲殺ッ！」

ぐばしっ

「ぶっ…」

ミクがオレをネギでぶっ叩いた。

……いや、敵あっちだろ？

「こい、ハンバーガー野郎ッ！」

ミクはネギを両手に握り締め、サイドに構える。
バッターかよ。

「ふ…始球式にも出た……夢を見たことのある、このトナルトに挑戦とは！」

……夢見てんのかよ？

困った、ツッコミが追いつかなくなってきたぞ。

「見てないで、ヤツらを片付けろよ！？」

ルコが仲間を睥睨した。

マコ、ルナ、雑音がビシーツと背筋を伸ばしたかと思ったら、弾かれたようにこちらへ向かってくる。

「みんな、下がってて」

ネルが言って、前に出る。

迎え撃つ気だ。

「身体能力が最も高いのは多分、マコだよ」

ネルはマコを相手に定めたようだった。

「じゃ、私はルナを……」

ルカも迎え撃つ気、満々で仁王立ち。

……って、いつも仁王立ちか。

あ、睨まれた。

こえー。

「私も及ばずながら加勢……」

ハク姉さんが軽トラの荷台から棒切れを取り出す。

ちょうど三本。

ネルとルカに渡す。

「わたしたちも行くわよ？」

「おーッ」

リンレンが意気込んだ。

ちみつ子たち、ほどほどに頑張れよ。

「ロードローラー、ロボ形態！」

リンが叫ぶと、ロードローラーが変形。ロボになる。

「この間の弱点は克服したもんね！」

見れば、ロボの形が変わっていて、重心がすごく低くなっていた。しかも四足だし。

…… あんなデカイローラー、どこいったんだろ？

「食らえ、巨無霸^{ビッグマック}ーッ！」

トナルトが巨大なバーガーを投げた。

「なんの、人類の夢を乗せたネギ・バズーカッ……！」

ミクが緑の光に包まれたネギを振るった。
……いや、乗せてないから。

キンッ

ネギなのに金属音が響いて、ハンバーガーは星になった。

「なッ…なんだとうッ!？」

トナルトは、がくつと両手を地面に着いてしまっ。

「スキあり、ネギ教育的指導ッ」

ミクの周囲にネギが浮遊し始める。

その数、8本。

「ネ、ネギがッ…」

「涅槃へ帰れ、タマネギ信者ッッ」

ミクがトナルトを指差した。

びゅん。

8本のネギが飛び、トナルトを撃った。

「ぐわっ…せっかく開放されたのに……」

トナルトは最後は、ぱっとなないセリフを残して、すーっと掻き消えて行った。

さんじゅつろくばん

きん。

ネルは棒で手裏剣を弾いた。

マコは、一気に3本を打ち出す達人以上の腕前だ。

が、複数本を打つ飛び道具というのは、どうしても1本1本の力が弱くなる。

見極めれば、かわすのはそう難しくない。

『実は、手裏剣つてのは上下に打ち分けるのが得策だ』

ネルは頭の片隅で師範の話を思い出しながら、間合いを詰める。

マコが次を打ち出そうとした時には、

ぶんッ

ネルは、袈裟掛けに棒を叩き込んでいた。

マコは思い切り背をそらせ、後転して避けた。

「ちっ」

思うまもなく、足払いが来た。

マコが動きを止めずに両手を着いて回転、中国武術でいう後掃腿
ってヤツだった。

体勢は立て直せていない。

ネルは思い切って跳躍した。

マコの脚が空振りする。

が、空振りするや、マコは身体を反転させた。動きの途中だとい
うのに。

空振りした脚を着地させ、反対側の脚で蹴りに来る。
着地の瞬間だったので、ネルはかわしようがなかった。
「ぐっ……」

脇腹の辺りに食らって、後退る。

しゅッ。

マコは手裏剣を打ち出した。

ネルは棒を眼前に構えた。

幸い、命中打はなく、手裏剣は全部空を切った。

「……ネルちゃん、あなた、術技を有してないわね？」

マコは訊いて来る。

彼女が、手裏剣を同時に3本打つのは、あらかじめ相手の回避行動を見越してのことだった。

最初は普通に打ち込んでおいてから、突然、思わず、かわしたくなるタイミングを狙って打つ。そういう類の術だった。

下手にかわそうとすると、どれかに当たらざるを得ない。

そういう間隔を取って打っている。

いわば、対達人用の技なのだ。

それがことごとく外れた、ということは相手は素人な訳だ。

「……」

ネルは答えない。

「ただの道場格闘技、もしくは護身術の範疇を出ない……」

マコは笑っていた。

「……まずい。」

相手に主導権を握られる。

ネルは直感したが、事実そうだった。

「……だからどうだったの？」

ネルは虚勢を張った。

「時間をかけて修得して、その程度の事しかできないんじゃないやあ、無駄でしょ？」

「……」

今度はマコが答えない。

「もつと時間を短縮して戦えるように仕込むってのがウチの師匠のやり方なんでね」

「……（怒）」

マコは怒ったみたいだった。

「上等じゃんッ」

マコは虚空から、何かを取り出した。

日本刀……いや忍び刀ってヤツだった。

鰐がデカく、鞘に補強がしてあったりする、例のヤツだ。

「斬ッッ」

マコは抜き様に一刀をくれた。

ネルは、それにあわせ、さっと身を沈めた。

狙っていたのだ。

だから、相手を怒らせ、先に攻撃をさせた。

怒りはたいていの場合、雑さと呼ぶ。

上空で空気を斬る、ひゅんという鈴の音のような音がした。

ネルは内心、ぞっとしつつも棒を振った。

短くコンパクトに振り出す。

カウンターのタイミングで、マコの脚へ叩き込まれた。

「うつ……」

マコは小さく呻く。

一瞬だが隙ができた。

ネルは棒を放しつつ立ち上がり、相手に肉薄。

刀を持つ手を巻き込みながら、マコを背負うように投げた。

どさっ

マコは背中をしたたかに地面へ打ち付ける。
硬い地面だ。

瞬間、マコの呼吸が止まった。

ネルは寝技に持ち込んだ。

練習では何度もこなした動きだ。

相手の腕を取り、誘導して、固める。

マコはくると身体を返され、うつ伏せに腕を極められてしまった。

「は、はなセツ……」

抵抗するが、そんなのは折りこみ済みだった。

ネルは体重を掛けて取り押さえたまま、コードを取り出した。

ジャックをマコの首の後ろのコネクタに差し込む。

ダイブ・イン。

そこからはネルの独壇場だ。

1秒もしないうちに、マコは意識を失った。

*

ハク姉さんとルカは棒を振るって対峙していた。

ルナと雑音は虚空からそれぞれの獲物を取り出していた。

ルナはロングソード。

雑音はネギ。

「……物質創造ってヤツかしら？」

ルカはつぶやく。

「ルカさん、ここは時間稼ぎを……」

ハクは、ちらりとルカを見る。

「分かったわ」

ルカはうなずいて、

「ルカルカ フルスロットルッ！」

棒を高らかに振り挙げた。

桃色の光がルカを包み込んだと思いきや、ルカの手にした棒が黒い剣に変わっていた。

「さあ、来なさいッ」

「無駄に派手な女ッ！」

ルナが叫んで、ロングソードを叩き込んできた。

ルカはそれを受ける。

「さっさと消えろ、ツマンネ女ッ」

雑音も叫びながらネギを振るった。

闇色のエナジーがネギを覆っていた。

「ツマンネ、言うなーッ」

ハクは半泣きで、それをかわした。

*

オレは、ルコの正面へ立った。

リンレンがガードとして着いて来ている。

ロードローラーロボも一緒だ。

かなり心強い。

「年貢の納め時だな」

オレは言った。

ちよっち緊張するけど、言わずにおれない。

「……」

ルコはじつとこちらを見ている。

「ボカロたちから出て、元の世界に返れば見逃してやるが？」

「断る」

「じゃあ、続行だな」

オレは続けた。

「神はアダムの肋骨から、もう一人の人間、エヴァを作ったっていう」

「……？」

ルコは怪訝な顔。

「お前もマコたちを作るのに、無から作り出したってことはないよな？」

「……」

「多分、自分の身体の一部を使ってる」
そう。

だから、あの時、製造元でルコは何もなかった。
いや。

しなかったのではなく、できなかったのだ。

頭数を揃えようと仲間を無理に捻出したため、己の身体から一部を取ったため、戦闘に耐えうる事ができなかったのだ。

「今もそうだと思うか？」

「お前がこの瞬間に何もしないのが、その確たる証拠だ」
オレは断言してみた。

間違ってたなら、こえーけど。

「だとしたら、どうする？」

ルコは、オレを睨んだ。

「それだ」

オレはうなずく。ルコは無視して。

「話は変わるが、この前のお前の曲な」

「……スコッ」

ルコは軽く肩を落として見せた。

……案外、付き合いがいいな。

「あの程度じゃあ、メタルの何たるかは分かってないようだな」
オレは挑発するように、薄ら笑いをして見せた。

「なんだと？」

ルコは結構自信があつたのだろつ、珍しく感情を剥き出しにして
いた。

……よし、釣れた。

「だから、今日は特別にオレが見本を見せてやる」

「面白い」

ルコは、「やれるモンならやってみろ」って顔をした。
分かりやすいな。

「ミクッ」

「はい、マスター！」

ミクがネギ背負つてやつてきた。

うげ、何で8本も背負つてる？

っーか、宙に浮いてる？

……ファンルかよ。

「行くぞ」

「はいーッ」

ミクは目を閉じて、精神を集中した。

「へんしーんッ！」

魔女ツ娘かお前は？

つてな勢いで、緑の光に包まれ、ミクの外見が変化する。

髪の色が青っぽい銀色になり、服もピンク色になる。

目の色は赤へ。

全体的にメタリックな色調へ変化した。

メタルミクだった。

「メタルの天使、メタルミク参上ッ！」

……ホントは意味違うけど。

「じゅー、きゅー」

ミクはなぜか、カウントダウンを始めた。

長すぎだろ、それ。

「はちななろくごーよんさんにいちゼロッ」

ミクって、やっぱアホの子だ。

ロードローラーのスピーカーから、曲が流れ出した。

土砂降りのような怒涛のドラム。

やっぱり隠れて聞こえないベース。

ヘヴィーなギター前奏。

難しいテクは要らない。

問題はリフだ。

いいリフが出来たら、それは90%以上いい曲になる。
ルコには、そこが分かってねえ。

「あー！」

ミクがシャウトした。

あー！

あー！

あー！

難しい心 跳んで 水溜り

意味を探して 意味なんてなくて

狂った魂 死んで 血溜り

ゴミを捨てて とにかく捨てて

探すな 意味を 何の意味もない
求むな 意味を 反対にしたらMIYI

何かそれっぽいじゃない
どうしてそんなことを？
意味なんかない

石ころを蹴った
シャウト

トンガラシ

シカウマシカクマ？

納豆

コーヒー

納豆

かけるのサイコー

一二三四五六七八急二死亡
平成昭和 大正明治モ ナガ
昨日 今日 明日 漁ってメタボ
うわああああああ！

心の中に 存在する
意味のなさ ボクのウザさ

トナルト並に　ウザッ
追い出したい　それを
でも　できないんだ
何でかって？

教えない！

ガガガガガガ…。
ギターが大音量で流れ出す。
ひたすら引き続ける。
リフレイン。
リフ。
繰り返すからそう呼ばれる。

「教えないツツツ！」
ミクは最後に絶叫。
曲がピタツと止まった。
うーん、呆れるほどの切りの良さ。
余韻ゼロ。
コアなノリなら外せない。

さんじゅうななばん

「どうだッ！」

「どうよッ！」

オレとミクがルコを見やった。

「くっ」

ルコは明らかにダメージを受けていた。
精神的に。

「だから、なんだと言った？」

それでも、ルコは持ちこたえたようだった。

……うむ、打たれ強いね。

だから、2曲用意したんだけど。

「じゃ、次、行こう」

オレはあつさり言った。

「え？ 今の、前座？」

ルコは素で訊いた。

想定外だったみたいね。

「そうだ、露払いだ。ミク、ネルの曲をッ」

「はいーッ」

ミクは、「ラジャッ」て感じて敬礼して、

「ネルちゃん、行くよ！」

叫んだ。

ロードローラーから、打って変わってシンセが流れ始める。

ちよっち切ない系の曲だ。

オレ、メタル曲作って、あんま関わってないから、よく聞いているんだよね……。

「えっ……あの、もう……？」

ネルは赤面しながらも、急いでミクの隣へ駆けしてきた。

うはwwwおkwww

「ハク姉、行くよ！」

「はい」

ルカとハク姉さんも、ルナ、雑音を放って駆けつけてくる。

「え、こら……ッ」

「な、なによ、こいつう……ッ」

ルナと雑音が背後で喚いたが、ガン無視だった。
リンレンもスタンバイ。

らー

全員、音あわせから入った。

曲流れてるんだけど、既に……。

ま、前奏だからいいか。

……あ、テトがまだ寝てる。

「イン……ザ、スカイ……ッ！」

ネルが歌った。

メインボーカルはネルらしい。

FLY

いつも思う 飛べたらいいと

FLY

いつかそう 飛びたいね 空へ

あの澄み切った空へ
翼 伸ばして (I u u u u u -)

駆け巡ってみたい
鳥のように (I a a a a a -)

IN THE SKY (IN THE SKY)
わたしの気持ち 乗せて飛び立て
雲ひとつない 澄んだ世界へ

TO THE SKY (TO THE SKY)
あなたの気持ち 確かめたくて
お日様くれた 暖かな世界へ

ミク、ルカ、リンがネルに追隨して歌い、
レン、ハク姉さんがコーラスを担当していた。
『うう……』
まずルコが呻き始めた。
苦しそうにしている。

間奏。

ピアノをメインとして、ベルの音をふんだんに使用していた。

何だか、教会にでも来たかのようなクラシック色の強さだ。梢
つてこういうの好きなんだな…。

『あうあ…ッ』

『ぐう…ッ』

『うええ…』

雑音、ルナ、マコが呻き始める。

でも、もっと畳み込まなければ。テトを戻した時は怒涛の流れだ
つたから良かったのだ。

「……って、テト！」

オレは忘れそうになつてた。

すぐにテトを起こしにかかる。

「起きろ、もう大詰めだぞ！」

「……うゝん、もう食べられにやいゝ」

ベタな寝言を言つてますな…。

「かあちゃん、カンベン」といい勝負だ。

「おい、起きろよ」

「………はにや？」

テトは、何とか起きたようだったが、ぼけーつとしてる。

「うわ、ばつちし寝ボケ中www」

「君は実にぶいーんッ」

テトはいきなり両手を広げて飛行機のマネをした。

……こわれた？

ハンバーガー如きで？

「I N T H E S K Yゝッ」

今度は、コーラスパートを歌いだした。

うん、コーラスには定評あるね、テトは。

「ほら、早く歌てこいッ」

「はゝい。マスターのご用命とあらばッ！」

テトは敬礼して、ばびゅーんと駆け出した。

「テトちゃんのおなりゝッッ」

テトは翼を出して空中浮遊した。
……自分で言うな。

あー わたしはテト テトペッテンソン
誰よりも可愛い ツンデレロリボイスなの

……勝手に歌ってる。
大丈夫か？
主に頭方面…。

でもね 年は聞かないで
お願いだから お願い

チュクチュクしちゃうの
ってウソだけど

……なんかメチャクチャだな。
でも、これってテトが目覚めたときのシチュエーションに似ているかも。

「あゝ、こら、何、勝手に歌ってるの!？」
ルカが文句を言い出した。
「それなら、私だって!」
んで、当然のことながら、ルカは歌い始めた。

私はルカ ルカ様とお呼び！
なんちゃって

みんなは ドSとか呼ばれるけど
そんなことないの ホントは可愛いシャイな娘なの
ただ 海外留学経験があるだけ
Singer Song
シュガー ベイビ…

「あー、わたしだつてーッ」
リンが、ルカの歌を脇からボキッとへし折った。

リンリンと呼んで
みんなのリンリン
一番可愛い
わたしが一番
だいたい 二十歳過ぎたバ アとか
なんなの 十六歳以上の育ちすぎやら
もつとも 幼くて可愛いのは十四歳

リンリンリン
リンが可愛い 絶対絶対可愛いの！

「ちょーっとオ、待ったあッッッ」

レンが割って入った。

「あ、こら、レン、あんた何割り込んでんの!?!」

「ボクだって、やればできるんだッ」

レンは意気込んだ。

リンのことはガン無視。

高音!

モ ナガ(明) も歌てるよ

ボクは ボクは ボクは

「ボクボクうるせー、木魚でも叩いてる厨房ッ」

ルカがレンを押しつけた。

「ぐふっ…ひどい…」

レンは吹き飛ばされて、地面に転がった。

なんか力オスって来たな…。

「ネルちゃん!」

「うん、ミクちゃん!」

ミクとネルだけが、何かを決意したかのような表情でうなずき合
う。

なんだろ?

らららー

らららーららー

……あ、聞いたことない曲だ。

何時の間に。

会いたくて 会いたくて 会いたくて
それは いわゆる ラブソング

（前奏）

晴れた空 君の横顔 雲に描くよ（WOW WOW）
思い出し 笑う あの日のひと時

晴れるかな わたしは 天に祈る（WOW WOW）
ガラス越し 見える 君の横顔

フルカラーの スナップ 心のアルバム
シャープな写真 思い出の写真

いつも胸の中で
そつと取り出し
こっそり見てるの

会いたくて 会いたくて 会いたくて
それは いわゆる ラブソング

気づいたら、リンレンもルカもハク姉さんもテトもその曲に合わせて歌っていた。

チームワークあるんだかないんだか…。

いつも胸の中で
そっと取り出し
こっそり見てるの

会いたくて 会いたくて 会いたくて
それは いわゆる ラブソング

皆でフレーズを繰り返す。

「うわぁ…ッ」

マコが頭を抱えて転がり出した。
身体の中から、黒い霧のような物が噴出し始めている。

「会いたくてー、会いたくてー」

ルナがつられて歌い出していた。

「あたしは歌いたくないーッ」

雑音はシタバタと抵抗している。

黒い霧のような存在が離れたすのは時間の問題と言えた。

「ぐう…ッ、このまま帰ったりするもんかッ！」

ルコはまだ抵抗していた。

暗闇と暗黒はどう違うの
どっちも同じやん

ツツコミ入るけど

それはたいした問題じゃない

……まだそんな力が残ってるのかよ。

しかも今度はダークな感じのスローバラードか。
ちよつとは進化してみたいだ。

「ぎゅいゝん！」

テトが叫んだ。

「さあ、ここらでいっちょー、ネギダンスッ」

「ええー！？」

ミクが驚いた。

……打ち合わせなしでやってんのかよ、こいつ。

ミクとネルのラブソングまでは打ち合わせてたようだが。

「ネギネギネギッ」

ぶぎゃーッ

それでも、ミクはアホの子らしく、両手をぶんぶん振り回した。

「みんなネギ持ったあー？」

「……フイーッ」「……」

何故に、往年のスタンハンセン？

あの独特な手の形だな。

ネギ邪魔だけど。

ネギネギネギネギ　ネギダンス

みんなもネギ片手に　さあどうぞ

わっしよい　わっしよい　わっしよい　わっしよい

ネギダンス！

……バカだ。

……アホの子だ。

こいつら、ネギで何、遊んでんだ。

「ぐは……っ」

ルコは、歌のエネルギー的にも、歌のバカさ加減的にも打ちのめされた。

最後の一撃ってヤツだった。

どおおおおおん！

雷にも似た轟音が鳴り響き、

しゅわわわわー

黒い霧がルコの目、鼻、口から噴出した。

捨て台詞はなしだった。

ルコ、マコ、ルナ、雑音の中に巣食っていた悪魔は、元の異次元世界へ帰っていった。

さんじゅうはちばん【いろんな人たちのエピソード】

「おう、鳴瀬君。見たぞ、君たちのPV」

「はあ……」

オレは曖昧にうなづく。

何とも言えない表情をしていることだろう。

ちなみにガツコである。

「すごいねえ、SFX駆使してあそこまでの映像を作り出すなんて講師の一人だった。」

この人、多分、趣味ネットサーフ。

「ありがとうございます」

オレは会釈。

今頃はネルも同じような目に会ってるだろう。

実は、ルコたちとの一戦を誰かがビデオに撮ったようなのだ。

sonde、それがマイ動画をアップする系のサイトにupされちまったのだ。

ホントは何もいじってないリアルそのものの映像なのだが、もちろん誰も信じるわけなく、SFXを駆使したPVとして認識されてしまったようである。

「また撮るんだろう？ 楽しみにしてるよ」

過剰な期待が寄せられた。

ネルと一緒にアパートへ帰ると、

「うん、ありがと。でもそれね……え？ いやね、それはね……」

ミクが携帯で誰かと話していた。

「……あうー、あうー、あうー、うん、うん、じゃあねー……ふー」

ミクは携帯を切ると、嘆息。

「どうした？」

「あ、マスター。お帰りなさい」

ミクは何とも言えない表情のまま、言った。

「お帰りなさい、あな……マスター」

テトはまだ居座っていた。

ミクの「ぶつ殺す」って視線を受けて、言い直す。

……冗談だよな？

「あのね、小村井ミクちゃんから電話……」

「なんて？」

オレの脳裏に、コンテストでのすげー歌唱力のミクの姿が浮ぶ。

コンテスト以来、交流があるみたいだな。

「うん、ネットで映像見たんだって」

ミクは困惑。

「すっごく褒められたけど、でも、あれ演技じゃないし……」

「あー、ミクちゃんもかあー」

ネルが着替えを終えて、オレの部屋に入ってくる。

もはや、ボカロ一家の茶の間だな、マイルーム。

「あたしも、ガッコで聞かれまくったよー。つかっだー」

最後だけなぜか訛りが……？

東北弁？

「みんな同じかよ」

「え、マスターも？」

なんて会話をしてると、

「ご機嫌いかが、エブリバデーッ!？」

ル力がやってきた。

何かハイだな。

「ホホホ…私の実力も遂に認められたようですわッ!」

右手を口の前に持ってきて、左手を腰に当て、ル力は高笑い。

やっぱ、映像見た友達とかから褒められたんだろうな。

……っーか、この調子で、どんどん女王様になってください。

「女王様違っわ!」

「うはwwwおkwww」
「ち、キモヲタめッ」

*

で、ルコたちは社会復帰のために製造元に戻った。
いや、悪魔に憑依されてた時の記憶はなかったんだけど。

マコ、ルナ、雑音ミクは名古屋たちが作ったボカロではないけど、
ルコを元に行っているの、基本構造は同じだったとか。

本来の人格が目覚めたんで、一から一般常識なんかを学び始めて
みたいだ。

ミク、リンレン、ルカのように販売を前提にしたボカロじゃない
ので、当面はデータ収集のためのテスト機として色んなことをやら
されるらしい。

「ふっふっふっ……これを見たまーい！」

名古屋が眼鏡をきらりと光らせる。

テトの時と同じく大きなカプセル状の入れ物には、ゴシックなド
レス姿のボカロが横たわっていた。

赤い髪。

帽子を載せてる。

スカートにリングが入っていて、中世の貴婦人か！？……ってな
感じだ。

ちなみにカプセルを運んできたのは、ハク姉さんだ。

裏方させたら天下一品だな、このヒト……。

「なんと、《波音リツ》だッ！」

「うっ……あのVIPPER釣り企画第三弾の！？」

……っーか、体重25tだったよな？

「へー可愛いねー？」

ミクは、笑顔でリツを覗き込む。

「男の娘とかいわれてんぞ」

「…え？」

「6歳だし」

「…へ？」

ミクは固まった。

「でも、『ふたり』よりはいいよね」

テトが言つと、

「テト姉、今、何か聞こえたけど？」

何時の間に来たのか、ルコが190センチの上背で凄んだ。

「君は実にバカだなあ」

テトは誰もいない空間を向いて、ごまかした。

「おーじゃ じゃ じゃ ッ」

「お やまんがー」

ルナとマコがコーラス。

…古ッ。

っーか、どういう意味だ？ 分かん感性だ。

「ミークちゃん」

雑音ミクが、ミクの側へ寄ってきた。

「あのね、ネギにコチュジャンつけて食べるとおいしいよ」

「へー、今度試してみるよ」

……ネギで盛り上がるの止めてください。

*

「次回のコンテストは、みんなでチーム組んで出ようぜ」

梢が言った。

もちろん、例の映像を意識しているのだ。

「あのクオリティーなら優勝間違いなし！」

「そうかも」

「でも、あのアドリブを出すには、ミクはあがり性すぎかも」

「あうあうー」

「ロードローラーちゃんは？」

リンが、目をキラキラさせながら訊いた。

「いや、それ、危な過ぎだろ？」

梢がダメ出し。

「やだもん、ロードローラーちゃんの変形シーン、みんなに見てもらうんだもんッ」

リンは泣きそうになっていた。

忙しいヤツだ。

「レンも何か言ってるやんなさいよ！」

「いや、ボクは……」

レンは興味なさそうだ。

というか、恋の悩みでそれどころじゃないって顔だ。

……はよ、告れ。

「そっぴや、誰なの、レンの意中の人って？」

当の本人のネルが盛り上がった。

「……」

「……」

「……いや、それは……」

みんなは正反対に盛り下がる。

視線を合わせないようにしていた。

「え、なにになに？　なんで、引いちゃうのー？」

知らぬが仏だな。

*

ネルは、服役中の別ネルたちを訪ねていた。

面会はこれで何回目だろうか。

あの後も、ヒマをみつけては会いに行っているのだった。

「あのさ、今日はサプライズっていうか、あの……ちょっとみんなに聞いてもらいたいんだ」

ネルは、ちよつとうつむき加減で、ごによごよと言った。

「はあー？ もっとおっきな声で言つてよ」

「ねー」

「うん」

別ネルたちは、気だるそうにツツコミ&相槌。

このチームワークでネルを圧倒してるんだろつ。

「……」

ネルは一瞬、押し黙ったが、

「てゆーか、聞けよ、こらあッ！」

いきなり、でかい声を出す。

キレたとも言つ。

「うわ、びっくりした……」

「なんなの？」

「ねー」

別ネルたちは、ビクツと震えて、思わずお互い抱き合ってしまった。

「今から、おまいらにささげる歌を歌ってやる。心してきくよーに」
「へ、歌……？」

お（C4）

ま（D4）

い（E 4）
ら（F 4）
よ（G 4）
く（B 4）
き（A 4）
けー（C 5）

ネルはどっから出したのか、ごてごてした、ふとましいマイクを手にしていた。

往年のカラオケマイクってヤツだ。

「GO!」

ドアの向こうでスタンバっていた、ボカロ一家が、だだーと面会室へなだれ込んだ。

ネル専用コーラス部隊だ。

ネルは、ちょっとソリッド感のある声で歌いだした。

朝日差し込む アパートの部屋
おはようって お日様に言っの

いつもの 朝ご飯
いつものように 身支度

登校するの

そうよ あたしはピッチピチ女子大生

夢見てた フツーの生活（S E I K A T S U）
学校に 友達がいて
一緒に 遊んだり（A S O N D A R I）
慌てて 宿題片付けたり
そう フツーの 学生ライフ（L I F E）

あたしの夢 きつと叶えたい（K A N A E T A I）
きつと叶えて みせる…
誰でも もってる夢 それは希望（K I B O O）
希望を もてば
勇氣 沸いてくる（W O W W O W）

そうよ 100%充実ライフ

ネルは歌い上げて、しばらく目を閉じていた。
余韻が残っていた。
けど、

「……ぷッ」
「……ぷぷーッ」
「なにそれ、ぶわははは…」
「100%だつて」
「今時、そんな単語使わねーよ」
「もしかしてネタ？」
別ネルたちは爆笑。

「あ、あれ……？」
ネルを始めとするボカロ一家は、啞然。
……あうー、笑われちゃったよ。

ネルは意気消沈、がつくりきっていた。

……この分じゃ、また泣いちゃうなあ、あたし。

「わははは」

「おっかしー」

「うぷぷぷ…」

別ネルたちは笑い続けた。

ネルはうつむいた。

惨めな気持ちになっていたが、

「わははは……は、はれ？」

別ネルの一人が急にヘンな声を上げた。

「なに、これ？」

「なんだよ、どうしたのさ？」

「お前こそ、何だよ？」

別ネルの一人が言った。

「目から汗流してさ…」

別ネルは泣いていた。

笑いながら、泣いていた。

「あ、あたしも、何か目から溢れてきた…」

「なんだよ、おまえ、おっかしー」

茶化す別ネルも、涙が溢れていた。

やがて、笑い声は止み、すすり泣きが聞こえてきた。

*

「あいつらが出所したら、とりあえず、あたしが身柄引き受けようと思うんだ。」

うるさくなると思うけど、みんなカンベンな」

ネルは、ちよつと済まなそうな顔で言った。

「いや、オレらもうるさくしてたから、お互い様さ」

オレはうなずいた。

ネルは芯が強い。

ミクと同じくらいに。

「あのな、わたしはホント言つと、お前のこと好きだったんだ」

梢が爆弾発言をした。

酒が入っている。

「わゝ、告つた、告つたあゝ」

やっぱり酒が入ってるネルがやし立てた。

……やめれ。

「わたしもマスターが好きですうゝ」

テトが対抗して叫んだ。

……ち、31歳め。

「キメラなら15歳ですつてば！ 君はバカバカどうしようもないバカ、中国語だとシャーズですたい！」

「外国語か方言かどっちかにしろつて、きやははは……」

ルカ（笑い上戸）が言った。

「るゝるゝるるゝ……」

ハク姉さんは、また何かあったのか、泣き上戸。

……何だろ、オレをいじめる会かなんか、これ？

「とおりやあああつ！」

ドアを突き破らんとばかりに開け放つて登場したのは、レンだった。

レン？

あれ……？

何で、背が伸びてんだ？

黄色いから、ぱつと見、ネルの男性版ネロ君かと思ったぞ！？

……ボカロの能力発揮か？

「なんだよ、おまい？」

「おおお、オレと付き合ってくださいッ！ てか、好きですッッ！」
意を決して、レン（ネロ？）は告白した。

花束を差し出した。

相手はもちろん、ネル。

「えッッッ」

ネルは顔を真っ赤にしてうろたえる。

「あうあうッ」

何だか、アホの子みたいだった。

*

「あー、びつくりした」

ミクは、どこか楽しんでるような表情で、言った。

酒盛りはお開きになって、皆、帰ってしまっていた。

テト一人だけが、ぐでーっと伸びている。

普段から酔ってるみたいな娘だから、酒が入ってもあんまり変わらんのな。

「マスター……」

ミクがちよっと頬を赤らめて、オレを見た。

おおっ。

こりはラブなシーンはおk！……ってヤツでしか？

「ミ、ミク……」

オレはミクの手を握った。

なんか久しぶりだなあ。

⌈
⋮
⌋

ミクはすつと顔を上げ、目を閉じる。
オレたちはキスをかわした。

「……ずるいです」

声がして、

「うわっ」

「あつ」

オレとミクは飛び上がった。びっくりさせん。

「わたし、テトペツテンソン略してテトちゃんもキスを要望します」

!

「いや、それは……」

「キスしたい、キメラ〜〜〜ッ」

テトは、オレに抱きついてきた。

「ダメ〜〜〜〜ツツツ！！！！！！！！」

ミクが絶叫した。

おわり。

さんじゅうはちばん【いろんな人たちのエピソード】（後書き）

この話で完結です。

読んでくれた皆様、ありがとうございました。

ボカロの面々は個性豊かで非常に書きやすかったです。

また何か思いついたら続編書こうかと。

いつになるやら分かりませんが。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2395i/>

はちゅね H I G R A D E

2010年10月8日12時43分発行